No.43447

小崎弘道著

增補再版 政教新論

附錄 基督教ヲ信ズルノ理由

東京 警醒社發兌

再版政教新論序

我國今日基督教ノ位置タル有望ノ者ト言フベシ之レト同時ニ又危殆ノ者ト言フヲ得ベシ二十餘年前ノ往時ヲ顧ルニ外教ノ禁極メテ嚴ニシテ其徒ヲ待ツニ死ヲ以テセリ維新以後世運一變シ宗教自由ノ說漸ク行ハレテ基督教徒其信仰ヲ公言スルヲ得タリ然レ𪜈其初ニ當リテハ世人之ヲ怪視スルニアラザレハ之ヲ輕賤シ啻之ヲ度外ニ置クノミナラザリシニ近時ニ至ルニ及テ宗教ノ人類ト離ル可カラザルノ理ヲ說ク者出デ、世人ノ觀念爲メニ一變シ基督教ニ屬目シ此ニ其社會ヲ動スノ力アルヲ發見シ仔細ニ之ヲ觀察シ始テ勢

力ノ至大ナルヲ感ズルニ至レリ今ヤ全國基督教ノ信徒一万餘人ニ過ギザルモ將サニ隱然日本社會ニ重要ノ位置ヲ占メントス後來益々其數ヲ增加セバ其勢力果シテ如何ゾヤ是レ予ガ其位置ノ後來ニ望アリト言フ所以ナリ然ルニ其一大勢力トナルナラントスルノ時期ハ之ヲ假用シ世事ヲ經營セントスルノ人ヲ生ズルノ時期ニシテ是亦免レザルノ勢ト言フベシ夫レ眞神ニ事フルノ心ヲ推シテ人事ヲ行フニ至ル者之ヲ宗教ノ感應ト言フ之ヲ以テ社會ニ對セバ以テ純潔ノ業ヲ遂グベク之ヲ以テ政治ニ施セバ以テ正大ノ治ヲ爲スベシ宗教ノ社會及ビ政治ニ關スルノ効是ニ於テカ正

且大ナリトス若シ夫レ宗教ノ勢力ヲ假用シ之ヲ以テ自家ノ目的ヲ達セントスルニ至リテハ是レ神道ニ托シテ人事ヲ成サントスル者ニシテ其第一念既ニ正ヲ失ヘリ何ヲ以テ正當ノ感化ヲ他ニ及ボスヿヲ得ンヤ却テ將ニ無限ノ災害ヲ社會ニ生ゼントスルナリ之ヲ宗教ノ逆用ト言ヒ之ヲ政教ノ混同ト言フ而シテ今日有望ノ時期ハ即チ此逆用ヲ試ミントスルノ人ヲ生ズルノ時期ナリトス是レ予ガ危殆ノ者ナリト言フ所以ナリ曩ニ愛兄小崎弘道君政教新論ヲ著シ政教相關ノ理ヲ闡明シ其情勢ヲ證擧シテ其書大ニ世ニ行ハル頃者又之ヲ再刊セントシテ序ヲ予ニ索メラル基督教ノ

今日ノ勢力ヲ致セルハ是等ノ著モ亦與リテ功アリトス嗚呼宗教ノ正念ヲ理解シテ此書ヲ讀マバ其人事ニ及ボスノ大勢力ヲ見認スルヲ得テ又其正當ノ用ヲ盡スヲ得ン哉

明治二十一年三月

序交　島田三郎識

再版政教新論に題す

余が小崎君と相知る一日にあらず、回顧すれは余が明治八年熊本洋學校にありて、綴書を暗記するの時に際し、君は既に其業を卒へ、該校に在て後進を誘掖するの傍、ギゾーの文明史を獨習せり、明治九年余が西京同志者に遊ふや、君既に此處にあり、朝讀夕遊多くは君と與にせり、鴨河長堤翠楊の依々たる處、相國寺畔蒼松鬱々たる邊、皆是れ聯歩行吟の地にあらざるはなし、而して今や共に東京に在り、其趨向各異に、其議論時に或は相同じからざるも、恒に相來往し、讙然逆ふ莫し、余が小崎君と交る實に淺にあらざるなり、凡そ人生の天國は少

年の時にあり、紛々たる浮世の外に聳へたる、清白なる別天地(寮舎)に住し、同志同好の青年相團欒して、無罪なる生活をなすの樂に到りては、生涯忘れんと欲して、忘るゝ能はざる可し、今や余輩東京紅塵の中にありと雖も、倦鳥豈に故林を思はざらんや、孤燈明滅、人靜かに神澄めるの時に於ては、其想像概ね余輩を驅て、過去の境界に伴はずんはあらず、而して思ふて此に至る毎に、恒に當時の小崎君に思ひ及ばずんはあらず、

君の學校に在るや、敦厚老實敢て圭角を露さず、然れとも有爲の氣象、殆んと全身に溢れ、獨り自ら研修するを以て足れりとせず、後進の業を問ふものあれば、自ら勞

を惜まず、循々之を誘掖して止まず、余當時竊かに君か將來必ず卓然として樹立する所あらんを信したりき、而して果して信する所に違はず、君は明治十三年の春東京に出て、一書生の身を以て赤手を揮ひ、數多の困難と戰ひ、遂に今日の地位あるを得たり、思ふに君か此十餘年間に成就したる事業幾何あるか、余は一一之を枚擧せざるべし、然れとも現今基督教の勢力天下を風靡するに至れるもの、抑も上天の冥助とは云へ、氣運の然らしむる所とは云へ、若し此一大現象を以て人事に歸せんとせは、天下具眼の士は必らす小崎君を以て、此人事を盡したる一人なるとを認む可し、

小崎君は文學者にあらず、然れども基督教の文學を以て、今日の發達あらしめたるは、君も亦預て力なくんはあらず、現今基督教の諸君子には、雄辯を以て鳴る人甚だ少しとせず、而して其鉛槧の業に從事し、紙軍筆陣の上に於て勇將たるものは、植村正久君、高橋五郎君、其他二三君子に過ぎず、而して小崎君の如きは、即ち其一人なり、六合雜誌の創立より今日に至るまで、殆んと九年、而して君實に其發起者の一人にして、爾來今日に至るまで、其編輯の勞を取れり、基督教新聞の如きも亦た然り、此雜誌と新聞とには、或は編輯の事に預り、或は投書の勞を採りたるもの、前後少しとせず、然れども始終其

責任者の位置に立ちしものは、實に君を以て最とせざるべからず、

然りと雖も余は敢て小崎君を以て、文學者なりと云ふにあらず、蓋し現今我邦の基督教は、恰も創業の時節に遭遇せるものにして、「收穫は多く工人は少し」、去れは我邦に於て、基督教の傳導に從事するものは、其爲す所稍やロビンソン、クルーソーに類するものあり、小崎君の如きは其一人なりとす、或は牧師となり、傳導師となり、學校の教授となり、新聞記者となり、講談者となり、著述家となり、事務家となる、亦た何の遑ありてか「五日畫一水、十日畫一石」か如き、精妙なる工夫を出すを得んや、去

れは此書の如きも、百忙中匆々筆を採て稿したるものなれば、或は語て精ならざる所もあらん、或は自ら改竄せんと欲して、未だ果す能はざるものあらん、故に若し世の批評家にして、此書の欠點――若し欠點あるとを見は、必ず著者今日の位置を察し、幸ひに寛容する所あらざるべからず、

今や政教新論再版成るに臨み、余に一言を題せんとを望まる、誼辭すべからす、故に聊か余が君と交遊したる往時に溯り、著者現今の位置を述べ、以て讀者に諗ると此の如し、若しそれ書中の高論卓論の如きは、讀者之を玩味して必ず之を知らん、

顧ふに余や君と交る十餘年、君の學術、資行、年齡幷せて余に長ずるを以て、雪案螢窓、君が爲に裨益を受けたること、甚だ多きを覺ふ、而して今日に於て自ら省れは、頑骨依然、君に對して實に耻つる所なき能はす、今君が著述に題するに際し、慨然たると之を久ふす、

明治二十一年十一月初九

東京民友社ニ於テ　德富猪一郎

增補校正政教新論序

本書第一版ハ已に出拂ひ久しく品切となり居しが今度之を增補校正し卷末に附錄一篇を加へ再版するに至れり本書出版以來之を辨難批評するものなきにしもあらされども一も著者の論旨に變更を來すへきものあるを見ず今再び此書を出版するに當り別に言ふへき所なし唯前版と同しく弘く大方君子の愛讀を得我か新日本政教の方向を指定するに於て幾何の裨益を爲すあらんと是れ著者の偏に祈る所なり

明治廿一年十月　　著者識

序言

本書ハ政教論と題し曾て毎週新報及ひ基督教新聞に掲載せしものを大に増補校正し且つ他に一章を加へ之を完了せしものあり而して起草の日より完了の時に至るまて凡ろ二ヶ年餘の時日を經且つ往々時事に感じて論評を下せし所もあれハ或ハ今日の時勢に後れし乎と思はるゝ所あきにあらず然れども全躰の論旨に至てハ聊か時勢によりて變更すへきに非ず殊に我國現今の時務には最も適切なることゝ信ずるなり

本書立論の趣旨は我新日本を製出するに我從來文明の基礎たる儒教主義を廢し之に代るに基督教を以てすべしとするにあれハ寧ろ此書を名けて儒基兩教論と稱する方却て適當ならん歟然して之を政教新論と名けたるハ哲學上或は宗教上兩教を論下したるに非ず主として政治社會の一點より觀察を下したれハなり又之を新論と名けたるハ

著者自ら政教の關渉に付き一己の新説あるに非ず唯本書い泰西の政教論と異なり教理上或い政治上此二者の相關渉する所を説くに非ずして著者一己の新仕組にて我國從來政教の思想より之を觀察し社會上此二者の相響影する所を論したれバなり故に亦之を以て社會宗教論と名くるも可ならん歟

我國從來政教の思想を論するに當り唯儒教のみを論して弘く佛教の事に及ばさりし所以及ひ儒教を論せしも單に社會政治の點より論評を下し更に其哲學宗教の點に論及せさりし理由は本書の(註)に掲けたるか如し讀者幸に著者を以て一方に僻する者とする勿れ

本書文詞の拙陋ある且議論の不完全あるい著者自らの認む所にして偏に大方君子の容恕を請いざるを得ず今や此書を世に公にするに方り唯願ふ所い大能の神之に恩祐を下たし之を讀む者をして邦家開明の基礎は一に基督教に在るを知らしめ我國新文明の進歩に於て聊か

補裨する所あらしめ給いんことをあり

明治十九年四月上浣

著者識

政教新論目次

第一章　改革の時代（緒論）　一丁
第二章　我國政教の思想　九丁
第三章　儒教の性質　十九丁
第四章　儒教の利害（一）　三十丁
第五章　儒教の利害（二）　四十一丁
第六章　儒教用ゆ可らず　四十八丁
第七章　宗教道德の必要（一）　五十七丁
第八章　宗教道德の必要（二）　六十六丁
第九章　儒教と基督教　七十七丁
第十章　基督教と文明（一）　八十六丁
第十一章　基督教と文明（二）　九十五丁
第十二章　基督教と改良　百五丁

第十三章　教會と政府　百十三丁
第十四章　一己人と社會（結論）　百廿四丁
附　錄　基督教を信するの理由　百卅三丁

校正
增補

政教新論

小崎弘道　著

第一章　改革の時代（緒論）

我國長夜の夢を破りしより我邦人は初めて太陽已に天に中し世は早く文明の白晝なるを覺し舊然驚起し皇倉旅裝を着け文明世界に旅立し泰西の文物典章を我邦に輸入せんと欲し一時に從來の弊習を革め新なる泰西の文物典章を我國に輸入せんとせを務め從來孜々として兵制に法律に政治に經濟に工藝に學術に一とし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

史乘に未だ曾て其比類を見ざるところなり古來世界の大改革と稱するは佛國第十八世紀の大革命なりとす然れ共其歐洲諸國に及ぼしたる影響ところ廣大なれ其人民一般の風俗、慣習、宗教、工藝、其他日常の思想を變更したるの度に至てい我國今日の大改革と日

を同ふして語る可らず佛國の大革命も唯政治の改革のみならず幾分か社會の組織を變更して風俗宗教の變遷を來したるには相違あけれとも此變更變遷を來したる新思想は突然外國より闖入し來りたるに非ず又た其革命は唯其國固有の進歩が一時に激昂開發したるのみにして文明の元素他より新たに加いりたるには非るあり然れども我國の大改革は然らず啻に政治の大改革なるのみに非ず社會一般、風俗、慣習、宗教、工藝、學術、等其他日常思想の大改革なり思ふに此改革を來したる原因には或は内より來る者少らざるべしと雖も俄然海外より輸入し來りたる新思想、新事物、最も多きに居らん則ち此大改革い我國固有なる文明の元素が一時に開發したるには非ずして他より新なる文明の元素加いりたる者あり語を更へて云へは此改革は舊日本を毀ちて新日本を製造するものにして恰も舊來の家を打ち毀ちて其跡に新舊の材木を混合し新仕組の家を建築するに異ならず從來の風俗、慣習、文物、典章にして存するものなきに非ず然れども其存するや只其形態を變じて存するものにて一として舊來の儘に存するものはなし實に此改革は王政一新にはあらずして國家一新又は社會一新と謂ふべし吾人幸ひに生を此時

代に寄す豈に千歳の一遇と謂はざるを得んや

蓋し此大改革は米國の水師提督ペリーが浦賀に來りしを以て始めて其端緒を開き王政維新廢藩置縣にて政治世界の一大段落を爲したるも今日未だ其半途にも達せざる所なり所謂今日は此の大改革の時代にして吾人は現に此改革に從事する者なり人或は明治初年の維新廢藩を以て我國の改革は已に其局を結びたりと爲す者あれども是れ全く今日の時勢に暗らき人にして共に國家の大事を談ず可らず明治初年の維新廢藩は唯政治の一改革のみ此全社會大改革の一部たるに過ぎず殊に此政治の一改革も唯舊來の制度典章を廢し新制度を立てたるに過ぎず其精神は尚ほ東洋舊來の政治思想にして未だ泰西の新思想なる民治政治の考あらざりし其後泰西の新思想漸く我政治家の頭腦に浸潤し民權論起り立憲政體の説出て我政府に於ても明治二十三年を期して國會を開設すへき事に定められしも一般人民の上より云へば政治の思想ある者は僅々一小部にして國民の大部は未だ國家の何たる政體の如何をも辨ぜざる者と謂ふべし我國政治思想の改革を人民一般に及ぼすは將來の大事業にして前途尚ほ悠遠ありと謂はざる可らず政治

の事尚ほ且然り況んや工藝、商業、學術、宗教、風俗等の改革に於てをや此等の改革は今日僅かに其端緒を開き其萌芽を發したりと謂て可あり然るに世の人士たる者にして我國の改革は已に終りたるか如く思惟し稍や安堵の思を爲して孜々子孫の計を爲すあり或は自家今日の位置を永久に維持せんとして汲々之が圖を爲すありて彌々進て此改革を成就するの勇氣に乏しきもの多きは豈浩歎すべきの至りあらずや嗚呼今日我國は漸く舊日本の港を解纜して將に新日本に向て航せんとするの時なり此間尚ほ幾多の怒濤を越へ幾多の困難を經ざる可らず仰いで遙かに新日本を望めば前途悠遠茫乎として畔涯を見す唯僅かに雲耶山耶水天一髪の間に模糊を認むるのみ此の如き大業の其目前に横はるを見ながら因循姑息一身の小安を事とし進で此が改革を圖ることをせざる者は是れコロンブスの怯懦なる水夫あり豈共に天下の大事を談ず可けんや

偖て我國にて行ふべき種々の改革中最も大なる影響を後世に及ぼし之を變革するに最も注意すべき者ハ政教の二なりとす抑も何の時たるを問はず何の國たるに拘はらず士人の最も思想を凝らし其國民に最も大ある感觸を與ふる者ハ政教の二者に外ならず三

千の虎賁百万の貔貅、戰場に相見るとあるハ何の故なる乎、數万の人士其身を犧牲にし敢て之が爲に殉死するを省みざるは何の爲ある乎、皆政教の故、政教の爲なるにあらずや蓋し人民の休戚に關する實に此二者より大なるハ莫し熟々我國今日の現狀を察するに已てに舊家を出でゝ未だ新家に入らず舊日本を去りて未だ新日本に至らず政治ハ早や舊來亞細亞風の專制政治を脱したるも未だ文明國自由主義の政治に進まず國會の開設は數年の後見るべきも其憲法ハ如何なるべき乎未だ知る可らず況や政治の思想未だ國民一般に普からざるに於てをや夫政治の事此の如し、教の一事に至りてハ其場合更に不都合ある者あり從來我國の俗たる士人以上ハ儒教にて薫陶せられ他の三民は大約、神佛其他の雜教ゑ彷徨するものありしが泰西の新思想一たび我國に入り來り學校の教化、漸く普くあるに從ひ是まで神佛を拜せし者も稍々其智識の進歩したる者は已に其迷夢を破られ復た恭く之を拜するの心なく安心の家を失て未た他に安心の家あるを知らず飄々乎として止まる所なく恰も路傍に徘徊する遊魂の如く然り士人以上ハ堯舜孔子の教のみにて別に宗教と稱すべきものハなかりしも政教一致、治國平天下、誠意正心

一途ありと信じ聊か之にて其身を修め來りしかども泰西の新學問入り來るに及んで政教は一致に非ず之を分離せざる可らず治國平天下、誠意正心い一途に非ず別途なりとの思想起り日本男子何ぞ區々一身を修むるとに懇々たらんや宜く天下の政治を攻究すべしとの意氣込となりミルヽスペンサルの流派を汲み政治經濟のとにい頗る熱心あるも復た其心意品行の如何を省みず放奢淫逸不行狀を極むるも人之を怪まざるに至る是に於てか我國の學問い悉く政治の一邊に偏重し政治を離れては學問なく宗教あり學術あり工藝あり唯治世の要具たるに過ぎず政治の外士人の志を滿足せしむべき者あしとして天下の志士皆學て政治家たり政治學者たらんとを希望せざるいなき事となれり而して政治家たるが故宗教にい關係あきとを明し己の宗教に淡泊なるに誇るを常とす世の風潮とい云ひながら亦奇なるとに非ずや甚しきい政治家にい道德い無益なるが如くに論じ或い以國のマキヤヴエリ流の主義を汲み政治家の德義を以て全く利己主義に偏し一種特別天下不通の者と爲すに至る恐るべきに非ずや人心爭でか久しく斯る不毛沙漠の地

に安ずべき生來稍々德義の念に富む者か或い從來儒教主義に深く浸染する者い此の地位に安ずる能はず止だ夫れ安ずる能はず此を以て各其安ずる所を求めんと務め或い泰西の修身哲學を以て其身を修めんとすれども冷淡なる哲學い無情にして其心性の願望する所を充す能いざるを如何せん或は縱まゝに人間の知識學問を兩斷し政治以下法律經濟學藝工業の事い凡て泰西の新思想に則らざる可らずとすれども誠意正心以上一身を修め一家を齊ふるに至りてい全く舊來の亞細亞思想に倚らざる可らずと爲し頻りに儒教主義學問の復興を勸奬するものあれども是れ所謂一人にして二匹の馬に乘り一臣にして二君に事ふる者にて如何んぞ自家撞着前後矛盾の災を免るゝを得ん此一事にい明哲なる我政府にも大に弱する所やありけん其爲す所を見るに其主義常に變轉して定まらず或い泰西の修身學を用ゐんとし或い舊時の儒教主義に復らんとし或い一旦儒教主義に倚るべしと定むるも姑らくして復た之に躊躇するが如き姿あき能はず畢竟するに此一事に至りては政府人民とも未だ一定の主義を有するに至らず舊は去りたれども未だ新にい就かず神儒佛の三教とも已に其勢力を失ひ此が日新の文明と併行す可らざ

る者たるは悟りたれども之に更ふべき教あるを知らず此れ聖經に所謂る惡鬼人より出で、早きたる所をめぐり安を求むれども其所を得ざる有樣にして速かに之に代ふべきものを知り之に就くに非ずんば「惡鬼は其家の空虛なるを見遂に往きて己より惡しき七の惡鬼を携へ來りて此に居り其人の後の患狀は前より更に惡くならん」とを恐るゝ

ペンサル曾て云へるあり曰く「一の德教去りて未だ之に代ふべき新なる德教の起らざる時ほど社會の有樣危險なるゝなし」と是れ實に我國今日の實況を指せる言にして我國將來安危の關する所之より大なるゝ莫し我國の志士たる者豈に一日も安居するを得んや

以上ゝ全國の大勢殊に其上等社會の傾向を開陳せる者にて固より人民一般の思想皆然りと云ふに非ず今若し我國人の一部より云へば其身ゝ明治の今日にあるも其心尙ほ天保年間の昔に在りて目下熟睡の最中なる者もあらん或ゝ尙ほ睡眠中なるも泰西文明の風、颯々として其耳朶に吹き來り其熟睡を妨ぐるを以て大に不愉快なりと思惟する者もあらん或は後れざせにも此程に至り漸く其目を醒さんとする者もあらん或は遙に世

人の先に進み已に新日本に達し其思想精神全く更生し安心の場合に至りしものあらん其形狀千差万異一々形容す可らざるあり

此大變革の期に際し我國從來政教の關渉如何ん從來我國の世道人心を維持したるものは何なる乎將來我國の風俗人心を維持すべきものゝ何なる乎將來政教の關渉如何すべき乎從來政教の精神形躰悉く之を廢止すべき乎將た之に存すべきとある乎舊日本の港を出て新日本に達するの方法及び其方針如何ん此等數種の問題は余輩が宜しく審かに之を問ひ愼て之を辨ぜざる可らざる急要の問題たり今曾て爰に考ふ所を記し既往將來政教の關係を論じ以て識者の高評を仰かんとす若し夫れ此變革の時に當り政教變革の方針となり此媒介を爲すに於て小補あらば著者の幸何をか之に加へん

第二章　我國政教の思想

從來我邦人ゝ政教の關渉に付き如何なる思想を懷きしや之を論ずるに先ち我國支那朝

鮮等東洋の諸國に於ては全社會の元氣生命は悉く一種特別なる政教の思想に吸收せられたることを述べざる可らず

上古邦國の未だ開明に進まざるや何の處に於ても政治宗教道德等の思想多少相混同せざるはなし而して其國の風俗慣習の異なるより或は宗教の元素最も盛にして政治道德の思想を壓倒するあり或は政治の思想最も强勢にして宗教道德の精神を吸收するあり

て其趣き一ならず例之ば猶太印度埃及の如き宗教の思想凡ての事に冠たりしも羅馬支那の如きは政治道德の精神最も盛にして國家の元氣は凡て之に吸收せられたるが如しサル、ヘンリー、メイン古代の法律を論じて曰く「印度古代の法律に於ては宗教の元素全く他の元素を壓倒せり家内の供祭に關する法律は凡て人事及び所有物に關はる法律の柱石とあれりと之に反して羅馬に於ては民法と宗制とは早くより分離して宗教に關する事を支配するは「ポンチフス」(羅馬古代の宗務局にて其役員は往古は貴族より撰擧せしが帝國となるに至りて帝王自ら其局長となれり)の司る所とあれり云々

(古代法律論)

我國上古の狀況如何ありしかは知る可らざれども支那の文物典章我國に渡りし以來は我國も支那と同じく政治の思想萬事に冠たりしが如し福澤氏曾て我國文明の元素を論じ唯治者と被治者の二あるのみと云ひしも(文明論之概略)蓋し此意に外ならざらん我國古來の歷史を案ずるに文學盛ならざりしには非ず藝術勃興せざりしには非ず宗教旺盛ならざりしに非れども一として政治の範圍内を脫し獨立の地位を保ちしものはあらざるなり學問は單に政治の爲めこれあるに外ならずして學校は人才陶養とて唯官吏たり政治家たるものを教育する所たるに過ぎず曾て一己の智識を發達する乎或は一科專門の學を修むるを以て目的とし學問に從事する者ありしを聞かず偶詩文を弄ぶ乎或は小說を著すを以て其身を立てんとするの學者あるも或は當時に容れられざるを以て止むを得ず此に從事するか或は世に盡すの志もなく唯文詞に耽ける者にして自らも其身きを知り人も之を以て詞章記誦の學として蔑視したるや曾て文學を以て獨立して其身を立てんとする者に非るなり是を以て學問なる者は唯政治と修身の事のみにて聊か之に得る所あれば直に之を實用せんとて汲々政府に用ゐられんとを求め終に用ゐられざ

るに於ては其不遇を悲み或い當時の政府を怨むあり或は失望の餘り隱者を氣取るあり不平常に絶るとなし斯の如きが故に學に志す者は士人以上にして他の三民の如きい僅かの筆算を學ぶ位にて高尚なる學問を爲す者おく農工商にして學問を爲すい大に其忌む所おりし農工商已に然り況んや一般の婦人に於てをや其學問を忌みたりしも偶然に非りしなり我國古來學問の形狀斯の如し專門の學術起らざりしも亦宜べならずや藝術中醫と畵とい人の最も尊崇するものにして文明諸國に於ては常に獨立の位置を保つ者おれども我國にては是れ亦政治の隷屬たるに過ぎざりし醫は仁の術なりとて間〻高尚に氣取るものなきに非らざりしも概して之を云へば之に從事するものは何の志もおく何の思想もおく唯生計の爲にのみ之を營む者たるに外おらず甚しきに至りては諂諛以て貴紳の心を悅ばせ幇間の所爲を學ぶ者少からざりき畵工い更に之より甚しきものあり往古い知らず近世に至りては高尚優雅の心を抱く者甚だ稀れにして唯王公貴人の眷顧を得るを事とし曾て泰西諸國の畵工の如き政治社會に獨立したる志操あるものを見ざりしなり

我國の宗敎にて最も旺盛を極めたるい佛敎とす佛敎い元來宗敎の念の最も盛なる印度に起りし者にて其僧侶なる者い出家と稱し世間より脫逸する者おれば政治外に獨立すべき筈なれども其實全く反對ゑして恆に政府に依賴して僅かに其生命を保ちたるに過ぎず佛敎の初めて我國に傳はりしや人民之を信じて政府之を用ゐしに非ず初めて之を信ぜしい朝廷にして之を隆盛おらしめたるも亦朝廷の力に依れり後世に至り彼の眞宗の如き信を人民に得、稍獨立の位置を保つが如きものおりしも概して之を云へば其生存興廢全く政府の手に在りしと云ふも誣言に非るべし其一例を擧ぐれば維新の初め政府より僧侶ゑ肉食妻帶を許すとの一令おりしより僧侶輩い大に悅び曾て其敎の禁たるを思はず直に之を恣にするに至りしが如き實に奇怪千万の事ならずや且つ政府に於て彼の三條の敎則なるものを設け僧侶等に說かしめたるが如き苟くも宗敎に獨立の精神おりしおらば爭かで斯る奇怪の事行はるゝを得ん察するに佛敎にして斯の如くなりては我日本に來りて初めて其獨立の精神を失ひしおらん

ゑ於て其精神を失ひしに非ず日本に來らざる前既に支那朝鮮

（註）佛教の我國に入るや欽明帝十三年冬十月百濟王聖明其臣西部姬氏遠率怒唎斯致等を遣して釋迦佛金銅の像一軀幡天蓋若干經卷を献じたるを始めとし寺院を建立し僧侶を度し經文を誦せしむるに至る迄盡く朝廷の事、政府の業ならざるいあかりし其如何の詳細は我國の佛教史を見ゞ明かあらん

宗教、藝術、學問已に然り農工商の三民が人主の隷屬となりて何の思想もなく何の精神もなく僅に其生を送るを以て一生の目的と爲せしも亦當然あらずや要するに農工商の三民なる者ハ人主の奴隷にして獨立の位置は暫らく擱き政治國家の思想あらざりし者なり故に農工商の三民は國家に如何なる變動あるも曾て之に關するとなく如何なる虐政を受くるも甘じて之を受け恰も禽獸と同じく生命を保存するの外他あらざりし唯我國に於て政治國家の念を有し聊か國民たるの資格を存し國家の元氣たりしものは士人以上のみ故に我國國家の事より論ずれば農工商の三民は全く何の關係をもあらす我國は全く士人以上のものありしと云ふも溢言にあらざるべし佛國中央集權の弊甚しき國家の實權、國中の俊秀、盡く首府巴里に蝟集し「巴里即ち佛國なり」との諺あるに至る今余は將に云はんとす士族即ち日本國民ありと然りと雖も尙ほ深く其實況を察するとき

は此士族たる者も國家の思想ありて而して後ち國家の元氣たりしに非ず其眼中人主の外一物あるおし君が爲めには如何なる恥辱をも受くるを厭はず其財産を失ふも意とせざる所其一家族も其一身をも君が爲めには献げて省みる所おし否お此等の人の眼には君ありて國家あらず人主ありて人民あらざりしなり然らば即ち士族は則ち日本國民ありとにはあらすして天子は即ち日本ありと云て可あり彼の天下は天下の天下にあらずして一人の天下ありとは實に夫れ之を謂ふ乎

（註）我國士族と他の三民との關係は略ぼ昔時希臘羅馬の自由の民と奴隷との關係に似たり希臘に於ては奴隷の數は遙に自由の民の上に出づ例へはアッチカに於ては自由の人民は僅か二万人なるに奴隷の數は四十万人に近かりしと云ふ而して兩國共に農工商の事の如き盡く奴隷の爲す所にて自由の人民は唯文武士人の事にのみ從へり

と云ふ

我國社會の組織を斯くの如くに爲して其風俗人心を維持したる者は儒教の力最も多しとす佛教勢力おかりしには非ずと雖も其勢力を國家の元氣たる士人以上に及ぼすことは能はざりしを以て一己人に及ほしたる感化頗る大なるも社會全體に影響する所極めて

少かりし特に佛教は出世間の教なりと云ふを以て現世の事は凡て儒教に任せたるが如き姿あき能はず神道は本居平田の後ち始めて稍其躰を爲せし者にて我國の元氣を鼓舞し風俗を維持したる勢力に於ては數等佛教の下にありたりと云さる可らず而して之か稍人心を感動せしとあるも是れ神道固有の力には非ずして儒教より假り來りし所多しと云て可なり

儒教が我國の社會全躰に及ほせし勢力の極めて大なるは明白なる事なるが斯る勢力を有せし所以は抑々何に因れるや是れ要するに孔孟忠孝の教に過ぎざるべし、忠孝の二字は東洋諸國社會の經緯、道德の基礎たる語にして人心に莫大の勢力を有せしは論を待たず孝悌忠信と云ひ或は孝者百行の本なりと云ひ孔孟聖賢の教皆之を本とせざるはなし父母の教訓なり學校の訓誨なり日常朋友の警戒なり此二者の外に出でざりし此教たる淡泊無味平常の事なれは唯其理を說き其實施を勸むるのみにては人心を動かすに足らざれば之を實行するに於ては之に添ふに忠臣義士孝子の談を以てするを常とす此等の談も通常の者のみにてはさまで面白からねば種々異狀變態の談を喜ぶの風あり

例へば孝の事に付彼の二十四孝の談の如き或は其父惡逆あるあり或は其家赤貧なるあり或は不時の災禍に罹りて困難を極むるあり一として異狀あらざるはなし其孝心の感應する所は或は冬期に竹筍を得たりと云ひ或は土中より黃金を堀出したりと云ひ或は禽獸來りて其人の勞を扶けたりと云ひ怪談少なからずとす今日より見れば斯の如き怪談異說が此迄の人心を維持したりとはいと不審あれども此が世道人心を維持するに大ある勢力ありしは更に疑を容る可らず加之我國七八百年來養成し來れる封建の精神、武士の氣象なる忠義武勇も其根源を此に發せりと謂はざる可らず福澤氏其分權論に我國の士族の元氣を今日迄維持したる元素を論じて曰く「之ヲ維持スル所以ノ元素ヲ尋ルニ商買ニモ非ズ工業ニモ非ズ又宗教學問ニモ非ズ唯忠義武勇ノ一元氣アルノミ古來日本ノ士族ヲ見ルニ神佛ヲ信ゼズ學問ヲ勤メズ工商ノ事ヲ賤シトシテ之ヲ知ラザルモ忠義武勇ノ心掛アル者ハ士族第一流ノ名望ヲ得ベシ或ハ士族ノ中ニモ大ニ學問ニ志ス者少カラズト雖モ其學問ナル者モ亦唯忠義武勇中ノ一箇條ニシテ之ヲ助クルノ方便タルニ過ギザルノミ故ニ日本ハ恰モ義武ニ由テ國ヲ立ルモノニシテ之ト共ニ國ノ存亡ヲ

與ニスルハ古ヨリ義國武國等ノ名稱アルヲ以テ知ルベシ」と說き得て妙なりと謂ふべし又我國明治の維新を來たしたるは尊王攘夷の精神おらん而して此精神を振作鼓舞したるには幾分か神道者流の力あるべしと雖も之を要するに時勢の變遷に際し儒敎忠義の敎之を助け成したるに外ならざるおり此他彼の我國の人心を鼓動したる復讎の事の如き世に其流行を恣にしたるは儒敎忠孝の敎暗に之を鼓舞したりと謂はざる可らず畢竟從來我國の世道人心を維持し其元氣を鼓舞したるものは儒敎忠孝の敎にして今日日本の日本たる全く此に由れりと爲さゞる可らず今忠孝の敎の如き淡泊無味のものが斯の如き勢力を有すべしとは泰西人の目には分り難きとおるべけれど是れ一種特別おる社會の組織によりて然る者にて其然る所以は次章に於て詳論すべし

（註）我國上古は佛敎最も盛旺を極め天子皇族大臣概ね之を信じ其制度典章之に基けるもの少からず之が當時の人心を壓倒せし一例を揭ぐれば高貴の人にして出家するもの甚だ多く聖武天皇を始めとし後中御門天皇に至る迄天子の出家せしもの合計三十七帝ありしを視て知るべし中古武門天下の大權を握りし以來佛敎大に衰へ特に德川氏天下を一統するに及んで大に儒敎を奬勵せし以後は士人以上にて之を信ずるも

の甚だ少く佛敎は唯希臘羅馬の奴隸に等しき政治國家の思想なき農工商三民のみ信ずるものとなれり故に中古以來之を奉ずる人數より云へば佛敎尙ほ最も多しと雖も國家の元氣に及ぼしたる影響に至りては遙に儒敎の下にありと云ひざる可らず是れ余が此書に於て儒敎のみを揭げて佛敎の事に論及せざる所以おり

第三章　儒敎の性質

儒敎は其旨極めて廣く且つ時代によりて其敎理發育の度に異なる所あれば其詳細を論ずる此小篇の能くすべきに非ず其敎たる此が起りたる國土の風俗慣習と緻密なる關係を有するや其風俗慣習が儒敎を發生したる乎將た儒敎が其風俗慣習を養成したる乎幾どこが區別を爲す可らざる程おり彼の支那たる三皇五帝夏殷周三代以來今日に至る迄其社會の組織國家の氣風皆おの一轍に出で更に異なる所あるを見ず其社會は君臣、父子、夫婦、長幼、其敎ハ五倫、五常、其政ハ禮樂刑政、其理想は唐虞三代の治にして古を尙び今を賤しむ三代以來、或ハ夷狄の外冦を受け或ハ外敎の來襲あり或ハ外夷に亡ぼさる

、ありて國家變亂を蒙りしと少からずと雖も曾て其思想氣風は替りたるを見ざるあり英國の學士マシーソン清國の開化を論じて曰く「清國にては何事も化石の形象を顯いさゝるはおし工藝なり風俗あり人種あり智識なり道德なり邦語なり宗敎あり一として時と共に變ずるおく其思想其事物共に他國よりの輸入を拒絶したり他の邦國と同じく蠻夷の襲擊及び征服を受けたれども曾て他國に見ざる一種の力にて其敵國を自國の開化に馴致せり又他敎の侵入をも受けたれども其結果は其敎に自國宗敎の精神を吹鼓することとなれり支那固有の宗敎たる儒敎は肯て新敎の輸入發起は禁ぜされども漸次之を化して其敎に近づかしめたり斯くて唯新たなる勢力を拒むのみおらず之をして終に其國固有の形象に變ぜしむるの力ある開化は實に歷史に其比倫を見ざる保守の奇觀を現いすものと謂はざる可らず」云々（儒敎論）蓋し能く其實況を看破せる言と謂ふべし而して此社會の組織、此氣風、此開化を哲學の基礎に置き之をして儒敎の躰裁を備へしめたるは實に周の聖人、魯の孔丘の力にありとす孔子周の末に生れ自ら堯舜聖賢の道を修め周道衰へ古聖先王の治、地に墜ちたるを痛く嘆き之を挽回し王道を布かんと欲し

諸國に周流し之に用ゐられんとを求めたるも諸侯終に用る能はず孔子も亦仕官の念を斷ち乃ち書傳禮記を叙で詩を刪り樂を正し易繫、繫象、說卦、文言を序で春秋を作り弟子三千、身六藝に通ずる者七十二人ありしと云ふ孔子沒して顏氏曾氏の傳獨り其宗を得たり曾氏之を子思に傳へ子思之を孟子に傳へ孟子死して韓子、文中子之を受け宋に至り周子、二程子、朱子の徒之を受け之に加るに性理の說を以てし明に至り王陽明曠世の才を以て大に斯道を振起し良知良能の說を唱道せり爾後支那日本の學者は皆右諸子の說を祖述せるのみにて曾て新軌軸を出せし者あるを見ず唯老聃、周莊の徒い儒敎に反し異說を唱へたるが如くなれどもその社會國家に對する大躰の論全躰の精神に至ては儒敎と格別異なる所あるを見ず儒敎詳細の事一々此に論究す可らずと雖も今余が考ふる所よして果して大過なかりせば其要旨左の數項に出でざるべし

第一、儒敎は一種の社會法とも稱すべく又は現世の宗敎とも云ふべきものにて其目的とする所國家の治安、天下の太平に在りとす致知格物、學藝の事を云はざるに非ず然れど誠意正心、治國平天下を離れて致知格物も全く無益の事あり誠意正心、修身道德

の事を論せざるに非ず然れども國家の治安、天下の太平を離れて誠意正心修身道德も全く無效のものあり上帝を祀り山川を祠り祖宗を祭る等宗教のなきに非ず然れども愼み終追遠、民德歸厚矣と云ひ或は祭祀は國家の大禮なりと稱し治國の具と爲すに過ぎず殖産興農の事なきに非ず然れども無恒産者無恒心と云ひ或は衣食足而後知禮節と云ひて治國の方便と爲すに外ならず其學は即ち治國平天下の學なり此學に非ざれば記誦詞章腐儒の學として之を賤む身を修めて仕官の志あければ高尙に過ぎ實あき者として之を輕蔑す其他禮樂あり工藝なり美術あり此が眞價を定むるには皆治安を贊くるの大小多寡を以て其標準と爲さゞるはなし今其綱領を擧ぐれば曰く在レ明二明德一、在レ親レ民、在レ止二至善一、其要目は即ち格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、是なり儒教の大脉は斯の如く學藝、道德、政治、藝術、一思想にて聯結合致せるものにて唯政教一致のみならず學政一致、知德一致、祭政一致、否あ學藝、道德、政治、藝術、宗教、一致と云はざる可らず然れば儒教は修身なり政治なり其一部のみを分離して論ず可らざるや明かなり近頃我邦に於て儒教修身の一部のみを用ゐ其教化を助けんとす

るものあり是れ宛も人の手足を兩斷して其一を用ゐんとすると一般全く儒教の趣旨を誤解せるものと謂ふべし

第二、儒教が一種の社會法にして其目的は國家の治に在るとは已に前項に辨ずる如しされば如何なる方法、如何なる社會の組織より由て此目的を達するか其方法は至りて單純平易なり即ち上下、貴賤、尊卑、治者被治者と嚴格なる區別を立て社會の組織をして太だ單簡なる者とし上なる者、貴なる者、尊なる者、治むるものをして命を出だし教を爲し制度を立て之を司らしめ下なる者、卑なる者、治められるゝ者をして即ち其命を聽き其教を受け其制度を受け其支配を蒙むらしむるに在り韓退之、原道の篇に支那社會の組織を論じて曰く君者、出レ令者也、臣者、行二君之令一而致二之民一者也、民者、出二粟米麻絲一、作二器皿一、通二貨財一、以事二其上一者也、と是唯上下貴賤尊卑治者被治者の別の一端なる君臣民の秩序を述べたる者なるも聊か以て此區別の嚴格なる一斑を示すに足れり此區別の詳細に渉れば曰く君臣、曰く父子、曰く夫婦、曰く長幼、彼の五倫と稱するものゝ中唯朋友の一を除くの外皆な此區別を示さゞるはなし乃ち君父夫長は上として貴く且つ

尊くして令を出だし教を爲し制度を立て之を司る者あり臣子婦幼ハ下よして賤く且つ卑くして其令を聽き其教を受け其制度にて支配せられ之が管理を受くる者なり國家よりこれ云へハ君ハ無上專制の主、一家族に於てハ父たり夫たる者無上の執權者、鄉黨よてハ長者ハ其統御者にして其餘ハ皆な其の統治を受る者にて唯命之に從ふを以て其分とす斯くて其社會ハ至上至下唯一線維の上下貴賤尊卑の別にて聯結し宛から井然たる「ピラミッド」の佇立するが如く其秩序の嚴然たる實に天下の美觀なりと云ふべし古來斯の如き秩序區別を立て社會を組織する國少からず而して其最も甚しき者ハ印度四姓の區別とす然れども此四姓は其職とする所に依て區別し之を世襲する者なり是れ即ち我國及清國從來四民の區別に似たれども幸ひなるとにハ我國及び清國にては宗教の勢力微なりし故か此區別印度の如く甚だしからざりし唯儒教上下の分、貴賤の別、特に家族の制の如きと略其類を同ふしたるは羅馬古代の社會ならん乎然れど羅馬にてハ中世に至り其政躰共和政治に變じ後ち專制國となりたれハ君臣の分の如きハ大に其趣きを異にするが如し漢學者流大概斯の如き社會の區別を以て天然自然の秩序と爲す陋見の甚

しきものと云はざる可らず

（註）元來道德の教なるものは多く人類同等を以て其根據とおす獨り儒教は之に反し其の仁と云ひ義と云ひ禮と云ふも皆な人類上下貴賤尊卑の別に基けるものにて彼の五倫の教なるものも朋友有レ信の一を除くの外皆な此の上下貴賤尊卑の區別を明にするの教あるは亦奇と謂はざる可らず

第三、社會の組織をして右の如く單簡ならしめハ之を整頓するの法も亦至りて容易あり其法は即ち德教禮樂刑政是あり而して德教禮樂ハ本にして刑政ハ末なり其教ハ所謂る人倫の教にして父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信、の五なりとす是れ前項の上下、貴賤、尊卑、治者被治者の別を序で各其處を得せしむる所以なり禮ハ即ち社會を齊ふるの要具にして大ハ葬祭婚配より小ハ坐作進退の節に至る迄を云ふ樂ハ即ち先王の樂にして人心を和ぐるの謂ひあり刑政ハ即ち止を得ずして之を用るものにして國の法度禁令に從ハざる者を刑して之を一にするの謂ひなりされど刑政を用るハ其の最も忌む所なり孔子ハ道レ之以レ政、齊レ之以レ刑、民免而無レ恥と云ひ孟軻ハ刑政を事とするハ霸者の爲す所として痛く之を詬れり又後世の儒者も刑政を頼むは韓申

刑名の學として甚だ之を嫌忌せりされば儒者は政教以て國を治めんとしたるも異竟する所教は即ち治安の根本にして政は之が支柱と爲したるに過ぎざるを知るべし宜べなり儒教の政治論十中の八九は修身道德の事に外ならざるは

第四、社會を整頓するの方法斯の如く簡易なりと雖も社會の中心主位たる君主に其人を得ざるに於ては宛かも鐵道あり蒸氣機關具備すと雖も蒸氣なく機關士なきと一般亦た何の功をか奏するを得ん是れ儒者の大に苦慮する所にして常に汲々聖賢の君主を得んと希望する所以なり希臘の哲人プレトウは哲學者を以て邦國の君主と爲すことを希望したるが儒者は恆に聖人を以て君主と爲さんと欲して止まず孔子曰く爲政以德、譬如北辰居其所而衆星共之、而して孟子は終身王道を說けり一國の興廢存亡は全く君主の一身に在りとせるが故天下を平にするの道は唯聖賢の君を得るに在るのみ唯其君をして堯舜たらしむるに在るのみ身に堯舜の德を貯へ周公の才を具ふるも其位を得ざれば一匹夫のみ亦何をか爲すを得ん故に孔席不暇暖、而墨突不得黔、天下より周流して用ゐられんことを求めて止ざりき後世の儒者も天下に盡すの道は唯仕官を爲し其の

君をして堯舜たらしむるの一方のみなりしかば之が爲には恒に頗る困却したるが如し」今爰に少しく王者ありて天下平かなるの次第を述べんより先づ人君の職務如何んを說かん横井小楠先生人君の詩あり曰く人君何天職、代天治萬姓、從非天德人、何以協天意、云々 能く儒教人君の職を說けるものと謂ふべし大學の序に曰く 蓋自天降生民則莫不既與之以仁義禮智之性矣、然其氣質之稟、或不能齊、是以不能皆有以知其性之所有而全之也、一有聰明睿智、能盡其性者、出於其間則天必命之、以爲億兆之君師、使之治而教之以復其性、云々是に由て之を觀れば人君なる者は天に代りて萬姓を治め天之に命じて億兆の君師たらしむるものなれば取りも直さず天即上帝の代理人と云ふて可あり而して其職とする所は所謂る億兆の君師にして之を治め之を教へて其性に復らしむるに在りとす豈其責任至重至大なるに非ずや乃ち人君たる者は一人にして君主法王の兩職を帶び一身にして政教の二權を掌握する者ありさらば儒者が聰明睿智神人合一の大聖人に非ざれば人君の職を盡す能はずと爲すも亦宜べならずや人君の資格は道德を以て第一とす道德あれば其國治り道德なければ其國亂る

治亂の機一に人君の道德如何にあり人君道德の影響人民に及ぶの有樣い宛も響の聲に應ずるが如く影の物に從ふが如く的面に其効現いるゝとせり孔子曰く君子之德風小人之德艸、艸上ニ之風一必偃、又曰く德之流行、速ニ於置郵而傳ヘ命、孟子曰く覇者之民、驩虞如也、王者之民、皡々如也、殺ヘ之而不ヘ怨、利ヘ之而不ヘ庸、民日遷ヘ善、而不ヘ知ニ爲ヘ之者一、夫君子所ヘ過者化、所ヘ存者神、上下與ニ天地一同ヘ流、豈曰ニ小補ヘ之哉、又曰く國君好ヘ仁、天下無ヘ敵焉、南面而征、北狄怨、東面而征、西夷怨、曰奚爲後ヘ我、又曰く君仁莫ヘ不ヘ仁、君義莫ヘ不ヘ義、此他儒者の人君道德の影響人民に及ぶの速にして且つ廣く且つ深きを云ふ者枚擧に遑あらざるなり宜其理を云ふのみならず其實例を擧示する者少からず例ヘ之は堯舜の治の如き周成王の時周公之が輔佐となり天下安寧、錯ヘ刑四十餘年不ヘ用と云ふが如き孔子魯の定公に事へ中都宰となり一年四方則ヘ之と云ひ又孔子魯國の相事を攝行し誅ニ少正卯一、與ニ聞國政一、三月魯國大治と云ふが如き皆な儒者が王者の治普くして速かなるを證する所あり此事の實否は兎もあれ社會の組織已に第二項第三項に論ぜし如くあれば人君道德如何の影響非常に大なりしは肯て疑を容るべからず

第五、凡そ天下の宗教或は哲學一として理想的の社會を目的せざるはあしプレトーの神聖なる共和政治國の如き佛教の涅槃の如き火教の光明國の如き猶太教及び基督教の天國の如き其尤も顯著なる者あり今儒教にて理想的の社會とする所は即ち王道の行はるゝ所とす然るに他の宗教或は哲學にては理想的の社會は未來にあるか或は幽冥の世界に在りとするも獨り儒教に於ては理想的の社會は已に既往に屬し且此世に在る者にて學者士人畢生の目的は之を恢復するに在りとす若し儒者に向て其理想とする天下太平を問ば皆な唐虞三代の治を指さゞるものなかるべし唐虞三代の治特に堯舜の治い儒教の天國にして後世の學者皆な之を以て其理想標準とおさゞるい莫し孔子い仁を言ひ孟子い義を解くも皆な堯舜の德、堯舜の治を稱道して止まざりし思ふに堯舜禹湯文武も一個の豪傑たりしに相違なかるべけれども決して孔孟其他後世の學者が頌贊せし如き大聖人には非るべし又唐虞三代の治と云ふも當時い尙ほ幼稚の社會にて其國狹く其人少く或い一家族の如く或は一種族の如き有樣ありしかゞ幾分か國內無事にして親睦したる狀況おきよしも非るべしと雖も是れ人種初代自然の有樣にて別に稱讃す

べき程もあらざるなり譬へば小兒の如き無心無邪氣にして甚だ愛す可き所ありと雖も其知德發達したる大人とは固より日を同ふして優劣を論ず可らず支那唐虞三代の代は尚ほ小兒の如く今日は成年の如し成年者の過失少からずと雖も尚ほ幼稚の人よりは勝れりと謂ふべし孔孟が之を以て王道の標準完全なる社會の理想と爲したるの利害は請ふ之を次章に論ぜん

第四章　儒教の利害（一）

儒教大躰の性質及び要旨は略前章に論じたるが如く極めて簡單平易淡泊無味にして一見深く人心を聳動し人性の至情を滿足すべき程の勢力あるべき理なきが如し道の本原を論じ人性の蘊奥を說く等高遠幽邃の理を云はざるに非ず然れども之を以て彼の希臘プレトウ、アリストウトル等の哲學にて宇宙の大原因を講じ性理を說き道義の本躰を論ずる者に比せば其思想の深淺日を同ふして語る可らず天命を云ひ鬼神の事を論ずる

等幽冥世界の事を說かざるに非ず然れども其說く所の者は匹夫匹婦の共に知る所にして別に人性の至情に訴へ幽冥の奥理を啓發する者と爲す可らず之を以て彼の超理の境界に逍遙し天地の奥妙を談ずる「ブラマ」敎、佛敎に比すれば其差異天淵霄壤も啻あらざるなり西人曾て儒敎を論じて曰く吾人「ブラマ」敎の高尚絕妙なる思想及び佛敎の奥妙幽邃なる熱心を經て支那の宗敎世界に至るや不覺に高山を下りて平地に至るの感格を懷かざるを得ず吾人見界の際限は自然狹隘になり山岳より移りて谿谷に至り詩歌の世去りて俗文の世來るの心地（こゝろ）あき能はず云々（マシソン氏儒敎論）能く儒敎の性質を看破したるの言と謂ふべし

然り而して此單簡平易淡泊無味なる儒敎か支那國三億餘万の元氣となりて其精神を統御するのみならず延ひて朝鮮に及び我國に來り其學校及び日常の敎となり其社會に一種の形象を與へ其國の精神となり東洋一種の氣風文明を養成して數千年の間之を維持する程の勢力を有せしは亦奇ならずや將た何の原因何の理由によりて斯る勢力を有せしや「ブラマ」敎、佛敎の印度其他東洋諸國の人心を收め之に大なる影響を及ぼしたる

の理由ハ余輩或ハ輙く之を解くを得べし希臘の哲學が歐西今日の學風に及ぼしたる影響の大なる所以を説くハ或ハ難きに非るべし然れども何故に淡泊無味平常簡易なる儒教が斯る勢力を有せしかハ之を説く容易に非ず天下一事物の偶然あるものあるを見ず儒教豈獨り偶然にして斯の如き勢力を有するに至らんや必ず然る所以の理あかる可らず今試みに儒教中の精神性質よりして聊か人心を感動して之に幾分の滿足を與へたる眞理の一端と認むべきものを左に掲げん

第一、儒教は高遠深邃の理を思辨するを迂濶なりとして實地實際の行を尊ぶ儒教の目的は國家の治安に在り一身を修むるに在れば直接之に關係なきの思辨究索は勉て之を避け唯實地實際の事のみを勸奬す幽冥の理、隱微の事ハ之を否定するに非ず鬼神は之を敬し郊祀の禮は之を鄭重にして葬祭は之を愼み天命ハ之を畏るゝも其理を究察するを以て不急無益の事と爲し此か眞僞是非を云ふを深く戒む孔子道の行はれざるを嘆ずるや曰く道之不レ行也、我知レ之矣、知者過レ之、愚者不レ及也と知るべし儒教の主とする所は平常の理に安じ平常の事を行ふに在るを隱微の理を究め奇異の事實を喜ぶを誡む

るや曰く素レ隱行レ怪、後世有レ述焉、吾弗レ爲レ之矣、眞の知者たる者は神明の事や死生幽冥の理など容易に明かにすべからざる事ハ成るへく之を不問に附し實行を務むるを肝要とす曰務二民之義一、敬二鬼神一而遠レ之、可レ謂レ知矣、曰く未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼、敢問レ死、曰、未レ知レ生焉知レ死、儒教全躰の精神、之を以て見るべし噫其實行を先きにし思辨を後にするを勸るや切なりと謂ふべし或る人之を以て近世の哲學コムトの實理説或ハスペンサルの不可識論に比するあり余を以て見れバ其皮相は稍や似たれど其精神ハ甚だ異なれりと謂ハさるを得ずコムトは人の知り得べきものハ唯第二原因の作用、形而下の事のみにて其他ハ一切知る可らずとするを以て其哲學の基礎と爲ス|スペンサル|ハ人の理性よりして其知識は相對關係の者あり人の知り得べき所ハ唯物の現象のみにて其實躰眞理ハ一切知る可らずと論じ之を以て其哲學の主義と爲す然れとも孔孟儒教の精神ハ全く之に反し唯、知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知とするのみにて不可識、實理を以て其教の根據と爲せしには非ず唯孔子ハ一ハ功名を事とする小人か徒に隱僻の理を説き詭異の行を爲し世を欺き名を盜まんとするを恐れ二には容易に究む可らざる隱微與

妙の理を求め直接實際に關渉せざるの思辨を爲し之か爲め目前有益の實行を怠たらんことを恐れたるのみ思ふに孔子の時宗教の眞理未だ明かあらず妄信迷謬、猖獗を逞ふしたるは今日基督教の未だ傳播せざる處と異あらざりしあらん當時の傳記たる左氏傳を見るに怪談妄說擧げて數ふ可らず孔子の敏捷ある豈此弊害を知ざるとあらん惜ゐ哉孔子は尙ほ暗迷に在りて上帝の啓示せる宗教の眞理を知らざりしかゞ容易に之か攻究す可らざるを知り之を攻究するや反て迷妄を生じ實行を怠たらんことを恐れたり子貢曰、夫子之文章可二得而聞一也、夫子之言二性與二天道一不レ可二得而聞一也、子罕言二利與レ命與レ仁、以てその意のある所を知るに足れり孔子い嚴肅誠實の君子あり明晰火を見るが如き形而上の理を蔑視する者に非ず赫々たる神明の事を人間の思想外に驅逐するものに非ず其原由を知らず其理を解せすして妄信に陷る所こそあれ鬼神を敬し天命を畏れ祭祀を愼むの一事に至りては或は今日の敬虔家も尙ほ及ゞざる所あらん或る人孔子に禘の說を問ふ曰不レ知也、知二其說一者之於二天下一也、其如レ示二諸斯一乎、指二其掌一、是れ蓋し敬神は治國の根本、百行の本なるを謂ふあり又一身の愼を云ゝゞ曰く迅雷風烈必變、曰く祭

如レ在、祭レ神如二神在一、聊か以て孔子天命を畏れ鬼神を敬するの實を見るに足れり

偖て孔子が鬼神幽冥の理を究索思辨するを後にして實行を先きにしたるは實に千古の卓見にして未だ天啓の宗教あらざる所に於てい万止むを得ざる事と謂ふべし其理を明かにせず其原因を知らざれゞ到底人心の迷妄を破り安心立命の地に至らしむるを得ざるい勿論の事にて其弊や宗教神明の事を蔑視し高尙深遠なる哲學の進歩を妨げ人間の思想を狹隘にするの傾向あるも之を以て彼の惑を增し其迷妄を長し常に思を來世に屬し實業を賤しめ現世の行を忽にせしむる傾向ある佛教「ブラマ」教等の弊に比すれゞ更に勝れる所ありと爲さゞる可らずカライル曾て事を成すの要を示して曰く「先づ爾の局に當る所の事を務むべし」と凡ろ身を修むるの要、事業を成すの秘訣い現在目前の事にて已の成し得べき所を務むるより宜きいなし現在目前の事を差し置きて目を未來の事に注き思を不急無益の事に寄せ慕然として日々を渡るい世人の通弊とす孔子深く玆に見る所ありて人々をして專ら實行を尊び現在目前の事を務めしむ是れ蓋し儒教が其勢力を東洋諸國に逞ふせし一因ならん歟

第三、儒教は純然たる樂天教にして深く望を現世に屬す四書五經儒教主義の書を讀て吾人の最も奇とする所は古の聖賢が一身を修め國を治め天下を平にすることを甚だ平易なりと爲せし一事なり先づ儒者の人性如何を解くを見るに曰く孟子道二性善一言必稱二堯舜一曰く人性之善也、猶二水之就レ下也、人無レ有二不善一、水無レ有レ不レ下、曰く凡有レ四二端於我一者、知二皆擴而充レ之矣、若二火之始然、泉之始達一、苟能充レ之、足二以保二四海一、又其國の治まり易きを云ふや曰く以レ齊王由レ反レ掌、曰く行二仁政一而王、莫二之能禦一也、曰く齊一變至二於魯一、魯一變至二於道一、王者出、あれば天下は忽ち治まり而して人生の願望幸福悉く今世にて全ふせらる天下太平の世は即ち黄金世界なり即ち天國なり人は元來此黄金世界に生れ皆な善人となりて幸福を得、欣喜歡樂以て今世を渡るべき者なるに王者常にあらず天下時に平かならざるあるを以て人々艱苦を受く是れ儒教全躰の精神なりとすプレトウの神聖なる共和國トマス、ムールの「イユウトピヤ」ベーコンの「アトランタ」等、古來哲學の理想或は詩歌の想像として黄金世界の事を述べし者少からずと雖も未だ曾て儒者の如く實際目前に斯の如き世界の容易に來るを說きたるものあるを見ず

古來世に樂天教を主とする哲學少からずと雖も恐くは儒教の如く今世を以て樂むべきとし人の善に就き易く天下平かなり易しとせし者はあからん勿論斯の如き見解の其當を得ざるは明かなれども彼の佛教の如く今世を以て全く苦、空、無常、汚穢の世界とし人生の最大幸福は速かに此世界を解脱して涅槃に入るに在りと爲すものに比せば大に勝れりと爲さゞる可らず孔孟の時に當り文王周公の世を去る已に遠く天下常に亂れて人民塗炭に苦むと久し此時に於て孔孟王道の說を聽くものは天國の福音を聽くが如き感ありしならん加之此時に當り老聃周莊楊朱墨翟の徒輩出し或は高談空論以て世を睥睨し眼を高遠幽邃の境に注ぎて世を脱却するあり或は人性の惡を說くあり或い無爲を以て主眼とするあり其云ふ所說く所い少差あきにあらざれども其精神い世に望を失ひ世の煩雜を厭ふ厭世教にして釋氏虛無寂滅の教と其歸趣を同ふす世い亂れ人々の思想は斯の如くなる時に當り孔孟の教の如き樂天主義の學問起る此が東洋の思想を壓倒するに至りしも亦宜べならずや

第三、儒教い單純なる道德教以て人心を維持するに足らざるを知り政教を一にして以

て其目的を達せんと圖れりソクラテスの智德を以て一に歸し德行を以て敎訓すべきことと爲し三十餘年間アテンスの市街を徘徊し人民を敎へんと試みたり儒者の士人以上の或の致知格物以て其意を誠にし其身を修むべしと爲せども一般の人民は戶とに敎ゆ可らざれば王者明君を得て仁政を行ひ政敎を一にし以て其目的を達すべしとせり故に孔孟の明君を得之を堯舜にし王道を布かんとて諸國に周流せり今夫れ世の學者の德行の敎訓し得べしと爲し敎育さへ盛にすれば人の品行の正しくなり風俗は敦厚になると思惟する者多けれども是れ全く人性の根底に達せず社會の實情を詳に知ざるより起るの誤謬にして實際に適用し難き一場の空談たるに過ぎざるあり抑人の善を爲さずして惡を爲すは善の爲すべくして惡の爲す可らざるを知らざる故歟其智識眊くして善惡正邪の區別を知らざるか故歟將た善惡正邪の因果應報を知らざる故歟若し人の善を爲さずして惡を爲すの原因果して智識の不足に在りとせば身を修め人を善に導くの容易なるは勿論善を爲さず惡を爲すの人今日の如く多からざるべきも徐ろに其實際を究むれば現在善を爲さず惡を爲すの人は善惡正邪の別を知らざるにあらず善の爲すべく惡の

爲す可らざるを知らざるに非ず又更に因果應報の理を知らざるに非ず其知識は反て常人に勝り善惡正邪の思想は頗る敏捷あるものなり且つ一身を修め人を善に導くには唯知識を開き修身道德の理を明かにするのみにて決して其功を奏す可らざるや世の知識の明かなる者必ずしも善人にあらず無學不文の者必ずしも惡人にあらざるを見て知るべし加之道德を以て敎訓すべきとせば善惡の區別の知愚の區別と同一にせざる可らず過失と罪惡との區別は虛妄なりとせざる可らず是れ豈に通論ならんや夫れ一身と社會とを問はず道德を維持するに必要なる者は乃ち權威と感化力の二あり之れ善惡正邪の區別を知り善の爲すべく惡の爲す可らざるを知ると雖も上に道德上の統治者ありて善を賞し惡を罰し善惡正邪の統御を爲すとするに非んば爭でか德行を勸め善事を勵ますを得ん且つ人の善を爲す其心善なるに非れば僞善たるを免れず其心の善に變化するは善なる者に感化せらるゝにあらざれば能はず賢人君子に親炙し義士仁人の言行を聞て奮發興起善に進むとあるは普く人の知る所なり古來道德家修身學者の常に困しむ所の各人の以て理想と爲すべく以て其感化を受く可き活聖人の恒に此世に

あらざるとあり若し其盛德光輝人に接り其威儀德容人を感動し之に加ふるに賞罰の大權を掌握し至仁至愛の心を以て人類を統御する者あらゞ人の善に就き道に進むの速かなる駟馬も及ゞざる所ならん是れ乃ち泰西諸國の修身學に於て上帝の信仰を以て道德の基本と爲せし所以あり儒教にて聖賢の君を得て王道を布き天下を平にせんとするの意蓋し此に外あらず抑も明君上に在りて之が君とあり之が師とあり政教を一途にし其道德の感化は大陽の光熱、地上の生物に於ける如く人々の心を感化して善に向いしめ其賞罰政刑の權威い烈日の威の如く善人をして善に勵み惡人をして懼れしめは何ぞ其國眞に治り風俗敦厚ならざることあらん是れ儒者の常に欽慕期望止まざる所にして儒教の大なる勢力を今日迄維持せし一大理由と謂ふべきなり

政教一致の政今日に行ふ可らざるい論を俟たず其一身を修むるに致知格物を本として上帝を信ずるの必要を知らざりしは儒教の大欠典なりと雖も其明君王者を立て政教を一致にし以て國家眞正の治を圖るに至りてい眞理の一端を彰いも暗に基督教天國の教旨に符合せる所ありと謂いざる可らず

（註）此外儒教に甚だ適切なる教旨あり即ち誠を以て修身の要とおすこと是れなり中庸に曰く誠者天之道也、誠之者人之道也、誠者不勉而中、不思而得、從容中道聖人也、又曰く自誠明謂之性、自明誠謂之教、誠則明矣、孟子曰く至誠而不動者未之有也、不誠未有能動者也、孔子曰く主忠信、此等は吾人の常に賞讃まて止まざる所なり程子主忠信の篇に注釋を下して曰く人道唯在忠信、不誠則無物、且出入無時、莫知其門者人心也、若無忠信、豈復有物乎、信なる哉之を以て彼の釋氏が方便を以て其教を立つるに比せゞ其優劣天淵も啻ならざるなり程明道曾て釋氏方便說を駁して曰く至誠貫天地、人尙有不化、豈有立僞教而人可化乎、實に名言と謂ふべし

第五章　儒教の利害（二）

儒教の昔日に於て大なる勢力を得たる所以の長所い乃ち之を今日に排斥せざる可らざる所以の短所たり彼儒教隨一の教旨たる政教一致の說は之を理論に徵するときい一應尤もある說と爲さゞる可らず政と教とい車の兩輪、鳥の兩翼、片々一を廢す可らす相俟

て以て國治り風俗敦厚人心温和あるを得而して一人にして之が君となり之が師となり一身にして政教の兩權を掌握するを得ゝ政教斯び行はれ治蹟の擧るの速かなる更に疑ふ可らず君を以て教主と爲すの教化に大勢力ある已に前章に述べたるが如し

第一、然れども之を實地に施さんとするには忽ち決して避く可らざる大困難の其前に横はるあるを如何せん夫れ政教一致の實地に欠く可らざる者ハ王者なり王者明君常に世にあらゞ宜しかるべきも茲に甚だ困難なるは之が世に稀なることなり吾人熟々各國の歴史を通觀するに王者たり明君たる者は數百歳或は數千歳にして一たび起るありて世は常に覇者庸君の統治する所となり亂世常に多くして治世甚だ稀なり偶ま聖人たり賢者たるもの世に出るあるも幸に君師の位を得て其道を行ひ得る者甚だ稀なり孔孟の聖賢だも其位を得て其道を行ふを得ず空しく行旅の間に其一生を送りたるに非ずやされゞ王者明君の世に出るハ恰も麟鳳の世に出ると一般稀有の珍事にして寧ろ世上の異變と謂ハざる可らず

抑も人の不完全なる一方に長ずるも他方に短所なき能ハず一事に達するも他の事に甚だ不得手なる者あり其心潔白、其行方正なるも無能、無藝實務に適せざる者あり事務に長け事を處辨するの才能に富むも其心術品行に至りてハ頗る賤劣なる者あり故に有能多藝、政を行ふに適せる政治家にして其德至て卑く更に風教に影響を及ぼす能ハざる者あれゞ心事潔白、品行端正、嚴然たる有德の君子にして平易の事務をも處辨する能ハざる者なきを免れず一人にて万事を兼ね一身にして君師たるの資格を備ふる大成の君子の世に稀なる亦宜ならずや

王者明君にして斯の如く得難きものとせゞ世は常に覇者庸君の統治する所とせざる可らず然るに政教一致の制度に從ひ政教の兩權を以て一切覇者庸君に委任するとせゞ政ハ兎に角一國の教化を害する如何ぞや已れ之を行ハずして人に之を教へ其言行、相反し其心政、表裏を爲すに於ては道の行はれんことを欲すと雖とも豈に得べけんや況んや間々暴君暗主、世に出で虐政を施し教化を蹂躙し無辜の蒼生をして死地に陷らしむることあるに於てをや嗚呼吾人何ぞ國の盛衰興廢を一人に委任し常に其虐政に安して僥倖を万一に望むが如き愚を學ふべけん

去れば政教一致は到底實行す可らざる儒者の妄想空夢と爲さゞるべからず千百年にして一人の王者明君起りて王道を布くことありとするも何の愚人が千百年にして一たび起るある王者明君を望て數百年の間、覇者庸君の專政に安ずる者あらん惜哉古來支那日本の儒者は何れも此妄想空夢の中に彷徨して新に政教二途の新世界を發見する能はず到底行はる可らざる唐虞三代の治を行はんと欲して空しく其世を去りたり

第二、儒者が斯の如き妄想空夢に陷りし所以は何ぞや人生の眞境を悟らず甚しく之を誤解したるが故なり余は前章に於て儒教が東洋に大勢力を占めたる一大原因は樂天主義にして深く望を現世に屬するに在りとせり然れども此過度の樂天主義は彼妄想空夢の由て起れる所と爲さゞる可らず國家は儒者の想像するが如く治り易きものに非らず人の善に就く決して水の下に就くが如く平易なるに非ず人性善あらざるには非ず然れども又惡に就き易きの弊あり熟々人性の實況を察するに善事は行はれ難く惡習は弘り易く惡事には與し易く善道は常に踏み難く滔々たる天下相率て不正不義に陷るを見る天下惡を爲すの人、惡の爲す可らず善の爲さゞる可らざるを知らざるに非ず五倫五常

の道、世に明ならざるに非ず然れども宛から惡の靈ありて冥々裏に天下の人を誘導するが如く世人は知らず識らず皆惡に從ふなり彼の羅馬の詩人が「我は善を知て之を好むも尙ほ惡に從ふ」と云ふたるは世人一般の經驗を表明するの言と謂ふべし人は自然に放任すれば必ず惡に從ふ者にて善に就き得る者に非ず人心惟危、道心惟微なり非常の精神勉勉を俟て稍〻聊か善に就くを得、豈夫れ儒者の言の如く善に就くの容易あることあらん然れば王者明君の常に世にあらざるも宜あらずや天下亂世常に多くして治世甚だ稀なるも亦當然なり儒者此人生の眞境を悟らず妄りに空想を逞ふまゝ王者明君を以て左程に得難きことゝ思はず天下の太平容易に得べきと爲す儒者が天下の人に迂遠視せらるゝ亦宜あらずや

第三、政教一致儒教主義の今日に排斥せざる可らざる所以は唯王者明君、容易に得可らず之が實行し難きの故のみに非ず之を以て文明改進の主義に照らし社會開發の實理に徵するに甚だ其理を得難き所あればなり

儒教の要旨たる已に第三章に於て論述したる如く一種の社會法とも稱すべきものにて

第一に貴賤尊卑、治者被治者等、嚴格なる上下の區別秩序を立て次ぎ之を整頓するに五倫五常の敎及び禮樂刑政を以てし君主を以て政敎の中心となし上の命ずる所、下之を守らしめ君上の權利は無限にして臣下には何の權利なく人民は奴隷或は子女の如く君主い其持主或は父母の如く爲し而して其目的標準とする所い唐虞三代の治にして古を尙び今を卑しめ常に眼を既往にのみ注ぐことを爲せい文明改進の主義に反し社會開發の實理に違ひ亦今日に用ゆべからざるは論を俟たずして明かなり此れ所謂る家族制度なる者にて多くい社會未だ開發せず人種尙ほ幼稚なる野蠻未開半開の國をに行いるゝものなれい或は斯の如き社會には適すべしと雖も開明の國にい固より行はる可らず儒敎主義の制度ゑては一己人い一國に吸收せられ人民い君主或は政府の所有物の如くおれい人を一己人たるの權利を有する能はず已に權利なければい自由なし人々唯君主或は政府の命ずる所を爲し其敎る所を守ることあるのみ啻に己の欲する所を行ふ能はざるのみならず自ら事物の理を判斷するの必要もなければ其自由もなしされいにや論語にも民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之と云へり政敎ともに自由なしされい一己人たるの

價値何にかある人に價値あけれい道德も亦存する能いず故に人民は小兒の如く奴隷の如く禽獸の如くならざるを得ず是儒敎主義の尤も社會開發の眞理に反する所あり人民已に權利なく又思想行爲の自由を有せざれい豈何ぞ進步ある者あらんや社會は常に野蠻未開幼稚なる有樣にあらざる可らず人民は永く小兒奴隷の位地を保たざる可らず然らい則ち何ぞ斯の如き人民に學術技藝の進步を望む可けん何ぞ智識道德の開發を希ふ可けん何ぞ社會幸福の上進を期す可けん彼の儒敎主義の尤も盛に行はるゝ支那に數千年以來文明の進步を見ざるも亦宜おらずや然らは儒敎にては假令唐虞三代の治を以て其目的標準とせざるも其精神は尙古卑今に流れざるを得ず斯の如き制度の行はるゝ所に文明開化の起らんことを求むるは猶ほ黃河の澄んことを求むると一般豈夫れ得可けんや

されい儒敎主義の尤も不可おる所い人爲を以て社會に嚴格おる貴賤尊卑上下の區別を立て一般の人民を凡て愚蒙幼穉視し荏弱過り易き同等の人類に無上の權力を與へ政治宗敎文學其他一切の人事を以て其人に一任することなり故に明君王者稀に起ることあ

りとするも敢て悅ふべき事とすべからず何となればこが爲め却て人民智德自然の發育を防害することあれゝなり儒教主義と日新文明とは到底併行すべからず泰西の文明を我國に輸入する以上は政治上必ずこを排斥せざる可らざるなり

第六章　儒教用ゆ可からず

儒教主義の制度に弊害多き今日の文明改進の主義に反するの甚きこを今日に行ふ可らざるは已に前章に陳べたる如く辨を俟たずして明なりさればにや今聊か天下の大勢に通曉するものは一人として儒教主義たる政教一致の制度を行わんと欲する者なく何わ兎もあれ政治丈けわ何れも泰西の新主義に則り政教を別途にし權利自由に基する純粹の政治を行わんことを希望せざるわなし是れ豈近來の一大進歩として賀すべきにあらずや

政治、法律、經濟等の事わ泰西の新主義に則らざる可らずと爲せども猶ほ其教の主義に

わ拘泥するもの少からず爰に怪むべきわ儒教政治の主義わ捨てたりと雖とも道德わ必ず儒教に由らざるべからずと爲すもの尙ほ多き一事あり今日に於て我國の風俗人心を維持せんとせゞ儒教を措きて他に何をか求めんと假令口には唱へざるも心にわ之を信ずるもの少からず請ふ儒教の今日に用ゆ可らざる次第を左に辨ぜん

第一、儒教主義の德教が昔日に於て聊か勢力を有せし所以は之が政と一致したるを以てあり國君自ら教の師たり故に其教に幾分かの感化力を添へたり政を爲すの人即ち教を爲すの人にして其教を守るものを賞し之に戻るものを懲す等賞罰刑政一人にて兼ねたり故に其教に多少の權威を與へたり感化力、權威此二つの者わ教の實施に欠くべからざるものたり然るに今儒教より政の一半を除き去りて唯教の一半のみを用ゐんとせゞ是れ猶ほ水を離れて魚を生活せしめんとするが如く到底其効力を現す可らず儒教にして政より離るれゞ唯一種哲學的の道德學たるに過ぎず然も其道德學は政治と同躰一致の動作を爲してこそ始めて其効を奏するものなれ獨り其一半を用ゐんとするは恰も生きたる人の手足を兩斷して用ゐんとするに異あらず何ぞ其効驗を見るを得ん

第二、儒教の今日に尤も用ゆべからざる所以は其教旨の今日の新社會に適せざるが故なり儒教は元來一種の社會法にして其教は此一種特別なる社會の秩序を保持せん爲めの教誡なれば此社會ありてこそ始めて必要なれ苟も此社會の有樣を一變し政と教とを兩途にするに於ては何ぞ之を用るを得ん例へば彼の五倫の教の如きも朋友の一項を除くの外皆上下尊卑の序を立つる者なるに外ならず又儒者の最も尊ぶ忠孝の教の如きも美は即ち美なりと雖とも唯其義務の一半を偏重するものにて儒教組織の社會には尤も必要なる教なれども開明の社會には寧ろ弊害多き教とおさゞるべからず抑も社會開發するゝ當り父子、君臣、夫婦等の關係從前と大ゝ其趣を異にするあるは世界一般の事實なれば豈獨り我國のみ此開發の理法を免るゝを得ん」社會猶ほ幼稚なるときは父母の權勢甚だ強大にして子女たるものは何の權利を有することなく父母の存在中は一己人たるの資格なく奴隸と一般生殺與奪、唯父母の意のまゝのみなり故に其教も唯子女の父母に事るの訓誡のみにて更に父母の子女に對するの教あるを見ず假令ひ之れあるも實際に行はるゝことなきなり然れども開明の國よりては然らず子女一己人たるの權

利を有せざるは唯丁年未滿の幼稚の間のみ已に人となるに至ては父母と同等の權利を有し一己人たるの資格に更に差違あるを見ず且つ子女にして父母に孝を盡すの義務あれば父母にも亦其子を慈育するの責任ありて父子間の教互に一方に偏するとなし」君臣の間も亦之に異らず未開の國にありては君の權勢獨り強くして臣下は唯其隷屬たるに過ぎず故に臣下より君主に盡すの義務はあれども君主より臣下の爲めに行ふべきの責任あるを見ず是を以て其風教中唯忠の教のみありて君主の臣下に務むべき教誡あることなし偶之れあるも唯君主の恩惠に出るものゝみにして臣下に對する義務の教と爲すべからず開明の國に於ては然らず君は臣下の爲めの君にして君の爲めに臣下あるにあらず臣下に君に對し忠を盡すべきの義務あれば君にも亦公平を以て臣下を統治するの責任あり且人民の思想進歩するゝ隨ひ君臣の關係は變じて政府人民の關係となり君を思ふの心は進んで國を思ふの心となり忠節の教は替りて愛國の教となり從て從來用ひ來りし君臣間の教は不用となるに至る是れ歐米今日の有樣なり」然れども社會開發するに從つて尤も其趣きを異にする者は男女夫婦の關係、家族の制あらん社會未だ

開發せざるや女ハ男の玩弄物、妻は夫の奴隷にして全く一己人たるの權利あるを見ず故に婦妻たるものハ夫に對して貞節を盡すべきの義務あれども夫には妻に對し何の責任あるとなく之を離縁するも之を虐使するも唯其意のまゝのみ甚だしきは之を生殺するの權をも有する事あり同じ人類よして其權利に斯の如きの懸隔ある長嘆息すべきの至ならずや社會漸く進むや男女同等の位を得、夫婦同格の交を爲すに至る是に於て始めて男女同樣の義務を盡くし夫婦の間に偏重の敎へなきことゝなる夫婦同格の交を爲すや家族の制一變し一家族連綿として長く存することなく新夫婦ハ其父母より離れて新に新家を造り舊家族は其家族一代限りにして分れて數家の新家族となる社會の組織開未開斯の如く其趣きを異にすれハ爭で未開の敎を以て開明人民の敎訓となすことを得んや今や我國ハ社會の組織を一變し舊日本を出で新日本に入らんとするときに當り舊日本の敎を以て其道德を維持せんとするは猶ほ小兒の襁褓を以て大人に着せんとする如く不都合極まるの事と謂ふべし

(註)儒敎にて最も不都合なるは男女間の敎あり女子と小人とは養ひ難しと云て甚しく女子を輕蔑し公然數多の婢妾を蓄ふを許容す且つ婚姻の思想の賤陋なる其目的を以て子孫を擧けん爲めありとす孟子舜の父母に告げずして娶りしを辨護するや曰く不孝有レ三無レ後爲レ大、舜不レ告而娶、爲レ無レ後也、君子以爲猶レ告也、又舜は堯の二女を娶り二人の妻を有せしも後世の學者一人の之を非とするものあるを聞かず之を以て聖書に人父母を離れて其妻に合ひ二人の者一躰となるありとあるものに比せハ其懸隔如何ぞや固より同日の論にあらざるなり

加之儒敎隨一の敎たる忠孝の敎の如き一見甚だ美む可が如くなれども詳密に之を究むるときは皆に眞正の道德と爲す可らざるのみならず寧ろ開明の進步を害する者と云ハざる可らず夫れ君は尊しと雖も同情の人間たるに外ならず父母は敬ふべしと雖も其智德必ずしも其子女に優るに非ず吾人爭てか全心、全意、全力を盡して同情の人、往々己に劣るある者に事ふることを得ん唯之を尊敬するハ君臣たり父母たるの關係あるが故のみ然るに儒敎にては君父を尊敬する天の如く人間の大目的ハ唯君父に事ふる爲なるが如くにし忠孝の二を以て敎化の中心と爲す豈に人性を下卑する偏重の敎と謂ハざるを得んや且つ儒敎忠孝の敎は人をして常に幼稚奴隷の位置に處らしめ人智の開發、開

明の進歩を障害する少小に非るあり何となれは孝の教に依れは父子の間は小兒と大人との關係よして父母在す間ハ一己人たるの資格なく獨立の行を爲す能ハず終始ハ小兒幼稚の有樣に安じ唯父母に事ふるを以て日常の大務と爲さゝる可らず忠の教も之と同じく人民臣下ハ君主の爲に存するが如くにして人々終身の目的は君主に事るの外他あらず君の爲に死するは人間の大目的にして其一生ハ上等なる奴隷の一生に異あらざるあり人々此の忠孝の教に拘束せらるゝ以上ハ勢ひ獨立の思想新異の事業を起す能はず必ず尙古卑今の風を爲さゝるを得ず此れ古來支那日本に人智の開發甚だ遲々として開明の進歩を見ざる所以あり余曾て云へるあり孝の弊は固陋守舊に流れ忠の弊は卑屈賤陋に陷ると蓋し前文の意に外あらざるあり忠孝の教固より尊むべし必ず人生の守るべき道なるはいふに及ばざることなれども唯儒教忠孝の教は非常偏重過度のものたるを如何せん

（註）支那日本孝子の美談中、其父母を養ハんが爲め其職を辭し其仕を致して故鄕に歸り專らこれが爲め其一生を送りたるもの少からず晉の季密、近江聖人と稱へられたる

中江藤樹の如き是なり儒者は斯の如き事を以て美談とおせども余は寧ろこれを以て人生の目的を過るものと爲さゝるを得ざるなり

第三、今社會道德の點を離れて單に哲學の一邊より觀察を下すも儒教は決して永く文明の世界に生存すべき價値を有せざるなり陰陽五行の說は差し措きて先づ其の最も長ずる所の性理道德等を論ずるを見るも一として新奇の說と稱すべきものあく又明論と認むべきものあるを見ず余は今日世界の文學中より儒教一切の書を除き去るも吾人の知識は格別之が爲め損失を受けたりと思惟せざるあり之を以て希臘の哲學或は印度の哲學に比するも數等劣れるが如し此一點よ於てハ論すべき事少からざれども直接本書の趣意に關係なきを以て今爰に論及せざるべし

儒教の利害大畧上來論述したるが如くなれバこれを以て我國の道德を維持せんとするは到底行ふべからざるの空望たるを免れず若し政府の權勢或は先導者の感化力を以て强て之を行はんとせバ啻に益なきのみあらず彌人心を浮薄にし風俗を頹敗せしむるに至らん凡そ人の道德心を害する道德を輕蔑するより大あるは莫し然るに今時勢風俗に適

せず且つ理論にも合はざる儒教主義の道德を行はんとするは是れ人々特に年少の學生に道德を輕蔑するの念を生ぜしむるものなり豈に深く之を攻究せずして可あらんや余輩が尤も今日に儒教を行ふを非とする所以い之が行われ難きを恐るゝに非ず之が爲め益々人心を浮薄にし風俗を頽敗せしむることあるを以てなり

然らば則ち如何せば可あらん儒教を社會より排斥し其書は學校より放逐すべき乎否あ何ぞ斯の如く爲るには及ばん儒教中必ずしも有害無益ある事のみあるにあらす間々後世に傳へて有益なる部分あきに非らず則ち誠意正心を本とするが如き是あり特に我邦人は數百年來此教にて養成せられたるものなれば今更全く之を社會より排斥すべからす又全く其書を學校より放逐するに及ばざるあり唯歐米の學校にて希臘羅甸の古書を學ばしむるが如く一い古來我國の思想氣風を養ひたる古人の思想を知らしめんが爲め一は其思想を練磨せん爲め古書として之を學ばしめば可あらん

第七章　宗教道德の必要

儒教主義は政教共に捨てざる可らざる所以い余已に之を論ぜり後來我國にて全く之を捨つるとせば我國家い如何せば可ならん竊かに目下我國朝野有志者精神の注ぐ所を察するに其精神は單よ政治上の改良形而下の開化よ止まり其政を完全ある立憲制度に改め其法律を完備し其財政を整頓し物産を興し商業を盛にし以て人民生活の度を進むるを以て專務とおすが如し今や我國を改造するに當り政治法律、固より改良せざる可らず財政固より整頓せざる可らず物産を興し商業を盛にすること固より務めざる可らず余輩固より此等のことの急務なるを知れり志士の此等の事に鞠躬黽勉せんこと固より余輩の希望する所なり然れども人はパンのみを以て生活すべきものにあらず國い形而下の事のみを以て治まる可らず政治は社會事業の一小部のみ法律の區域い僅かに行爲上に現はるゝ事を制するに過ぎず如何に政治を改良し法律を完備するも一人の罪人を も改心せしむる能はず一家の不和をも調理するを得ざるべし如何に財政を整頓し物産を興し商業を盛にし以て國を富ますも風俗の頽敗い挽回すべからず人心の萎靡い振作

するを得ざらん況んや此のみにては社會永久の進歩を期すべからざるに於てをや抑も人生は複雜多端なる者にて種々の願望あり樣々の利益(イントレスト)ありて強ち一事を以て概括す可らず學問の事あり商業の事あり一家の利益あれゞ又た一國の利益あり政治法律の事あれゞ宗教道德の事もあり互に利害を共にするものあれゞ又た之を異にするもあり決して一事一利益を以て之が權衡と爲すべからず政治法律ゝ人生の一事一利益のみ人生ゝ之のみにて立つ可からず政治豈アラビヤ物語の怪燈(プホロソフォルスストウン)あらんや法律豈哲學者の奇石あらんや政治法律、改良したりとて何ぞ人民の幸福、頓に增加することあらん況んや政治法律なるものは人民全躰の進歩を離れて獨り進歩する能はざるに於てをや西哲云はずや政治は國民智德の反影なりと人民の智德尙ほ賤劣、社會の有樣未だ蠻夷の遺風を脫せず而して政治法律獨り進歩せるものは未だ之れあらざるなり

我國の志士多くは人生に高尙の目的幸福あるを知らず政治を以て其目的の如く爲し自由を以て其最大幸福の如く思惟す政治とゝ何ぞ人生相生くの法、社會を整頓し人々の權利を保護する手段の謂ひに非ずや自由とは何ぞ吾人の目的を達し其幸福を全ふする

の自由を謂ふに非ずや政治自由は唯吾人の目的幸福を全ふするの手段方法のみ豈に之が爲めに生活するものならんや譬へゞ爰に人あり旅裝を着け東京を發し將に東海道を經て西京に至らんとす西京に至らんとするは其人の目的なり其人の西京に至らんとするを禁じ妨ぐるものなく自在に之に至るを得るゝ其人の自由なり途中平坦なる道路を歩むを得、盜賊の難に罹ることなく無事に之に達するを得るは政治、法律の保護より得る其人の利益なり自由、政治皆な其人の西京に至るの手段方法たるに非ずや今其人にして我ゝ政治法律の保護を得、自由に東海道を通過せん爲に西京に行くと云ゝゞ如何ん豈に通論ならんや吾人の此世にあるゝ之に異ならず吾人複雜多端なる願望、利益を以て此世を通過するに政治自由ゝ唯だ此目的を全ふする一手段一方法たるに外あらざるなりさらゞ吾人爭でか政治を以て其大目的とし自由を以て最大幸福と爲すを得んゝ

彼の輕躁なる民權家中にゝ間々漠然自由を以て何か採るべく掬すべき實物或は實貨の如く思惟し汲々之を獲んと勉め而して此自由なる實貨は政府が獨り專有せるが如く爲し政府を倒し之を掠取せんと欲する者あり國に斯の如き思想を有する者多き間は政治

の改良固より望む可らず眞正の自由い容易に得可らざるなり眞正の目的を有する者、能く適當の手段方法を用るを爲す眞正の目的を知らずして唯其手段方法のみを求むるもの豈適當なる手段方法を得ることあらん譬へい貨幣の如し眞に之を遣ひ得るもの之が物品を賣買するの媒介手段たる眞價を知るものあり唯貨幣の貴きを知りて何の目的あく徒に之を得んと欲するものい賤むべき守錢奴たるに外ならず我國人い是迄儒教ある現世の宗教に教育せられ唯政治の尊むべきのみを知りて此が吾人の幸福を全ふする一手段一方法たるを知らず是れ目下我國に政治自由の守錢奴(ティソル)多き所以ある乎以上國家い政治のみを以て立つべからざることを論ぜしが請ふ左に宗教道德が國家に如何なる影響を及ぼす乎を論ぜん

夫れ宗教道德い國家の元氣なり生命なり道德頽敗して國家安全なるもの未だ之れ有らざるあり宗教衰頽して國力振起せるものあるは未た曾て聞さる所ありされいにや歷史の大家ニーボルも其國先づ腐敗して而して後人之を亡ぼすと云へり彼の文化を以て萬世に鳴りたる希臘國が晚年に至り元氣衰へ國家壞裂したるが如き彼の富强を以て天下を壓倒したる羅馬國が帝政時代に於て奢侈淫逸に流れ國勢日に傾き遂に北方の野蠻人に亡ぼされたるが如き此れが衰滅を來したる大原因は皆な宗教道德の頽敗せし故に非るいなし國家元氣の消長は宗教道德の盛衰と其機を同ふす國に道德隆盛あるや元氣充盈し道德跡を藏すや國家衰頽し元氣消散するは萬國古今の通義なり彼のパックル主義の文明論者の如きい偏に智識のみを貴重し道德を輕蔑するの風あれども是れ全く道德の何たるを知らざるより起る謬見にして之が僻說たる辨を待たずして明かなり愛國の精神い何れより起るや公共の爲めにするの心は何れより來るや道德の心を措きて豈他に求む可けんや古來我國の志氣を皷舞したるい知識ある歟之を實際に質さい皆然らざるを知らん我國の志氣を皷舞したる者の何たるは今暫く措き歐米諸國の元氣を振作する者を觀るに基督教の恥ふる道德心と封建時代より傳來せる廉恥心の二に外あらざるを知る一己人も一國民も其精神の起る所元氣の發する所更に異なるあし孟子い浩然之氣を養ふに直を以て養ふと云へり藤田東湖は苟明大義正人心皇道何愛不興起と歌へり獨逸の詞宗グーテー曰く「何れの世に於ても宗教心の盛なりし時は當時及び

後世に對して光榮、高尚、利益ある世あらざるはなし之に反して何れの世に於ても不信說の勢力ある時は一時國家の繁榮を來たすことあるも永く之を保存する能いず忽ち消散し去るなり」と國家の元氣を振作するは宗教道德を措きて又何をか爲さん

宗教道德は國家を結合し社會を聯繫するの綱繩あり孟子曰く王曰何以利吾國大夫曰何以利我家士庶人曰何以利我身上下交征利而國危矣、利以て國家を結合するを得ず彼の米國の如き人種異なり教育異なり國語も殊なる種々の人民を以て立ち之を治るに自由の制度を以てし而して其國民壞裂せざる所以のものは何ぞや其國民の道德稍〻高尚にして宗教の勢力甚だ盛んなるを以てあり「トクヴ井ール米國の制度を論じて曰く「國民の自由、彌〻大なるに從つて道德上の結合力、益〻强くなるにあらざれば爭でか社會の壞裂を免るを得ん」と又曰く「米國に於ては法律の禁じ能わざる所い宗教之を禁じ其國民をして無法の事を爲すに至らしめざるあり」と米國の如き自由國に於て若し宗教道德盛んなるに非ざれば國家は一日も存するを得ざらん且つ國尚ほ未開なるや種々の風俗慣習、樣々の迷信ありて國民を團結し之を致一にすることありと雖

ども國民稍〻文明に進むや是等の風俗慣習迷信は朝霧の太陽の光に由て消散するが如く自然に勢力を失ふものあり且つ法律の權威も人民の智識開くるに從つて益〻勢力を失ふものあれば宗教道德の結合力は國民の智識進步するに從つて益〻必要あるを知るべし

宗教道德は國家を鞏固にし政躰を堅牢にするの基礎あり英國の政躰の堅牢にして圓滑宜しきを得佛國の政躰鞏固ならずして動もすれば轉覆するの患あるい識者は其原因を以て一に兩國宗教の差あるに歸せり佛國新教の諸士曾て教會の一疑問に就き當時の大統領チエルス氏に面謁せしことありしに氏之に告げて「若し佛國に於て諸君の如き信仰を有するもの尚ほ多くあらんには余は佛國共和政躰の鞏固永久あるに望を置くこと尚ほ多かるべし」と云ひしとかや佛國にてい第十六世紀の終りに當り敬虔厚き「ヒユーゲノウ」の一族を國内より驅逐せし以來新教を奉ずるもの甚だ寡なく爲めに國中の下等社會い天主教の迷信に沈み上等社會は重に不信說に陷り唯だ政治學問の一邊にのみ心を傾け其心修らざるもの多きが故に政躰常に鞏固あるを得ざるあり彼のビスマーク

公の如きも獨國をして社會黨の禍を免れ之をして鞏固永久あらしむるものは一に基督教の力に由ると爲せりと云ふ以國の有名なる政治家マズシニー曰く「獨一眞神の上に存在するの思想一たび廢滅に歸するや道德の大法即ち各人に其義務を負はしむる責任の念は之と共に廢滅に歸せざるを得ず加之人生を統治する進歩の理法あるの念も之と共に廢滅に歸するに至らん果して然らば吾人い誰の名に依て人民を教育せんとするか誰の名に依て人間の公道を破るものを罰せんとするか誰の名に依て吾人の權利を主張せんとするか」云々國に宗教道德の思想なきときい法律制度い一己人或い數人の我儘ある發意に出で之が根據あらざるなり國家豈斯の如くにして鞏固永久なることあらん」

（註米國の法學博士モルフオルド氏著國民論（チーシヨン）に基督教が國民の團結に大なる影響を及ぼすを論じたる一項あり本論に關係あれい其一節を摘譯して之を左に掲く

猶太、希臘、羅馬等の古代の國々い其歷史上の關係にて基督の降世に對して上帝の深き經綸を成就せりキリスト及び其降世の時代即ち此新時代にてい列國い歷史上基督教の開發に於て存在したり其國民を團結組織したる原理い即ち此生命（キリスト己を指して自ら生命と云へり）より出でたり故に此新時代に於ては歷史上基

督教開發の境外に一として其生命を全ふしたる國民あるを見ず事變の解釋は如何なるも又政治論の結尾は何ん歸するも此一事い歷史上動す可らざるの事實なり天下基督教生命の加はり之が活きたる勢力とありたる人民に一として鞏固なる國民を組織する政治上の原理とならざるいなし之に反して回々教の傳はりたる國々に於ては更に國民を組織するの勢力あるを見ず回々教い北歐の蠻族と到底比較し難き文明の高點に達したる人民間に弘く行はれ千有餘年の間世界の最も豊饒異形なる國々を所有せしと雖も一つの國民をも組織するを得ざりし此教を代表する最も強勢なる一國（土耳其）は今や基督教國の一隅に在りて衰頽を極め支離分裂し將さに數種の民族に分れんとし僅かに他國の恩惠に由て其生命を保つのみ佛教に於けるも亦然り之が一種族の民若くい一國を教化したるを見れども之に國民を組織開發するの精神あるを見ざるあり斯の如く「プラス」教なる印度の學者も常に其國に政治上團結の力なきを嘆するなり同國にい歷史口碑の永き連續あるも此力を得る能ざるなり云々（國民論三百六十八九ページ）

佛教を以て我國の文明を維持せんとする論者若しくい單に歷史上の連續に由て之を永續せんとするの學者此論を見い深く悟る所あるべし

第八章　宗教道德の必要（二）

儒教已に用ふ可からず佛教亦無力なり何を以て我國の道德を維持せんとするか何の道德を以て我國の元氣を振作せんとするか我社會の結合は何に因て圖るべきか我國の政躰い何の教に因て聲固なるべきか是れ目下我國急迫の問題たり我國將來盛衰の關する所豈忽に論定するを得ん

今や我國世論の趣く所を察するに其思想甚だ漠然として此等重要の問題に對してい未だ何等の定見も非ざるが如し偶一個の説を主張するものあるもスペンサル、コムト者流の世俗論（ヒキラリズム）に過ぎざるなり世俗道德（宗教的道德に對して云ふ）の欠典は略儒教の欠典と同じく感化力の乏しきと權威の足らざると是あり前文にも論ぜしことあるが如く道德の實行に最も必要なるものい感化力と權威の二つなり道德に感化力あれば唯一個の空論たるに過ぎず亦社會人心に何の効力をか及すを得ん西哲云へることあり曰く道理い帆にして感情い風なりと人い道理より寧ろ感情に動かさるゝものあり故に正邪善惡の理い如何に明かに知り善の爲すべく惡の爲す可らざる事い何程判然たるも心に深く之を感ずるにあらざれば誰か之を行ふものあらん道德に權威なければ宛も法律を實行するの政府あきと一般唯一個の徒法たるに外ならず其道德の理論にい間然する所なしと雖も之を犯し之を破りて誰も之を咎む者あきときい如何にして之を實行するを得ん縱令良心ありて之を咎むるとあるも單獨なる良心の力は極めて小なれば如何にして强勢なる私慾に克つを得ん宗教の道德は然らず多少之に感化力あらざるはなく亦人間以上のものを信ずる以上い多少之に權威あらざるいなし是れ實際に於てい下等なる宗教の道德も高尚なる世俗の道德に勝る所以なり此一點に於ては儒教主義政教一致の道德は却て哲學的世俗の道德より人間の實際に適するものと爲さゞる可らず

今一歩を退き假りに世俗主義の道德をして人心を維持せしむるに足ると爲すも更に大なる欠典あるを如何せん人は宗教的の動物なり地上の物、有限の事を以て滿足すべきものにあらず人心は久しく無宗教の地に安ずるを得ず之をして無宗教の地に安ぜしめんとするは天外雲際に翔翱するを喜ぶ鷲鷹をして狹矮窮屈なる籠中に安ぜしめんとす

ると何ぞ異あらん其不平不愉快得て名狀すべからず故に國に其宗教心を滿足せしむべき眞正の宗教あるにあらずんば人心の不平社會の不權衡は到底醫す可らざるあり況はんや眞正の宗教あるにあらざれば國家の元氣を振作し社會の結合を圖り政體の鞏固を保すべからざるに於てをや

力今世の論者中我邦人の宗教に淡泊なるを誇稱するものあれども是れ人心の異變にして人性の常態にあらず宗教は人性の自然に基くものありされば天下豈無宗教の人種ある理あらんや一時人心の宗教に淡泊なるが如き形狀を呈することあるは是れ人事の異變にして必す然る所以の理なくんばあらざるなり抑も目下我邦人の宗教に淡泊なるが如き形狀を呈せるは從來の宗教已に其勢力を失ひ復た人心を滿足せしむること能はざるに未だ之に嗣ぐべき宗教あらざるが故あり且つ我國の士人たるものは此迄たりとも神道佛教を信ずるもの甚だ稀にして專ら儒教主義なる現世の宗教を奉ぜしものあれば今日の如き形況ある亦怪むに足らざるなり

（註）余曾て我國民の宗教に淡泊ならざる事を毎週新報第五十七號及び第五十九號に論ぜしことあり今爰に其一部分を拔萃して讀者の參覽に供せん

（前略）先づ我邦人は論者の唱ふる如く果して宗教に淡泊なるか之を究めざるを得ず然れども之を究むるに先き立ちて一の論究すべきとあり元來宗教なるものは偶然に起りたる乎將た人性の自然に出づる乎若し之を以て偶然に起りたるものとせは同し人類中にも更らに其念なきもの多くあるべく又人類の歷史中に更に其念なき時代もなかる可らざるなり然るに歷史中著しき事實は何れの時代に於ても宗教あらざるとあきの一事なり歷史の未だあらざる初代に溯るも初人の遺蹟中最も顯著なるは宗教に關する器具なりとす勿論其宗教の形狀は種々趣きを異にするあり又時々之に盛衰なきに非す且つ時に宗教に淡泊なる人あきに非れとも是れ唯小數の人あるのみ又今日世界万國何の處に至るも宗教の行はれさるはなく文明國も野蠻人も共に宗教を信奉せり時に蠻民の間を漫遊する旅客にして宗教あき種族あるを報するものあきに非れとも多くは其宗教なしとするは其旅客の自ら宗教とするものあらざるのみにて眞に宗教なきに非るなり

斯の如く宗教は天下万世一般に行はるゝものなるが故其起原を以て偶然に歸せんとするは到底維持す可からざるの僻論なりスペンサル曰く凡ての宗教に依て顯はるゝ種々雜多の現象を以て偶然に歸せんとするは到底維持す可らざる假定あり其證據を正直に究察せは或る人の主張せる宗教は僧侶輩の發明なりとの說を全く否定すと苟

くも聊かにても宗教の現象を究致したるものは宗教は偶然一個々々の人に起るに非す深く人性の自然に根するを知るへし宗教果して人性の自然に基くものなるか之あるは人性の常にして之れあきは其變あり譬へは人は元と推理の性を有するものなるが時ありて全く推理の力なき人あるかごとし稀れに推理の力あき人あるは之れ變なり之を以て人性の常と爲す可らず

宗教を以て斯の如く人性の自然に基くとせば元來宗教に淡泊なる人あきは勿論一國の人宗教に淡泊なるを以て風を成す事ある可らざるなり若し万一にも一國多數の人民にして宗教に淡泊なるあらば是れ非常の異變にして決して常道を以て見る可らず而して必す然る所以の理由なくんはあらざるあり

日本人果して宗教に淡泊なる乎之を既往に照し之を今日に質すに決して然らざるを知るなり昔し佛教の盛なるや上み天子王公貴人を始めとし下も農工商に至るまで之を信せざるはあし今日に於てこそ佛教は愚夫愚婦下民のみ信ずる所あれ昔時は然らず當時の學者英雄と稱する人大概之を信せざるはなし試みに其一端を揭ぐれば天子皇子並に大臣の出家して佛に歸せし者多きを見て知るべし天子の出家せしは聖武天皇を始とし後中御門天皇に至るまて總計三十七帝なりとす大臣出家の多き中世何々入道と稱する人の多きを見て知るべし我邦人昔時よ於て宗教よ淡泊ならさりしなり信長の時天主教我國よ傳來す當時の諸侯或い當時豪傑と稱する人多くこれを信ず傳來

以來七十年を經て其信徒二百万の多きよ至ると云ふ德川氏天下を一統するに及て之を嚴禁し殘忍苛酷名狀す可らざるの刑戮を行ひ五十餘万の不幸の民を殺して僅かよ之を禁止するを得たり德川氏時代天主教徒の迫害の慘狀い未た十分世の學者の詳かよ穿索せさる所なるが其殘忍苛酷い恐くい羅馬時代の迫害よ讓らざるべし其刑い水責火責或い十字架よ釘するあり或い耳を削き鼻を刪き指を切り足を斬りて弄殺するありて其慘狀とても今日の人の想像すへきよ非す然るよ信徒皆な從容として此苛刑に遭ひ死を視る歸するか如しと云へり斯の如きの熱心い宗教よ淡泊なる人民の決して現いし得へき事に非るなり　（以下畧之）

國に人心を滿足せしむべき眞正の宗教なきときは徒に道德の腐敗、人心の萎靡を來たすのみならず他に一種の病症を釀すことあるを免れず人心い猶ほ自然力の如く此に損する所あれば彼に益する所あきを得ず彼に變生することあれば此よ損耗することあき能いず若し眞正の宗教ありて宗教心を滿足せしむるを得ざるときい或い變じて功名を求むるの心となりて戰爭となり政治の變動となることあり佛國革命時代の如き是なり或い快樂を求むるの心となりて劇場、觀せ物、遊戲の流行を來すことあり羅馬帝國時代に國民一般種々の遊戲よ耽けりたる如き是なり或い利欲を求むるの心となりて一時商

業の繁榮を來すことあり西班牙の金鑛を南米洲に索めたるが如き是なり然れども功名や快樂や利益い皆な限りあるものにして限りおき願望を有するものゝ願望を充たす能いず且つ聊かにでも之を得るは僅々數人數十人若しくい數百人の事にして國民多數の人心を滿足せしむる能はず而して國民多數の人心を滿足せしむる能ざるの結果い國民の不平を來たすの原因にて苟じくも國家の元氣衰耗し人心活潑力を失ふに至らざる以上い國家の變亂は免る可らざるあり之に反し國に眞正の宗教あるときは國民皆な其心に安ずる所ありて各其業を營むを得、一の功名、一の利慾に支配せらるゝの憂なく又人心一方に偏倚するの弊に陷らず從て不平も亦少かる可し宗教は猶ほ時計機械の搖錘の如く社會の各機關をして圓滑に運轉せしむ宗教は猶を蒸氣錨の安全管よ於ける如く社會不平の氣を漏し之をして破裂の憂なからしむ米國歴史の大家バンクロフト氏同國「クリスチヤンアドヴオケート」新聞の記者に送りたる書に「基督教の信仰は實に人類が屢々最も恐る可き危險を免れたる救命船なりとす」云々の語あるも蓋し此邊の意を述べたるものならんか

偖て我國現今の社會たる政論偏重の病狀を帶ぶる者なり速かよ之を救治するの道を講ぜざれば將來社會破裂の憂なしと爲す可らず近時政論頓に勢を失ひ一時嗷然たりし政黨論も跡形なきに至り政論偏重の形狀を失ひたるが如くあれども是れ人心の他の一方に向ふたるが故然るにあらず唯一時人心之れに厭きたる故休息するのみ今日よ於て宗教の擴張を圖り人心をして速かに安んずる所あらしめざるときい他日人心一時に政論に傾向し過劇の政變を來すの憂おきことを保す可らず彼の歐洲諸國にて識者の最も憂とする社會黨、虛無黨の原因の如き近因い兎に角其遠因に至ては余輩は之を宗教の衰頽と教育の普及とに歸せざるを得ざるなり、ソロモン曰く智慧多ければ憤激多く智識を增す者は憂患を增すと人民智識の增加するや之と共に其道德增進するに非れば人民をして益〻不平の心を抱かしめ彌〻其憤激憂患を增加せしむるに至らん歐洲諸國近時教育稍く四民に普及し國民の知識頓に增加せしと雖ども其宗教い或い頑固迷信の甚しき希臘教又は天主教なる乎若しくい儀文に流れ活潑力に乏しき「ルウテラン」派にして其智識の進歩と共に進歩せざれば自然其宗教心の必要を充す能いず之が爲め無宗教に陷

るもの少からす已に信を宗教に失はゞ其心い功名利欲の途に發泄を求めざるを得ず然れども功名利欲の途い無限の願望を遂げ得る所にあらず又た之を遂るも僅々數十人數百人の事なれゞ國民多數の人心を滿足せしむるを得ず此に於て乎勢ひ虛無黨社會黨の如き思想鬱生せざるを得ざるあり

我國の人智よりして永く今日の有樣よ止りて進まざるものとせゞ眞正なる宗教の必要或い左程甚しからざるべしと雖ども一旦東洋從來の風習を破り泰西文明諸國と共よ文明改進の途よ驅馳せんと決心せし以上い縱令ひ之を慫慂するものあるも人智は決して永く睡眠の位置よ安する能わず必らず覺醒して進歩の途に就くとあるべし況んや今日の形況上下共に久しく隱伏せる人智を覺醒して之を進歩せしめんと務むるに於てをや我國の人智にして果して彌よ復活し益ゝ進歩することありとせゞ何を以て其人心を保養し其道德を維持せんとする乎何を以て其不平心を醫し社會の壞裂を免れしめんとする乎已に今日に於てすら人心の浮薄實に甚しく國法にさへ觸れざれゞ如何なる惡事を爲すも憚らずと爲すもの少からず法律は益進歩するに從て其區域彌狹くあるに此空乏を

充たす可き德敎あらざるときい如何ん道德彌頽敗して禽獸社會に陷らざらまく欲すと雖も豈夫れ得可けんや

人智彌よ開くるに從て其願望益多くあるに之を滿すの道あきときは人心の不平彌大ならざるを得ず野蠻の人民は一杯の水一椀の食以て其願望を滿すに足れりと雖ども開明の人民い然らず金衣玉食以て其肉躰口腹に充て居るには壯麗ある宮殿あり出るには肥馬輕裘あるも尙ほ其願望を滿すにたらず然るに人事の競爭益甚しく社會の不平均彌大にして自己の願望万分の一だも尙ほ之を滿すを得ざるときは其不平大ならざらんことを欲すと雖ども豈得可けんや斯の如き場合に至て社會黨、虛無黨、共產黨等の如きもの起るも亦た自然の勢なり世の論者には國に自由さへあれゞ不平なしと主張するもの少らずと雖も是れ人性の眞境に暗き迂遠の論と謂ふべし余輩い素より自由を愛するものにて自由多けれゞ其不平も幾分か減ずべしとは思惟すれども是のみよてい到底其不平い醫す可らず人性に自然氣質の異ある以上い其智識才能に智愚賢不肖の差なかる可らず而して人に智愚賢不肖の差ある以上は社會に貴賤貧富の別あるも亦自然なりさらば

國に充分の自由あり其法律に一點の不公平なる所おきも社會は決して貧富貴賤の差異を滅し平等なること能はず已に社會に貧富貴賤の差異ある以上人心は到底平なるを得ざるあり是に於て乎眞正なる宗教の必要彌よ顯はる夫れ此世は人類の其願望目的を達し得る所にあらざるあり今世は來世に到るの行旅〻未來の大學に至るの小學即ち永遠の生命を全ふし人性の本分を達せんとするの修業場なり人にして此高大無邊なる願望を有し此高尚至尊なる目的を持ち至善至愛全知大能の上帝上に在りて吾人を保護祐導するとを信ぜば其心常に爽快寛裕如何なる困難辛苦をも喜で之を受け如何なる難事苦業をも樂で之を爲し更に不平心の寓所なかるべし是に於て乎儒教の所謂素二富貴一行二乎富貴一素二貧賤一行二乎貧賤一(中略)素二患難一行二乎患難一の實殆て一般に行るゝを得、人民に斯の如き目的斯の如き信仰ありてこそ始めて國家安全にして文明の域に進み其航路にて如何なる暴風怒濤に遭ふも破壞沈沒の患を免かるゝを得るならん今や我國の人智は彌よ覺醒し益〻進歩せんとするときに當り識者は何の宗教を以て之を誘導せんとする乎苟くも適當の宗教を得て之を誘導するに非ずんば縱令ひ是までは無事にて舊日本を解纜せしと雖も爭でか暴風怒濤の難を逃れて新日本なる愉快の港に達するを保せん是れ目下我國愛國者の最も焦慮せざる可らざる所なり嗚呼儒教已に用ゆ可からず哲學的の道德亦無効なり今日に於て我國目下の危急を救ひ萬世の基礎を定め其教の欠乏(目下我國には政のみありて教あらざるなり)を充たすものは夫れ基督教を措いて他に何をか求めん

第九章　儒教と基督教

近來我國の宗教思想は頓に一變し是迄基督教を異端視したるものも今や之を以て善教正法視するに至り之を贊成する者日を追て多きを加へ已れ之を信せざるも人には之を信せしめんとし竊かに之か傳播を祈るもの少からず然れども舊習に泥み儒教主義に僻するの甚しき斷然之を信し能はざるもの尚ほ多しとすれば基督教と泰西文明の關係を論するに先ちて儒基兩教の關係を述べ之を信納するに至るの媒介を爲すも亦無益の

事にあらざるべし

凡そ世界に行はるゝ宗教の種類多しと雖も之を大別すれば自然天啓、二種の外に出でざるべし人性の自然に出で、偶然に起りたる者に非るに至ては兩種共に異るなしと雖も一は人より出て人の工夫にて神を求め絶對に達せんとすると一は神より出て神の方法にて人を求め之を救んとするに在り一は一國一州或は一人種に行はるゝものにて其教理甚た不完全、概ね宗教的眞理の一端を代表するに過ぎず一は全世界人類一般の宗教にて其教理は完全無缺絶對絶極凡て宗教的の眞理を含有するの別あり佛教、波羅門教、回々教等は自然宗教の重もなるものにて天啓宗教は唯基督教の一あるのみ而して自然宗教は一時一代の假教にして完全終極の教たる天啓の宗教に至るの階梯準備たるに過きざるなり夫れ上帝人類終極の教たる基督教を世に現さんとするや先つアブラハムの苗裔たるイスラエルの一族を撰み之を以て神の撰民と爲し之に宗教眞理の初歩を教へ之に種々の律法例式を與へ直接に基督教の準備を爲さしめたり是即ち猶太教が基督教に至るの楷梯小學たる所以にして其律法預言教誡悉く基督教によりて全ふせらるゝの理と謂ふべし上帝は之と同時に世界の哲人賢者をして其自然の思想力を使用し宗教上の眞理律例を發明し間接に天啓ある宗教の準備を爲さしめたりキリストが「我律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れわれ來りて之を廢るに非ず成就せん爲なり」と云ひ給ひしは唯猶太教にのみ關するに非ず凡ての宗教にも關する言なるべしパウルは之に關し言を爲して曰く「(神は)一の血脉より出てし凡ての民を悉く地の全面に住せ預じめ其時と住むところの界とを定め給へり此は人をして神を求めしめ彼等が或は揣摩うる事あらん爲めなり」と而して自然宗教には一神教なるあり多神教なるあり或は凡神教なるあり又道德教なるあり不道德教なるあり又た樂天教なるあり厭世教なるあり其の形狀い千差万異なりと雖も皆な積極の點或は消極の點より基督教に至るの階梯準備たらざるはなし昔しアレキザンドリヤのクレメント(紀元後三百年比の人)希臘哲學と基督教の關係を論じて曰く「哲學い基督降生前の人の爲に之を受くるに至る準備の練磨たり哲學は之か爲め希臘人に與へられたる者と謂ふべし律法(猶太教)が猶太人に於けると一般哲學は希臘人をキリストに導くの師傅たるなり」此言凡ての宗教に

適用するを得べし今儒教が基督教に於ける關係も亦之に異ならず積極の點より觀るも消極の點より觀るも儒教か基督教に至るの準備を爲し之が爲にハ小學の階梯と爲り其趣意目的始めて基督教にて全ふせらるゝ事は肯て疑ふ可らず

第一、儒教が基督教に對して甚だ緊要なる準備を爲す所は先つ他の自然宗教と一般消極の點にありとす何れの宗教にも善を勸め惡を懲すの事あらざるはなしと雖も儒教は殊ゝ之を重するものなり古へ堯舜禹其位を授受するや相警戒して曰く人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中、而して後世の儒者皆なこを以て道學の本源と爲す斯の如き道德教は所謂る吾人をキリストに導くの師傅にして基督教に對し最も必要の準備たらざるを得ざるなり自修自慎の道德教ハ時に猶太教か「パリサイ」宗に於るか如く外行を尊び小節を重じ皮相を飾る僞善自尊の弊習に陷ることありと雖も誠實義を慕ひ道を求むるの士に於てハ其結果たる必ず其心に罪惡の深きと救道の必要なるを悟らしむるに至らざる可らず夫れ道德教ハ人に道を示すことあるも之を履行するの力を與ふる能ハず之が理を明にするあるも其心を變化するの力なし道理は死物にして人を活かす能はず德義は無情にして人を感化するの力なし聊か之を履行し得ると妄想するとあれハ忽ちに傲慢自尊の不德に陷るあり到底人を眞の道德に導く能ハざるなり故に其結果ハ唯人を死おしむるに至るのみ世に道德を以て人を卑屈に致すとの感格を抱くもの多きも亦宜べならずや要するに儒教第一の準備ハ消極の點に在りて律法か猶太人に於けるとの一般吾人に罪惡の深きを知らしめ力ある救道の必要あるを悟らしむるに在るなり

第二、猶太教にてハ其律法儀式預言盡くキリストを指し之か記號標章（シンボルタイプ）となり皆あキリストにて成就せられたり儒教に於ても亦基督教の記號標章と云べき者少からず此れ即ち儒教か基督教に於ける積極の準備と稱す可き乎儒教にて完全なる社會と爲す所ハ即ち王道の行ハるゝ所にして儒者ハ唐虞三代の治を以て王道の標準とせしとの事ハ余已に之を數章前に論ぜり王道の思想は即ち基督教天國の來る準備を爲せる者と謂て可なり基督教天國の教理の一端を表章する者にて基督教天國の來る準備を爲せる者と謂て可なり基督世に臨むや宣言して曰「天國ハ近し悔改めよ」と又舊約時代の預言者天國に就き預言するや曰「之に權と榮と國と賜ひて諸民諸國諸音をして之に事へしむ其權ハ永遠の權にて移りさらず又其國ハ亡ふることな

し」（但七〇十四、）抑天國とい如何なる事を云ふや乃ち神の政治の謂にして神の意の全く行はるゝ所を云ふ故に亦神國とも云へり元來人類い上帝の己が肖像に象りて造り給へる者にて上帝の政治を受け之に事へざる可らざる者なれども始祖罪を犯せし以來上帝の意に逆ひ之に叛きて私を恣にし或は偶像邪神に奉へ或は功名榮利に其心を奪はれ幾ど人の人たる心を失ひ上帝の義罰にて永遠の刑に處せらるべき者なるも上帝深く之を憫み其御子キリストを世に降し世人に代りて罪の贖を爲さしめ再び神の政治を建しめ給ふ者是即ち天國なり此天國い一己人に在てい上帝の意に服從しキリストの心を以て己の心とおし私意私情を去りて神の政治を受るとにて斯る人々增加するに從て一國に及び全世界に波及する者なり故にキリスト信徒の祈禱や常に「爾國を來らせ給へ爾意の天に成る如く地にもなさせ給へ」との一事に在なり今此の天國或は神國の王道に異なる所は（一）王道い有形の政治にして天國は無形の支配あり（二）王道い一國一政府の上に限ども天國い世界万國に及ぶを目的とす（三）王道の至治は古に在りて一代若くい一世にして永く行はるゝにあらざれども天國は然らず其至治と云ふべきい未來に在りて

其政治は永遠窮りあし（四）王道にてい上下貴賤尊卑の別を立て此秩序を嚴重に保つを目的と爲せども天國にては全く之に反し上下貴賤尊卑の別なく皆な神の前に於て同等ありとし此區別を除き天下の人をして皆な同胞兄弟姉妹と爲し互に相愛せしむる事を務む（五）王道い敎化を施すに上より下に及ぼし一國より一己人に及ぼすを以て順序と爲せども天國い然らず下より上に及び一己人より全國に及ぼすを當然と爲す

第三、儒敎にて王道即ち敎化の中心と爲すものい君父あり仁慈は君父の臣子に對するの敎にして忠孝い臣子より君父に向つて盡す可きの義務なり基督敎にて天國の中心敎化の根本と爲す所い上帝或い基督なり而して神人間の敎と稱すべきは唯愛の一のみ此兩敎の優劣關係を知るは敢て難きにあらず道德を敎ふるに空理を以てせず感化力と權威とを有する生けるものを以て其中心と爲すい共に同じと雖ども儒敎の甚だ不完全にして僅かに基督敎の準備を爲すに過ぎざる所以は屬弱よして罪過多き人を以て敎化の中心と爲すに在とす世に明君賢父甚だ少なく忠孝を以て德敎と爲すは人類の眞價を落し開明の進歩を妨ぐるの弊ある所以い余輩已に之を第六章に論じたるが今其要を摘め

ば(一)人を以て教化の中心と爲すの弊い明君賢父甚だ得難きが故徒に教化を維持する能いざるのみならず却て人心を亂だし道德を敗ることあるを免かれず(二)忠孝を以て道德の本とするは人性を下卑にし知識道德の進歩を妨げ人類をして常に野蠻幼稚の有樣に安ぜしむるの弊ありとす」然れども基督教の天國に於ては全知全能至善至愛の神を以て吾人の君とし父と爲し教化の中心と爲せば全く儒教の如き弊なきのみならず更に多くの利益あるを知るべし(一)至善至愛至聖の神、完全無缺なる道德を有し給ふ神子なるキリストを以て吾人の君と爲し父と爲し師と爲せば吾人の思想道德進まざらまく欲すと雖も豈得可けんや儒教にては聖人にして始めて天を冀ふべしと爲すも基督教にては凡の人に教るに不完全なる人間を以て師と爲す可らず必ず「天に在す爾曹の父の完全きが如く爾曹も完全すべし」と教ふ豈太だ高尚なる教にあらずや(二)基督教にては「心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡し主なる爾の神を愛すべし」と教へ亦同じ人類の間には此同し愛を以て相交るべしと教ふ神は聖あれば之を愛するものも亦聖あらざる可らず神は眞理あれば之を愛するものも亦眞理に就かざる可らず至善至愛の神を愛するも

の其道德の高尚ならざらんとを欲すと雖も豈得可けんや而して愛の教は上下貴賤の別なく平等の義を示すものなり此心を以て心とせば恰も引力の天躰を統御する如く一身一家一國盡く親和結合して各其處を得るに至らん(三)神い在さゞる所なく能はざる所なきの神にして吾人を愛し給ふや其生みたまへる獨子キリストを賜ふ程なり斯る神の感化力及ひ權威い吾人をして心より改めしめざるを得ず(四)且つキリスト教の道德い律法を以て外よりして内を制するものにあらず神の律法吾人の心に入り來り中心より善を行ふに至り加之神の靈は吾人と常に偕あり吾人の屠弱なるを助けて之をして自ら愛の道を守らしむ是れ基督教の實際に行れて甚だ力ある所以なり今儒教忠孝の教を以て之を上帝に應用し上帝に向て眞正の忠孝を盡すときい眞に人間の道德をして高尚あらしむるに至らん此即ち希臘の哲學が希臘人に於る如く儒教が東洋に在りて基督教に對し其準備を爲す所なり是に於て儒教も亦吾人をキリストに導くの師傅と云はざる可らず」師傅い唯幼年の時のみ必要なり記號標章は唯眞實の實躰あるを示すのみ猶太教唯キリストの來まで必要なりしが如く儒教も亦基督教の來迄必要なり已に眞教來らい假教は

去てざる可らず今や基督教我國に來れり此まで儒教に依賴せし者彼のパウルがキリストを視て直ちに猶太教を棄てたるが如く之を棄てゝ基督教に從いざる可らず余の冀ふ所い眞實儒教に歸依したる者の多く基督教に依て其宿望宿願を達し其救を得んとあり

第十章　基督教と文明

古來泰西諸國にて國の文明を區別するに宗教の名を以てするを常と爲すは誠に故あるも蓋し國民の思想、風俗、精神、文學等に影響を及ぼす宗教より大あるいなし佛教の行はるゝ所には佛教固有の思想、風俗、精神、文學あり回々教國にい亦回々教固有の風俗慣習あり基督教國亦然り其思想、風俗、精神、文學等何れも基督教と水魚の關係あらざるいなし其宗教を離れて單に其文明のみを講究せんとするも豈夫れ得べけんや

今基督教の文明と基督教以前歐洲の文明及び佛教儒教の文明とを比較するに唯外形上に大なる差異を見るのみならず其根本の思想精神に大ある區別あるを見るなりギゾー

古代の文明と歐洲近世の文明(基督教の文明)とを區別するに其性質形躰の單獨致一あると之が複雜異殊なるとを以てせり其言に曰く

余輩歐洲近世の文明に先きだちたる文明を觀察するに亞細亞に於けるも希臘羅馬の諸國に於けるも之を統御する文明の性質の致一あるに驚かざるを得ざるなり何れの文明も單一の事實或は單一の思想より現出したるが如し、、、、例之ば埃及に於てい神政主義は社會の全躰を壓倒し其風俗にまれ其石碑にまれ埃及文明の遺跡として今日に存する者は一として之を彰はさゞるはなし印度に於ても亦同樣の現象ありて幾んど全社會を壓倒するものい埃及同樣神政の主義なりき、、、、之を以て歐洲近世の文明と對照せゞ其性質の異なる如何ぞや試に眼を放ちて之を一見せよ其形狀如何に複雜繁劇異樣なる哉社會組織の万般の主義い同時に之に存するを見る俗權、教權、神政、王政、貴族政治、共和政治の諸元素、社會の諸狀、自由、富及び權勢の測る可らざる種類皆な同時同所に伍を爲して存するなり云々

此文明の性質に斯の如き兩樣の差あるい其文明に生命あると生命なきの致す所なり其文明に生命あれゞ必ず有機的の作用あり有機的の作用ある以上い亦必ず複雜異殊なる機關あらざるいなしされゞ斯の如き文明には必ず活潑なる運動あり進歩ありて一定の

方向に從て進歩するなり之に反し其文明に生命あるきや有機的の作用なく又た複雜異殊の機關なく其動作は唯單獨なる器械的の動作のみ恰も無機物が器械的の運動を爲すに異あらず一時他の動力によりて進行することありと雖ども暫くにして又た停止するあり故に斯の如き文明の性質の單獨致一なるも亦當然なりと謂ふべし

倩〻基督教外の文明を觀察するに之にギゾー氏が所謂單獨致一なりとの性質あるは勿論の事なるが之に加ふるに左の二三の特性あるを見るなり（一）凡そ基督教外の諸國は一時文化に進むことあるも姑くにして亦退歩するとあり其進歩や永久なる能はず或る點に達するや必ず退歩するは恰も銃丸を天に向て發射するが如く其發射力盡るや自然の重力にて地下に墜落するなり其形狀又木偶人の自己の動力にて進行するにあらず他の動力を假りて暫らく活動の有樣を帶ぶるが如し見よ埃及バビロン印度支那希臘羅馬ピルウメキシコ等の文明皆然らざるはなし此等の諸國一時盛大を極め非常の繁昌に至るも其動力盡くるや忽ち墜落衰頽して又復興し能はざるに至る其趣きは古今萬國異あるなしリーベル曾て此事を論じて曰く「古代の國々凡て短命あり一旦衰頽に及ふや復

之を恢復するの力なし其運行凡恰も彈丸を天に向て放つが如し其始めや進歩の勢盛あれとも暫くにして其動力を失ひ再び退歩に赴く而しての其滅亡せんとするや其速力亦甚だ盛なり之に反して近世の國々は凡て長命なり而して之に全く古代に見ざる活動力あるを見るなり」（米國プレスビテリヤンレビウ）（二）基督教外の文明にて凡道德と智識、富國と强兵、併行する能ずず國民の知識稍進むや忽ち舊來の宗教道德を輕侮し其心浮薄、其道德頽敗するに至る凡古今一轍あり彼の希臘羅馬諸國にて國民の智識稍進むや人情輕薄に流れ道德地に墜ち愚夫愚婦の外凡從來の宗教を信ずる者なく大概之を輕蔑視し偶ま之を器械視し之に哲學上の趣旨を與へ之を維持せんと圖る者ありと雖も其企望計畫凡盡く畫餅に屬し反て之が衰頽を促がすに至ると數〻なりき且其國富むや人民奢侈に流れ懦弱に陷り從來の勇氣凡變じて怯懦の心となり其國固有ある質朴の美風凡化して放奢淫逸の惡習とあり美風善俗去りて其跡を止めず教化陵夷し人心萎靡するに至る是に於て乎愛國の志士慷慨悲憤深く其國勢の日に傾くを憂ひ種々の方法百般の手段を以て奢侈懦弱の風俗を矯め質朴剛毅の氣象に復さんとを勉むると雖ども其方法手

段は盡く徒勞に屬せざるべなし之を古今万國に徵するに皆然りとす(三)基督教外の文明に國民の永久進歩するの思想あるものあるも又完全なる社會の理想あらざるなり何れの處にか完全なる社會の理想を未來に置き駸々乎として其國運を無窮に進めんとする思想ある何れの國にても黄金世界い已に過ぎ去り世は早や澆季に屬すとの思想あらざるはなし尚古卑今の精神は獨り支那のみに行いるゝに非ず基督教國外何の所も之を見ざるはなし希臘の哲學印度の佛教も社會進歩の思想は曾て思ひ當らざる所にして何れも黄金世界は古へに在り後世に至りて人心愈墮落すとせざるはなし

此外國民たるの思想、一己人の價直を重ずるの精神等は獨り基督教國にのみ見る所あり、眼を轉じて基督教國の文明を見一見すれゞ其趣全く之に反し其文明の複雜異殊にして活潑力あるは已にギゾー氏が論ずる所あるが之に加へて進取の精神は社會一般に普く進て退くを知らざるの有樣あり國民一般其理想を未來に置き黄金世界を前に望み孜々汲々舊を改め新に就き鞠躬黽勉智を磨き德を脩め日に月に進て止まるを知ざるあり國富み人民快樂を得るの道日に便利を加へ其生活の度月に進むと雖も之が爲め敢て

剛毅勇敢の氣象を失ひ怯懦淫逸に流るの憂ひあく其勇氣は富と共に進み奢侈の間に質朴の美風を存し文化の内に封建武士の精神を遺し隨て文質彬々たる君子の美俗い社會に普くして國力の萎靡する憂あるを見ず智は日に進み人い次第に悧潑を極め學い益〻上達して宇宙の蘊奥を叩くに至るも之が爲め人心浮薄に流れ道德を輕し宗教に信を失ふの憂ひあく一方にい商利を爭ひ競て天下の遺利を求むるに汲々たるも一方には廉耻を尊び道德を重じ慈善を行ふの精神甚だ盛なり一身を忘れて學問に從事する人あれは側にい一命を擲て野蠻人の爲めに福音を傳ふるの仁人あり泰西文明の實況を詳かにせざる人い往々人智進み學問開くるに從て宗教い衰頽するが如き思想を爲すとありと雖も是れ全く歐米文明の性質を知らざるが故なり何れの時代か今日の如く人々の宗教に熱心なることある何れの世にか今日の如く外國傳道の盛なる世ある宗教上の書籍の出版あるも人々の會堂に集るも恐くい古來今日の如く多きときいあからん富國と强兵と併行し文と武と一途になり智と德と共に進み進取の精神更に弛むことなく永久少壯の氣象を備へ完全なる理想の世界を未來に置き進で退くことを知らざるは是れ即ち今日

基督教國文明の精神あり何れの世何れの文明にか之に類するものあるを視る斯の如きの精神ハ基督教の外に吾人の曾て見さる所なり

今夫れ斯の如きの文明ハ何によりて起りしや歐米の文明に斯の如きの精神を附與せしは何に因る乎將た其人種の然らしむる所なる乎或ハ人類自然の發育に因る乎若し之を以て單に人類自然の發育に因るとせバ何故に歐米の人民にのみ斯の如き文明起りて東洋諸國には起らざるや何故に昔時に起りし文明ハ半途にして衰滅に歸せしや何を以て之を解說する若し又文明は人種の然らしむる所ありとせば何故に同人種なる印度人にハ起らざりし乎若し果して斯の如きとありとせバ東洋諸國は遂に文明に進むの望を絶さゞる可らず豈斯の如き理あらんや余輩の觀察する所歐米諸學者輿論の歸する所にして大なる過ちなかりせバ其小原因ハ兎に角其大原因ハ基督教にありとあさゞるべからず但し余輩が歐米文明の大原因は基督教にありと云ふも決して基督教が其文明の元素を盡く附與したりと云ふにあらず又今日の文明は盡く基督教の教旨に從つて起れりとおすにあらず唯之に精神生命を附與したるを云ふあり今日の文明の元素中基督教の未

だ傳はらざりし以前より存する者も多からん又其文明中にて曾て基督教の教旨に見ざるとも少なからざらんされど基督教を以て歐米文明の大原因となすはこが其文明の諸元素に一種特別なる精神生命を附與し全社會を調和浸潤するが故あり夫れ基督教が全社會に影響を及ぼすものハ器械的の作用にあらず有機的の作用あり茲に死人あり其五官支躰筋骨皮肉の元素性質更に生人に異あらずと雖も見る可らず測量すべからざる生命と稱する一力其躰より離るゝや忽ち活動の力を失ひ人之を動すに非れバ自ら動くの力なく其儘にして棄て置かバ忽ち腐敗するに至らん已に斯の如くあらば之を活動せしめんとするハは機械的の作用に因り電氣の力を以て之を動かすか若しくハ有機的の作用よて之に生命を附與し之を活さゞる可らず(生命を附與するハ人力の及ぶ所にあらず)社會は猶身躰の如く而して基督教が之に影響する摸樣ハ猶ほ生命精神の身躰に於けるに異ならざるなり之が作用を知らんと欲せば其性質を究めざる可らず何をか基督教と云ふコルリヽヂ曰く「基督教ハ哲學にあらず生命なり」ニアンデル曰く「我輩ハ基督教を以て人性の深底より自然に發生したる教とせず即ち天より降りたる能力と爲す之に

因て天ハ自ら抗敵する世界に開かれたり此能力ハ其本躰其起元共に遙か人力の得て製出すべからざる上に出て人類に新たなる生命を附與し之を其内部より變化せしめん爲に與へられしものなり」と右兩氏の云ふ所共に基督教を以て能力、動力、生命、精神と爲すにありて之を以て單に教理教訓と爲さゞるなり聖書の示す所亦之に異あらず曰く「天國ハ麪酵の如し婦之をとり三斗の粉の中に藏せば悉く脹發すなり」又曰く「我なんぢらに曰し言は靈なり生命なり」又曰く「此福音はユダヤ人を始めギリシヤ人すべて信ずるものを救はんとの神の大能たれゞなり」又信者か社會に對する影響を云へるにハ曰く「爾曹ハ地の鹽なり、、、、爾曹は世の光なり」と夫れ基督教ハ一己人に對して其心を悔改感化せしめて之に新たなる生命精神を附與し新人と爲すに在りとす社會に對するも亦之に同じ其風俗慣習を改良し之に改進活動の精神生命を附與し之を以て活世界と爲すにあり其作用麪酵の麥粉に於ける如く之が行はるゝ社會を漸次改良開發せしむ又鹽の食物に於けるが如く唯社會の腐敗を止め之を活かすのみならず之を調和修理して無上の趣味を與ふるなり此れ基督教の行はるゝ所にハ他國に見ざる一種の精

神生命ありて其社會を總括活動せしむる所以なり將た基督教が社會に及ぼす影響如何の詳細に至ては之を次章ゟ論述すべし

第十一章　基督教と文明（二）

余輩は前章に於て基督教が歐米の文明に一種特別の精神生命を與へたるの次第を論じたり此より進て其影響如何んの詳細を陳述せん

第一、現今獨り歐米基督教國にのみありて他國に見ざるは一己人を貴重するの精神なり今基督教國と他國に於ける一己人の價直を比較せゞ玉石も啻ならず基督教の未だ傳はらざる東洋諸國に於ては一己人の價直は牛馬よりも廉にして其幸不幸は更に識者の心頭に掛けざる所なり政府は人民一己々々の爲めにし其權利自由を保護せんが爲に設くるに非ず唯君主の尊榮を保ち其安逸快樂を扶けん爲めのみ政府君主の眼には國民あるも一己人あるなし自己の爲め許多の人民を殺すも意とする所にあらず一己人自も亦

重の精神なし其生命を視る宛も禽獸の生命に於けるが如く輕々しく小事故の爲に之を捨てゝ省みざるなり之に反して基督教國に於ては政府は政府自身の爲に存ずるに非ずして一己々々の人の爲に設くるの思想あり從て一己人の價直ハ甚だ貴重にして一乞食の權利自由をも決して犯す可らざるの勢あり一己人亦自ら重じ容易に小事故の爲めに生命を亡ぼす如き事を爲さず一般人民が一己人を貴重するの精神ハ其國の法律制度に現はれ其慣習風俗ゝ存して掩ふ可らざるなり蓋し以上は總躰の比較を揭ぐる迄にて之を特別なる事情に照して悉く然りと云ふにあらず若し一事一件の上より云へは西洋諸國にも一己人を輕ずるともあるべく又東洋諸國にも之を貴重するの跡なしとす可らず凡そ余輩が斯の如きの比較を爲すの精神ハ唯其大躰を擧ぐるのみ

此一己人を貴重するの精神や一人にありては自重の精神となり社會に對してハ自由權利を重ずるの風習となる自重自尊は歐米人特有の精神なり自由權利を重ずる余輩未だ近世歐洲人の如きものあるを見ず羅馬希臘人の思想曾て自由權利の事なきにあらず然れども其思想甚だ漠然にして考證す可らず且つ其自由權利をも一種族一類の自由權利

にして人民一般に關せざるなり況んや東洋諸國に於てハ權利自由の事は更になき所にて其文字さへ見ざるなり

此精神は何より來りしや之を直接間接に養成したるは主として基督教の力にありとす米國の學士ツーベル自由權の發育を論じて曰く

一己人の價直及び位置の高尚貴重測り知る可らざるの知覺は基督教が各人に附與したる所にして即ち之にて一己人に最も高尚なる義務及ひ最も重要なる特權を與へ之をして大なる責任あるものと爲す事と日新の文明ハ一己人の獨立を尊ぶ一種特別なる「チユウトニック」人種の氣象と其强忍勇敢なる性質とを養成したり是等のものが合同一致して一己人の權利なる思想と之を保護せんとする希望を益々發達せしめたり云々

一己人の權利なる思想は基督教ありて始めて起るものにて之が未だ傳はらざる所には曾て聞見せざるなり自由の思想亦然りマツキントシ曰く「人民の自由なる思想ハ信仰を以て義とせらるゝ敬理より起れるものなり」と又バヂオット英國憲法の生長を論じて曰く

其段階い多けれども其動力は一なり即ち英國中等社會の生長是なり而して此社會が活潑力を得しい「プロテスタント」教の感化に因てなり

基督教にては人は肉躰のみよあらず永遠無窮朽ちざるの靈魂を有すると爲す是れ即ち無限の價直を人に與ふる所なり基督曰く「若し全世界を得るとも其生命を失い〻何の益あらん乎」と一人の生命の貴重なるは全世界にも替へ難しとす何の價直か之に加へん又曰く「一人の罪ある人悔改めなゞ神の使の前に喜あるべし」と神い宇宙の主宰にて宏大極りなけれども尚ほ此蔑爾たる一地球の一罪人の悔ひ改むるを見て喜び給へり此思想や基督教の傳道師をして生涯に一人の罪人をも導くを得ゞ足れりとするの感情を抱かしむるものなり人民一般に斯の如き思想あらば一人にありては自重の精神となり社會に對しては一己人の自由權利を重ずるの風習となるも亦宜べならずや且つ人類は凡て罪人にして一人として己の功績に因て救を得るものなく皆なキリストの贖罪に因り信仰にて義とせられ初めて救を得るとす是れ自由平等の思想の由て起る所なり人間の前に於てこそ貴賤尊卑の差別あれ神の前にい皆な等しく罪人なり然らゞ則ち卑賤の

一民たりとも豈に之を蔑視するを得んや王公貴人たりとて豈に殊更に之を尊崇すべけんや是れ歐米に於て自由權利の思想の由て起る大原因と謂ふ可し

第二、婦人の位置を高尚にし一婦一夫の制を嚴重に守り家族の清潔を保持するい歐米文明の特性なりとす歐米にて婦人を尊ぶの風あるは獨逸人種固有の性質より起れりと爲すものあるか幾分う其理なきにはあらざるべけれども此良風を堅固に爲したるは一に基督教の力に由ると謂ふべし基督教未た傳はらざりし希臘羅馬の風俗を見るに更に東洋諸國今日の風俗と異ある所あるを見ず當時の風俗を陳述するものを見るに幾ど支那印度或い我國の風俗を陳述するものかと疑いるゝほどなり今試に米國の學士フヰシヨル氏が希臘羅馬兩國婦人の位置を論述するものを拔萃して左に揭げん

希臘に於ては婦人の位置いホーモルの時代よりペリクリスの時代に至て益降れりと謂ふべし女子の教育に心を用るものなし女子未だ嫁せざるや之を堅固に閉ぢ込め置きて容易に他人と交際するを許さず已に嫁するや唯其家政を整へ其僕婢女子を統御するを得るのみ常に一箇の部屋に居て容易に他出するを得ず常食い夫と共にするも客あるときは之と共にするを得ず又夫他に招待を受くるも之と共に行くを得ず婦人

は嚴重なる法律ありて其品行を正くせざる可らざるも男子は如何なる不行狀不品行を働くも勝手なり婦人の敎育及び夫婦の關係を論したる希臘の學者中最も高尚なる思想あるものはプレトウ、プルウタークの二氏也されど當時の風習に壓倒せらるゝの甚しきにやプレトウも婚姻の目的は單に靈魂肉體共よ健全なる子孫を生育するにありとも又精神上婚姻に高尚なる目的あるを覺らざるの甚しき妻を共同にするを以て理想的なる共和政治の一の特性となせりゝゝゝ藝娼妓と交際するとの一般普通なるやソクラチースの如き聖人も之と交通するを恥ぢざるのみか當時の名妓アオドラを訪ひ之に客を得之を待つに最も適當なる方法を敎へたりとぞゝゝゝ羅馬にて最初は婦人稍や高き位置を保ちたりゝゝゝ去れども希臘の開化之に浸潤し其古風の衰へたるや忽ち古への感情を變ぜりゝゝゝ離緣ゝ次第々々に流行しマルカス、カートウの如き人も其父の許を得て其妻を出し之を其友人ホルテンシヨスに遣り其友人死するや再び娶りて我が妻と爲すことを躊躇せざりきゝゝゝシセロは三十年偕に住みたる妻を出して富有の若き女を娶れり云々

此の婦人を賤しめ夫婦の關係を疎く且卑くし家族の制を忽にするは基督敎國外一般の風習なり然ども基督敎の行わるゝ所忽に男女夫婦の關係を更へ家族を淸潔にし社會全體の風習を改むるに至る斯の如きことある亦怪しむに足らざるなり夫れ基督敎の敎理

よては男女の區別ある唯だ此世限りの者にて永遠に存する者にあらずとす故に上帝の前に於ては固より同等なる者なり又夫婦の關係を敎るや男女合して一體と成ると云ひ夫婦相扶けて人間の義務を全ふすと爲し婚姻に高尚なる意義を與へたり抑も一國の本は一家に在り一家齊はざれは國治らず然ども一家齊ふを得るは夫婦婚姻の制宜しきを得ると否とに在り而して夫婦婚姻の制宜きを得るは男女關係の思想正しきを得ると否とに在りとす今基督敎にて先づ男女關係の思想正しく上下貴賤の別を立ることなく夫婦ゝ一夫一婦婚姻ゝ男女合して一躰となり人間の義務を盡し其性を全ふすと爲す基督敎の行はるゝ所良家族を得ざらんと欲すと雖とも豈得可けんや

第三、現今歐米文明國の道德ゝ勿論之より起る百般の社會改良の事業は悉く其源を基督敎に發せざるはなし彼奴隷賣買の醜俗を廢止せしが如き終始之が廢除に力を盡したるものは基督敎熱心の人にして英國に米國に非常の損害困難あるにも拘はらず決行することを得せしめたるは一に基督敎會良心の大に之をし刺勤たるを以てなり基督敎の經典に奴隷を廢すべしとの明文あるにあらず然れども全人類を以て同胞兄弟と爲すの

精神い奴隷の制度と共存するを得ざるなり故に一旦此制度の善惡を基督敎徒の良心に訴ふることあるや其結果い必らず之が廢止に至らざる可らず病院の如き育兒院の如き監獄の改良の如き皆な基督敎の子孫と云いざる可らず彼のハワルドが千辛万苦を嘗め歐洲監獄の實情を視察し此が改良に從事したる如き基督の愛以て其心を鼓舞したるにあらずんい爭でか其事業を全ふすることを得ん又歐米にて子女を撫育することを緊要なりと爲すの風あるい人の生命を貴重する基督敎の精神より起れりとす野蠻國や未だ基督敎の傳はらざる所ゝ於てい子女は父母の所有物にして其生殺存亡唯其意のまゝのみ故ゝ墮胎殺子の風專ばら其國ゝ行いる希臘の哲學者アリストウトル、プレトウの如きも當時自國に斯る風習あるを異とせざるのみならず却て人口の過殖を防く爲め之を行ふことを勸奬せりと云ふ斯る感格ある所ゝ於て爭で育兒院の如きもの起るあらん又病者を憐憫するは基督信者特別の美德なりとす而して稍や整頓したる病院を設立したるは紀元五百五六十年の頃バシル大が設立したるを以て濫觴とす爾來有名なる婦人信徒ゝして其一生を此が爲め費したるもの少からず佛敎國などにも間ゝ之に似たる例ある

を見れども唯だ功德の爲に行ふものゝて眞に愛心より出でしものあるを見ず故に其結果や印度ボンベイに於て動物病院の設けある如き不都合なる形狀を呈するに至る豈に之を基督敎徒の愛心より起れるものと同視す可けんや

歐洲古代の國及びキリスト敎の未だ傳はらざる國に於ては列國の交際なるものなく唯自國のみを尊び他國を以て野蠻夷狄とおさゝるはなし而して列國の間に戰爭起るや唯害の及ぶ所直接軍事に關係あるものゝみに止まらず農工商等の良民にも及ひ之を殺戮し殘酷極りなし然るに基督敎の感化力漸く歐米諸國の人民を浸潤するに及んでや戰爭の形狀一變し降服人を待遇するに寛仁を以てし而して害を加ふるい唯だ兵器を携ふる者に止て他の人民に及ばざる慣例とあれり又列國同等の權を以て相交る万國交際法なるものも其感化力に由て養成せらるゝに至るウルジー氏万國交際法の起原を論じて曰く「基督敎國をして他國に優れる文明の高黙に達するを得せしめたる原因い即ち此國々をして他國に先て万國交際法を組織せしめたる原因たるに外ならず其主因い第一、此の諸國が共に信奉する宗敎い正義と仁愛を敎誨する高尚ある宗敎たる事」云々實ゝ

公平の評論と云ふべし

偖て現今歐米諸國に存する美風善俗にして一として直接間接基督教の感化力に據て養成せられざるものなく而して目下論者の喋々する禁酒論、貧民救濟說等、凡そ社會の改良に係はる議論事業にして更に基督教の關係せざる者あらざるなり基督教い即ち歐米諸國の良心あり歐米諸國をして百般の改革改良に勇み既往の惡風醜俗を耻ぢ進で退くを知らしめざる者い此活潑なる良心ありて其中に働けばなり彼活潑有爲なる歐米の人民をして甚しき醜行を爲さしめざるものい其力ある良心ありて之を抑制すれバなり歐米諸國にして此良心あからん乎今日の如き開明を致すを得ざりしい勿論若し今日ハ於て之を除き去ることあらバ啻に風俗の頽敗人心の萎靡を來たすのみあらず社會壞裂し國家紛亂せんこと火を視るより明かあり嗚呼基督教を以て歐米文明の母と云ふも亦惡言にあらざるあり

第十二章　基督教と改良

現今社會の輿論漸く進歩し世人概ね社會風俗人心の改良せざる可らざる事ハ着目するに至りしハ豈賀すべきの至あらずや目下新聞に演說に論者の喋々する所ハ曰く婦人の改良曰く衣食住の改良曰く風俗の改良曰く文字の改革曰く交際法の改良曰く宗教の改革曰く何々一として改良改革論あらざるなし其目的い何にあれ其精神い如何なるも其事業い皆な善美ならざるいあし方今我國を改造し新日本を製出するに當り何ものか改良改革せざる可らざるものあらん

然るに斯くの如く万事万物を改良せんとする者多きが中に獨り万般改良改革の中心精神たる宗教の改革に着目する者猶ほ少きハ余の奇訝に堪へざる所なり我國目今歐米文明の機械、風俗、慣習を輸入し我國を一新せんとすれ共未だ其文明の生命精神たる基督教を輸入するに至らず是諺に佛造りて靈魂入れざる者にて猶ほ功一簣を缺くと謂いざる可らず若し將來に於て基督教が普く全國に傳いり我國文明の精神生命となるにあらずんバ今日迄進歩したる凡ての文物典章も恰も活花の如く姑らくにして萎靡退歩する

に至るや疑ふ可らず況はんや將來に於て之が進歩開發するの望なきに於てをや北米合衆國建國の時ゴ際しフランクリン代議院に於て宣言して曰く「余儕聖書に於て「主家を建て給ふに非ざれバ我儕の工は徒然なり」とあるを讀めり余堅く之を信ず而して余亦堅く信ず余儕若し神の祐を受けて此國を建さるに於てはバベルの塔を建設せんとした る者の如く余儕の工も亦空しからん恐らくは余儕は少しく利害を異にする黨派論にて分裂し其計畫は徒勞に屬し余儕自身は後世の笑となるとあらん」(千七百八十七年六月二十八日の議事)今日我か新日本を製出するも亦之に同し上帝の敎ゴ基き其祐助ゴ因て改革を施すにあらずんバ其成功到底望む可らず豈に深く鑑みざるを得んや然らバ則ち今日我國の大計は先づ基督敎を我國に輸入し上下一般之を信奉し其福澤を蒙るに在るなり基督敎にして普く我國に傳播せん乎我國文明の基礎始て堅固にあり社會人心始めて其處を得一己人修身の基本始めて立ち家族の制始めて宜きを得、學校の敎始めて基つく所あり法律政治始めて各適當の運動を爲すを得、社會風俗人心の改良始めて精神を得、我新日本の根據始めて確立するに至らん是に於て初めて歐米諸國と對等の位

置を得、新日本の國光を世界に放つを得ん豈に亦愉快あらずや

偖て世人基督敎が歐米の文明に非常ある大關係を有し此が善良なるを知ると雖ども尙ほ之を我國に傳播することに躊躇するもの多きゝ之が傳播するに於て種々の弊害を釀すことあらんとの杞憂を抱けバなり其說種々あるべしと雖ども其內最も肝要なるものゝ將來我國の宗敎と軋轢あらんと我國固有の美風良俗を壞るあらんとの二事に過ぎざるべし

第一、基督敎は他の宗敎と兩立すべきものゴあらず此敎傳ゝらバ他敎は廢滅に歸せざるを得ず是れ自然の勢なり人力の如何とも爲す可からざる所なり古今佛敎其他偶像敎の如きは二三敎同時同處に併び行ゝるゝの例あるを見れども余輩未曾て基督敎の他敎と併び行ゝるゝの例あるを聞かざるなり基督敎の到る處ろ從來の敎を廢除し去るは古今歷史の示す所決して輕々看過す可らず是れ基督敎ゝ世界唯一絕對無二の宗敎にして苟くも方便虛僞を容れざればなり

然らバ則ち基督敎の傳播するに從つて我國從來の宗敎ゝ盡く其跡を絕つに至り而して

新舊兩教の更迭を爲すに當り多少の軋轢紛爭あるは理の最も見易き所なり此の軋轢紛爭や誰ありて好んで之れを爲すものなかるべしと雖ども人心の脆弱なる人情の脆薄なる到底免る可らざるの事たり凡そ何の改革を爲すも無事に行はれ得るものなし種痘を一般に行はんとせし如き瑣細の事すら之に抵抗するものありて容易に行はれざりしにあらずや況んや安心立命の本なる宗教を變更するに於て爭でか無事に行るゝを得ん歐洲宗教改革の時に於て之が爲め血を流せしことあるも宜べあらずや多少の軋轢紛爭あるを恐れて之が改革を圖らずんば何の改革か行るゝことあらん是れ小人俗士の常に狐疑する所あれども英傑の士の顧慮せざる所なり

然れども倩ら我國の現狀を察するに此軋轢紛爭の甚だ少かるへき徵候あるを見るは亦悅ふべきことあらずや抑も現今我邦人の宗教に於ける其思想甚だ淡薄にして他國人の如く之に拗執拘泥せるを見ず唯少く之に利害の感覺を有し幾分か新教に向て抗敵を試みんとする者は僧侶にあらざれば神官の類のみ普通の人民にして新教に抵抗せんとする程の熱心ある者は吾人の幾と見ざる所なり然も僧侶神官の如きも其教を信ずるの熱

心に由て新なる宗教に抵抗せんとするにあらず多くは之が爲め其業を失ひ生計に窮することあらんを恐れてなり故に基督教の傳播に由て直接に其痛痒を感ずるものは唯小數の僧侶神官のみ決して全國一般の人民に關する事にあらず是れ此軋轢紛爭の甚だ少かるべき第一の徵候也」今や我國事々物々日に月に改進を加へざるゝなし而して新事物の輸入あり新事業の起るあるゝ悉く舊來の迷信蠱惑を破るの事たらざるはなし殊に洋學の流行、泰西學藝の弘布、大中小學の敎ゝ間接に從來の宗教を一掃し去り新なる宗教を誘導するの媒介ありと謂ふべし斯の如く間接の事物にて舊來の宗教を掃除し去ることあるは大に直接なる新宗教との軋轢紛爭を減ずるものと云はざる可らず是れ此軋轢紛爭の甚だ少なかるべき第二の徵候あり」夫れ泰西諸國に於て宗教の爭に慘狀を來せし所以は之れが政治と混同し政治家、權謀家、宗教の爭に乘じて自己の利益を營まんとせしことあれゝなり今や我國の學者政治家は大概泰西諸國の弊に懲り政教の混同す可らざるを知り務めて之を避けんとするの傾向あり已に我政府に於ても教導職を廢止し教事に干渉せざるを示したる程のことあれば將來政治家が宗教の爭に立ち入るとな

きや疑ふ可らず已に政治家にして宗教の爭に立ち入ることなく政府に於て不公平の取扱を爲すことおくゝを以て自然の爭に任せ置かば其爭や多く筆舌の上に止り優勝劣敗適種生存の理に從て優者適種者が自然の勝利を全ふするや疑ふ可らず是れ此軋轢紛爭の甚だ少かるべき第三の徵候あり

我國現今の形勢斯の如し決して論者が杞憂するが如きとあらざるゝ余の信じて疑はざる所なり万一軋轢紛爭少からざることあるにせよ之が爲め新宗教を輸入するに躊躇するか如き決して識者の取らざる所なり豈小損ある故を以て大利を失ふが如き事を爲す可けん

第二、新なる宗教を輸入するに於ては我國固有の美風良俗を敗り之が爲め國民の氣風なる者を損するとあらんとは論者の蝶々する所なれども基督教を輸入するに於ては更に斯の如き憂おきのみならず却て之が我國固有の美風良俗を維持し之をして愈發育せしむる所以の術たるを知るは難きにあらず海外諸國と交際を密にする以上は善惡美醜を問はず大に我國固有の風俗慣習を敗るとあるは理の最も視易き所にして我國の如き

此風俗慣習の根據を爲す宗教主義の乏しき所に於ては殊に甚しとす是に於て美風良俗の根據たるべき宗教入らず唯だ其風俗慣習のみ輸入し來り其固有の風俗慣習を破碎するに於ては日本國たる固有の國風をも失ひ唯だ泰西諸國皮相の擬似を爲すに止まり所謂虎を畫て猫に似たる者にて其不躰裁云ふ可らざるに至らん之に反し基督教輸入し來るに於ても其主義に反する醜俗惡風は悉く掃除し去るも從來の良俗美風にして永く存し置くべき者は之に同化せられて愈其光氣を放ち其眞價を全ふするに至らん基督教は一人に於るも一國に於けるも其固有の性質を發育完備せしむる事こそあれ決して之を消滅するとあらざるなり彼の十二使徒を見よ其の生來の性質は已に各異ある者なるに基督を信ずるに至りて益々其差異を生するを見るペテロは依然ペテロたりヨハネはヨハネ、ヤコブはヤコブ終身其固有の性質を失はざりしなり一國に於けるも亦然り歐米諸國共に同一の基督教を信ずれとも獨人の粗豪なる佛人の快濶ある英人の着實ある米人の温良なる其風俗は依然として其國固有の性質を存せざるはあし其結果豈獨り日本に於てのみ異なることあらんや基督教が啻に之を信ずる人民固有の性質を消滅せざる

のみならず其美風良俗を養成し之を純然ならしむるは恰も水銀の黄金を含める砂礫に於けるが如く其美醜善惡を區別し獨り其善ある者を採摘して之を發達せしむるあり故に基督教能く歐米人種を化し其人種固有の美風良俗を發育せしめたり基督教豈獨り我邦人種を化せざることあらんや故に基督教普く我國に傳はり深く其人心に浸潤するに於ては啻に我國固有の美德良心を彌よ發育するのみならず佛教にて養成し來れる良俗も儒教にて薫陶し來れる美風も之にて破碎せらるゝことあく益々發達するに至らん然らば則ち論者が之を永く維持せんと欲する封建武士の廉恥の風も儒教の薫陶したる愛國忠君の氣節も其形狀は時と處に因て稍や異あることあれ其精神は基督教の感化力に因て維持發育せらるゝことあるや疑ふ可からず

(註)我國從來の風習氣象にして尊ふべき者少からず彼の封建時代にて養成し來れる廉恥節義の士風の如き所謂る日本魂と稱する武勇剛毅の氣象の如き多く他國に其例を見ざる所なれとも今や泰西文化の進入と共に浮薄輕躁の風、優弱浮華の俗頓に其流行を逞ふし將さに從來の風習氣象を一掃し去らんとす豈長嘆息すべきの至りならずや吾人は如何にして之を維持するを得る熟々歐米諸國の實況を察するに利己主義の盛ある所に封建の餘俗なる廉恥節義の士風を存し華美奢侈を極むるの中に敦厚朴訥の良俗盛んに行はれ文化日に進むも更に國家の元氣消耗するの憂あるを見ず如何にして斯の如きことある此れ基督教には如何なる國民にも適し其美風良俗を存し益之を發達せしむるの力ある適證にあらずして何ぞ

論じて此に至れば論者の基督教の傳播に於て大ある弊害を釀すことあらんとの恐れは無益の杞憂たるや明々白々爭ふ可らず嗚呼基督教は唯だ一己人の生命精神なるのみあらず一國の生命精神たり矣れ我國將來の破壞を防ぎ人心の壞裂を止め新日本創設の功を至ふせしむるものゝ矣れ唯基督教なる乎

第十三章　教會と政府

已に基督教を以て我國に輸入し其一身、一家、社會の基本と爲すに於ては教會と政府の關係い如何にして可あらん乎是れ吾人い深く考究せざる可らざるの事たり政と教とは車の兩輪、鳥の兩翼、片々一を廢す可らず二者相俟つて人治り國安しとの趣旨は已に上

來の論旨にて明かなるべし二者決して相離るべからず政學るも教あげれば人、人たるの道を盡くすを得ず、家族、社會、其根據を失ひ國家暫くも安きを得ず、教盛なるも政なければ人其自由權利を保護するの道を失ひ眞正の幸福を全ふするに由なからん是を以て泰西の文明諸國に於ては常に此二者を重じ其關係に於てこそ異なする所あれ之を以て其社會國家の基本と爲すに於て皆な同一ならざるはなし近時泰西諸國に於て政教分離の說盛なるを見、論者動すれば之を以て宗教を排斥するの議なりと想像する者あれども是れ甚しき誤解と云わざる可らず政教分離の說は唯だ政教の關係を異にせんとの說のみ決して宗教を排斥せんとの議にあらず余は之を以て却て宗教の隆盛を致すの議と視做すなり見ずや政教を全く分離するの先例を見れしたるは北米合衆國なるにあらずや然るに同國宗教の景況を見るに其の隆盛は多く他國に例を見ざる所あり而して宗教を以て建國の基礎と爲すに於ては更に他國と異なる所なしされば此や同國の政治學者リーベルは其の自治論に於て政教の關係を論じ「米國が歐洲に對し務むべきの義務は政府と宗教とにはあらず政府と教會の全き分離を示す事なりと云ひ」教會と宗教の

別をなし米國が政と教を分離せざる事を明かにせり米國プラオン大學の教授ダイマンヴ井シントロップ氏の確言は最早や言葉通りに適用し難しと雖も國家內部の生命にては教と政とは決して離す可らずとの此原理は永久變す可らざるの眞理たり政府は世俗の者たるも國家は永久なる道德の基礎に建たざる可らず〻〻政教分離の說にして若し屢人の解する如く宗教と政治は全く別物にして互に其區域を別にするとせは甚た有害にして且つ不當なる說と爲さゞる可らず」云々實に名言と云ふべし

政教已に相離る可らずとせば余輩い此の二者の運動を全ふせしめ人民の福祉を增進するに最も適當なる方法を撰ばざる可らず即ち政府と教會の關係い如何にせば可おらん乎是れ目下歐米諸國學者の思想を煩す最も困難なる問題にして吾人の宜しく我國將來の爲め深く攻究せざる可らざるものなり然れども此問題に論入するに當り請ふ先づ古今萬國に存したる政教の關係を左に擧示せん

古來萬國に存したる政教の關係を察するに凡そ四種の別あるが如し(一)教會政府を統御

するの制、即ち古代の猶太國及び中古天主教羅馬法皇の配下にありし歐洲諸國の如き此類なりモーゼ上帝の命を奉じイズラエル國を建立するや祭司長なるものを立て其教を司らしめ且つ其政をも統轄せしめ他に專ぱら政治を司る國王有司なるものを立てざりき偶ま國に騷亂あるか若くは外寇あるや上帝は臨時に士師なる者を起し之を鎮定せしめたりサミユエルの時人民王を立てんことを請ひサウル立て王となるに至るも政府は教會の權下を脱するを得ず祭司長或は豫言者なる者ありて其國を統轄したり又中古天主教の旺盛を極むるや各國の帝王は羅馬法皇の統御を受け教會は實に政府帝王を左右するの實權を有したり彼のグレーゴリー第七世が獨帝ヘンリー第四世をして沍寒骨を刺すの冬天に三晝夜其庭前に佇立せしめたるが如き又法皇の行幸あるや各國の帝王は皆徒跣して之に隨從したるが如き其權勢の盛なる一例を示すものと謂ふべし降て宗教改革の時に至り法皇の權勢大に衰へ其權下を脱したる國々（新教を奉ぜし國々を云ふ）少からずと雖も未だ全く其制度を廢するに至らず尚ほ此制度に依る國々多かりし今日天主教の行はるゝ國々は以太利、西班牙、佛蘭西、澳斯太利、葡萄牙、白耳義及び南

米諸國なれども法皇の威權昔日の如く強勢ならず宗教、教育、學事の如きは尚ほ直接間接に干渉する所少からずと雖も其他の事は全く之を與り知らずと云て可なりされば教會政府を統御する天主教の制度は今日は已に其の跡を絶ちたりと云ふも誣言にあらざるべし唯今日尚ほ斯の如き制度の實際に存するは支那の西部なる西藏國ならん乎同國にはダライラマある法王ありて教法を司り兼て政治をも統轄せり從來法王の下に俗王ありて政を司りたれども之が世襲となりて權勢を弄するに至るの弊あればとて近來は此制度を廢し法王自ら俗王をも兼ね司ることにありたりとぞ

（二）次は政府教會を管理するの制度なり歐洲新教を奉ずる國々は大概ね此制を用ゆ宗教改革の時に當り新舊兩教の爭ひ實に甚しく兩教を奉ずるの國互に兵を擁るに及んで教會は自然政府の管轄に歸するに至れりルウテル、カルビンの説は強ち教會を以て政府の配下に置く可しとにはあらざれども當時の勢止むを得ざる所より此に及びしを知るべし又英國の如きは當時の國王ヘンリー第八世甘じて羅馬法王の管理を受るを好まず舊然其配下を脱して自ら英國教會の首長となりたれば其の教會政府の管理を受くるに

至りたるも當然の次第なり此制度に二種あり(イ)一は國中に行はるゝ多くの教派中其一を取りて政府王室の宗教と爲し之に特別の保護を加る者にて(ロ)一は國中に行はるゝ二三の教派を等しく保護管理する者是れなり英國は即ち(イ)の例にして監督教會を以て國教と爲す同國には新教には「コングリゲーショナリスト」、「メソデスト」、「バプテスト」、「プレスビテリヤン」等種々の教派あり之に加ふるに天主教あり猶太教あり國教を奉ぜざる者少からざれども政府獨り監督教會を保護し國庫より年々大金を出して之を扶助せり其初め國教を奉ぜざる者は公に神を禮拜するの自由をもなく官吏又國會議員たるの權利もなくオックスフオールド、ケムブリッチの二大學に入るの權をも有せず其教師牧師の施したる洗禮婚姻の禮典の如きも總て無効なりしが千六百八十八年禮拜許容の法令にて天主教ユニテリヤンの二派を除くの外、皆禮拜の自由を得、又千八百二十八年宗旨檢査條例の廢止に因りて國教を奉ぜざる者も官吏國會議員となるの自由を得るに至れり又國教に屬せざる牧師教師の行ひたる洗禮及び婚姻式も千八百三十六年同三十七年同四十四年の戸籍及び結婚條例にて効力を有する事となり兩大學入校

の事も千八百五十四年の改正法令にて自由となるに至れり英國今日の有樣にては宗教ハ全く自由にして何の教派に屬する者も法律上政府の前にハ更に異なる所なし」獨逸、佛蘭西は(ロ)の例と謂ふべし獨逸は讀者の知らるゝ如く數十の小邦にて成り立つものなれバ其内に「プロテスタント」教派を奉ずる邦多けれども又「カトリック」派に屬するものも少からず故に政府は此兩派を等しく保護するものと知るべし且つ獨國に於てハ信徒十萬以上を有する教派ハ政府の公許を得、從て幾分かの補助を受くるの例ありと云へり佛國は元來天主教を以て國教と爲したるが第十八世紀の革命以來或は之れを廢し或は之れを建て遂に一千八百三十年に至て單に天主教を以て國教と爲すことを廢し爾來「プロテスタント」教派、猶太教、回々教をも公許し天主教と共に國庫より費用を給するに至る而して目下同國の制たる何教も自由にして唯だ信徒五萬に滿つるに非ずバ政府の公許を受くる能はずと云ふ

歐洲諸國に於ては以上論ずる如く大概ね政府にて教會を管轄する制度を用るも多くハ直接に奉教の自由を妨ぐる所を見ざるは賀すべきの至あり彼壓制の有名なる露國の如

きも法律上は何の教派を奉ずるもそが爲め處刑に逢ふの恐あらざるなり唯だ國教の外は容易に公に禮拜堂を築くを許さゞると他の教派より國教に轉ずるは勝手たりと雖ども國教より他の教派に移るゝ固く禁ずる等不都合極るの法律あるを見るのみ

(三)第三種ハ政と教とを區別することなく政府と教會とを同一躰と爲す者即ち支那儒教主義及よひ回々教國の制度是なり儒教主義の政教論は已に前數章に陳べたれバ今爰に贅せず唯だ回々教國の制度を陳べんに君と師ハ一なり政府と教會との別を立てず教を弘むるに劒を以てし國を護るに教を以てし二者混一の制を以て全社會を組織する者是なり現今此制度を用る國々は土耳古、波斯、埃及等數國なりとす二者混一なれバ政府は常に專制にして人民ハ奴隸たるを免れず故に其制度の存する間其國の進歩は到底望む可からず是れ回々教國今日の形況にして泰西の文明國と伍を爲す能ざる所以なり

(四)終りは政府と教會を全く別途にするの制度即ち北米合衆國の如き是れあり斯の如き制度を新たに創設したるは實に合衆國の榮譽なり始め「ピユリタン」教徒英國々教の壓制を避けん爲め米國に移住するや其平生の主義にも似よらず殖民地の教會に屬せざる

者は政權を有すべからざる事と爲し政教一致の制度を用ゐしが續てロードアイランドには「バプテスト」派ヴオルチユヤには監督派メリーランドには天主教ペンシルヴエニヤには「クエカル」派と諸方に植民地起り此等合して一大共和國を組織するに及んで全く政府と教會を分離し政教別途奉教自由の基礎を建てたり同國の憲法第一章に曰く「國會は國教を制定し若くは奉教の自由を禁止するの法令を設くるを得ず」と又其第三章第四項に曰く「凡そ合衆國政府の官吏を登用するには其信奉する宗教の何たるを問ふ可らず」と合衆國は世界各國に先つて此新制度を採用し政治宗教共自由を全ふし共に十分の發育を遂げ得るの實例を世界に示したり現今合衆國ほど政治上の自由ある所はあらざるが又同國ほど宗教の盛なるはなし此れ豈一は此制度の然らしむる所と云はざをを得んや

右四種の關係中第一種及び第三種の今日に用ゆ可からざるは論を俟たず何ぞ其利害を辨ずるに及ばん唯爰に吾人が其利害如何を比較すべきは第二種及び第四種の二あるのみ勿論第二種の關係も昔時に於ては奉教の自由を妨げしと少からずと雖ども現今英國

及び獨國に行はるゝ制度の如きに至りて更に其憂なく此點に於ては第四種の關係と幾ど差異なきが如しされば兩種の利害は專ら教化の効果如何にあるを知るべし熟ら此兩種の利害如何を案ずるに第二種には政府教會を管理し之を扶助すれば(イ)全國教化を均一にし無教の地に新に教を拓くの利(ロ)教師牧師の教育を高等にして教會に專門の學者を多く製出するの利及び(ハ)無智愚蒙の民に教化の影響を及ぼすの大なる利あり然れども亦左の如き弊害あきを得ず(イ)政治の點より云へば多少人民の好尚に反し其權利自由を束縛するの弊害と政權と教權を適當に調和するの困難なき能いず又(ロ)教より云へば教會に腐敗を來し易きの弊と之に獨立の精神及び活潑力を缺くの害あるを免れざるあり之に反して第四種の關係には第二種關係の利益を缺くとあれ共亦た其弊害を除くの利あり殊に教會の精神を活潑にし其教化を純粹にするの一點に於て遙かに第二種關係の上に出づと謂ふべし佛國の學士ヴ井子ー曾て政教一致の弊を論じて曰く「宗教を以て政府と一致せしむるより國民の宗教心を害するの大なるはあし之を以て政府の管下に歸するときい必ず警察の一種と變ぜざるを得ず」云々實に名言と謂

ふべし

斯の如く其利害を比較し來れば政府と教會を全く分離するの利大あるを知る難きに非ずされ𝑣にや現今歐洲諸國に於ても活潑有爲の宗教家は大概ね政教分離說を主張せざるいなく歐米の輿論い大半之に傾けるが如き形況あるも理りあり然𝑣則ち我國政教將來の關係も米國の如く全く之を二途にするい最も肝要の事なりと謂ふべし之に就き甚だ悅ぶべきい我國近來の制度の此方向に傾ける事是なり維新の始に當り政教一途祭政一致の制度を用ひ神祇官なるものを設け諸官省の上に置き專ら教祭の事を司らしめたりしも次で之を廢し教部省を置き教事を司らしめしが之をも遂よ廢して內務省に社寺局あるものを置き僅に教導職の叙任社寺の保存等に干涉せしめたり其後教導職をも廢し教事に干涉するを止めたれ𝑣今や略ぼ政教別途の制度に進み政府は僅に神社佛閣の保存等の事に干涉せらるゝに過ぎざるあり𝑣此後基督教全國に傳播し神佛二教を排し國民多數の信奉する所とあるも政府に於て之に干涉するが如きことなきや吾人の信じて疑はざる所あり余が我國將來に於て深く望む所は　天皇陛下を始めとし上に

ありて政權を握る凡ての有司百官の基督教を信じ之にて一身の救を全ふするは勿論其教の精神を以て其政を行はん事あり之を望むと同時に政權を以て教事に干渉するあく教會を以て自由に發育せしめんことを望まざるを得ざるなり往昔猶太の祭司長學者等難問を設けキリストを困らせんとて「税をカイザルに納るは宜や否」と問ひければキリスト「カイザルの物はカイザルに納め神の物は神に納めよ」と答へ以て政教の混合す可らざることを明かにせり政教はキリストの常に別にせし所ありキリストの離し給へる者は人之を合はす可らず

第十四章　一己人と社會（結論）

我國の文明を以て基督教ある磐石の上に置き教と政とをして自在の運動を爲さしめは國運の長久ある其進歩の確實なる決して疑ふ可らず聖經に曰く「神エホバかくいひ給ふ視よわれシオンに一つの石をすゑてそのとなせり基これは試をへたる石たふとき隅石かたくすゑたる石なり。これに依頼むものはあわつることなし」凡そ一己人と一國とを問いずキリストある試をへたる石たふとき隅石を以て其根據と爲すときは永久鞏固にして決して之が爲め敗衂を取るの患ある可らず吾人我國を改造し子孫萬世の大計を爲すに當り深く爰に注意するにあらずんば其功勞の徒然あらんことを恐る

基督教の教化未た天下に普らず文明諸國に於ても猶ほ干戈を弄ぶ者多しされば我國に於ても武事を忘れ兵備を撤す可らざるは勿論の事にて尚ほ邦家防禦の事を忽にす可らざれども今日に於て斷然外交不干渉の方向を取り國内の改良を圖るを以て第一と爲すは極めて緊要の事なりとす右手に基督教を持ち左手に學問を採り風俗の改良を謀り政治の改革を期し物産の興殖を企圖し以て人民の智德を進め其生活の度を高むることを勉めば日本の文期して待つべし果して斯の如くあらば啻に歐米諸國と對等の交を爲すを得、東洋に於て文明の先導を爲し之か牛耳を握るを得るのみあらず上帝の永遠なる經綸に對し世界に於て日本國の日本國たる職務を盡すを得ん豈に亦爽快ならずや世界太平の日來る尚ほ遠かるべしと雖も此世界終に變して天國とあるや疑ふ可らず此

一點に於てゝ進化論の歸着する所も基督教の開示する所も一轍に出て共に世界邦國の進歩社會人民の開發を云ひ遂に黄金世界に達すべきことを唱へざるゝ莫し聖書中世界太平の來ることを預言せし所枚擧ゝ遑あらず之が至治の時あるを云ふや曰く「エホバはもろ〳〵の國のあひだを鞫きおほくの民をせめたまはん、斯てかれらはその劍をうちかへて鋤となしその鎗をうちかへて鎌となし國は國にむかひて劍をあげず戰鬪のことを再びまなばざるべし」、(賽二〇四、米四〇三、)又曰く「かれは義をもておんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん義によりて山と岡とは民ゝ平康をあたふべしかれゝ民のくるしむ者のために審判をおこしこしきものゝ子孫をすくゝ虐ぐるものを壞きたまはんかれらは日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし」(詩七十二〇二、より五、)之が教化の極度たる時なるを云ふや曰く「正義はその腰の帶とあり忠信はその身のおびとあらんおほかみゝ小羊とゝもにやどり豹は小山羊とゝもにふし犢をじゝ肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみちびかれ牝牛と熊とはくひものを同にし熊の子と牛の子とゝもにふし獅ゝうしのごとく藁をくらひ乳兒は毒蛇のほらにた

はふれ乳ばあれの兒は手をまむしの穴にいれん斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからんそは水の海をおほへるごとくエホバをしるの知識地にみつべければなり」(賽十一〇五、より九、)又曰く「然とかの日の後にわがイスラエルの家に立てんところの契約は此なり即ちわれ我律法をかれらの衷におき其心の上に錄さん我は彼等の神とあり彼らゝ我民とあるべしとエホバいひたまふ人おの〳〵其隣とその兄弟に教へて汝エホバを識れと復いはじそゝ少より大ないたるまて悉く我をしるべけれゝなりとエホバいひたまふ我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし」(耶三十一〇三十三、三十四、)此時に至らば万國ゝ一大聯邦とありて相一致し無形のキリストこの王となり道德の大法を以て之を統治し政府と教會とゝ始めて合致するに至らん此れ歐米學者の理想とする所にして宜しく我國民の目的とせざる可らざる所也現今我國の開明を圖るには宜しく之を以て其理想と爲し之に向て進まざる可らず今や歐米の諸國も日に月に開明に進み基督教の教化ゝ益社會に普くなり舊習を改め弊風を去り百事改良を加へ愈文明の高點に進まんとす而して亞細亞、亞弗利加の諸國を始めとし太平洋の諸

島に至る迄此文明の空氣を呼吸し基督の福音幾ど唱へられざる所なく眞理の大光將に地を覆はんとするを見るは亦愉快ならずや天國の來る尙ほ未だしと雖も此か來るべき休徵充分に現はる嗚呼吾人何ぞ此の方針を取り勇て進まざるを得ん

然ども爰に一疑問の突出するあり即ち一己人と社會の關係此なり一國の開明、社會の進歩は吾人終極の目的ある乎、吾人此世に生存するの目的は如何ん、一己人と社會は如何なる關係を有する乎、一己人は社會の爲に存する乎、將た社會は一己人の爲なる乎、孰か目的にして孰か手段なるギゾー文明史に於て文明は一己人及ひ社會の進歩なる旨を論じ「一己人が其心意、其才能、其思想、其一身を充分發達せしむるは社會を改良し其狀態を增進せんか爲なる乎、將た社會の改良、其狀態の增進は一己人發育の爲め即ち社會は一己人を發育せしめん爲めの劇場、機會、刺激所なる乎」等の問題を起し遂に當時の有名なる哲學者佛人コルラルド氏の言を引證して曰く「人類の社會は此地球に生れ活き且つ死し爰に於て其命數を全ふすされど是にて人間の本分を終るに非ず人には社會の義務を終りし後にも猶ほ高尙なる性質存するあり即ち其高尙なる才能之を以て自己を上帝、未來の生命及ひ見る可らざる世界の知る可らざる幸福にまで達せしむるもの是あり吾人、一己人、各特別異殊なる存在を有し眞に不朽の性を備ふる者は國家にて與ふるよりも猶ほ一層高尙なる命數を有するなり」

吾人にして斯の如き高尙なる命數を有する者とせば吾人は宜しく社會の改良、文明の增進のみを以て滿足す可らず猶ほ之より一層高尙なる目的を有せざる可らざるなり余は社會を以て手段方法とし一己人を以て目的と爲すの說には俄に同意する能ずと雖も吾人の目的を以て唯現世のみに限れりとするの說は大に非難せざるを得ざるなり倩人性の溫奧を察するに其理性と云ひ其德性（モラルセンス）と云ひ其美妙の性と云ひ其宗敎心と云ひ現世のみを以て其命數を爲す可らざる者あり人は靈と肉とを有し上帝と萬物の中間に立ち半は現世に屬し半は見る可らざる世界に附く者なりされば人類の此世に存するは永遠不朽の見る可らざる世界に至るの準備修練の爲め也と觀せざる可らず此觀察にして愈眞實ありとせば社會は即ち吾人の敎育場にして之を發育修練する所と爲さゞる可らず」

夫れ天吾人を此世に降すや之を敎育修練するに家族、國家、敎會、の三を以てす家族以

で人生自然の性情を養ひ國家以て公義の心を鼓舞し教會以て敬虔博愛の心を發育せしめ以て靈界の生活に進むの準備を爲さしむ此三者の所謂る社會の鼎足にして片々一を廢す可らず相俟つて人間の幸福全く且つ其本分盡くさるゝを得而して此進歩も亦相俟つて始めて正確なるを得、家族獨り改良する能はず國家獨り進歩するを得ず教會獨り隆盛なり難し皆お其進歩を共にす一己人亦た然り此三者の進歩を離れて獨り進む能はず一己人と此三者とは互ふ有機的の關係を保ち互ふ目的となりて進めゞ現世のみを以て之を論するときは孰か目的たり孰か手段たる容易に之を定む可らず唯幽顯の兩界、現在未來の二世を通觀して始めて社會は一己人を發育修練せしむるの劇場、機會、刺激所なるを知るなり是れ基督教の正ふ教示する所にして深邃なる哲學は孰れも此に歸着せざるはなし

終りに臨て一言すべきゝ宗教の方便視すべからざる事あり我國の學者大概ね宗教を以て方便視せざるゝなし宗教の國家人民に必要なるを知ると雖も未た之か眞理の教たるを知らず唯之を機械方便視す是れ余か常に痛惜に堪ざる所あり夫れ宗教の入所ゝ信なり誠實の心なり苟くも信おく誠實の心おくんば到底宗教の事ゝ知る可らず且つ宗教の世道人心を維持するは何に因れる乎、唯人々之を以て万古不易の眞理、眞實なる上帝の道と信じ誠實に之を奉ずることあればなり苟くも之を以て方便機械視するときは忽ち之か効力を失ふに至る世の宗教を利用せんとする者深く爰に鑑みずんばある可らず論者往々泰西の政治家を以て宗教を方便視する者と爲せども此れ全く泰西の實情を明にせざるより起る誤解にして皮相極るの妄想と云はざる可らず東洋人の眼より視れゞ斯の如きの事想像す可らざるゝ非ずと雖も苟くも泰西の風俗人情より之を視るときは(假令ひ斯の如き事實際に出來るとありとするも)到底想像も爲し難き事なり莫レ見二乎隱、莫顯乎微一、己れ之を信すればこそ其信仰世に現ゝるゝおれ豈に智者にして僞善を以て其信仰を飾るか如き愚を爲す者あらん宗教にして果して信ず可らざる者なる乎之を排斥して可なり何ぞ之を保庇するに及べん論者ゝ眞理と幸福と併行することを信ぜざる乎若し宗教にして眞理に非ずとせば何ぞ之が人民の幸福を增進することあらん天下虛僞迷妄にして社會眞正の公益たるものあらざるおり蓋し余か本書に於て基督教の信

奉せざる可らざるを主張するゝ唯之が社會文明に一日も欠く可らざる者と爲す故のみならず之か眞正の宗教、動す可らざるの眞理たるを信ずればなり

基督教ゝ所謂天啓の宗教にして天下万民の宜しく信奉すべきものなり上帝深く世人の罪惡に沈淪するを憐憫し給ふや神子基督を世に降し救贖の事を爲さしむ吾人幸ひに其恩寵に依て上帝至仁至愛至聖の盛德を仰き視、罪惡の禍災を免るゝを得るなり此れ動す可らざる歷史上の事實にして吾人宜しく信奉すべきことなり嗚呼世の志士の基督教の必要を知ると共に之か眞理の教たるを知られんこと余か切望に堪へざる所なり

校正
增補

政教新論　矢尾

附錄

左の一篇は著者が曾て哲學會に於て演述したるものゝ大意あるが始めて基督教を學ぶものゝ爲には多少の裨益を爲すとあらんを信じ增補校正の上爰に轉載す

○基督教を信するの理由

前會に於て或る會員ゝ余に基督教を信するの理由を述へば如何んと勸められしが余や堅く基督教を信するものなる故敢へて之を辭せず喜て其大要を述へんことを諾したり

余が信ずる聖經中に左の如き言あり曰く

爾曹の衷にある望の緣由を問ふ人には柔和と畏懼を以て答を爲さんことを恒に備へよ（彼得前書三章十五節）

余が今日爰に述ふる所は此精神に外あらずして唯平素余が心に備へ置きたる信仰の理由を柔和と畏懼を以て論述するとあらんとす

偖て我儕の衷にある望の理由を說くに當り先づ其望即ち基督教とは如何あるもの乎之を述べざる可からず何となれば古より我基督教程人に誤解せられたるもの非ればなり

昔者ロマ人が之を以て國を亂るの敎と爲せし以向近時我が邦人が之を以て文明の進歩を妨害するの敎と爲すに至る迄で古今幾多の寃罪を被りしことあるや知る可からず斯の如き妄評い姑く置き進て之を信奉するものゝ說を見るも多くは偏頗の解釋たるを免れず或い之を修身道德敎と爲すものありカントの如き是れなり或は之を以て思想のみに原き哲學と同一なるものと爲すものありヘゲルの如き是れなり或は其儀文典例を以て宗敎の精神と爲すものあり或は之を以て唯感情にのみ原くと爲すものありて學者各其見る所を異にせり今基督敎には道德の敎あれども單に之を以て道德敎と爲す可からず哲學の思想あきにあらざれども哲學と云ふを得ず儀文典例は其衣服皮膚あり以て之が精神と爲す可からず吾人の感情に訴ふる所少からず然れども之を以て全く感情に原くと爲す可からず之を主觀的より云へい基督敎とは生命なり精神なり勢力あり神の生命なり人之を信するや其人全く更生し其心活きて眞の活動を爲すを得是迄では私の爲めに生活したりし者飜て神の聖旨を奉體し神子キリストの生命を受け繼くに至る是れ眞のキリスチヤンなり而して此力此生命を基督敎と云然れども此事たるや確實ある客

觀的の基礎なくして有る可らざるものなり是れ基督敎の徵證論ゝ於て一は哲學科學の上より上帝の存在、人魂の實在、及び德性を論證し、一は又歷史上、新舊約聖書に載せたるモーゼへの啓示、キリストの降生等天啓の事實を根據と爲す所以あり

偖て基督敎に客觀的の事實より觀察を下す時不可思議超理的の事が終始之に連帶せるを見る彼の神が天地を創造すると云ひアブラハムを招きしと云ひモーゼにシナイ山に現れしと云ひ預言と云ひキリストの降生復活昇天と云ひ孰れも不可思議超理的の事ならざるなし是れ世人が之を信するに最も跌く所なれども亦世を感化するに最も力ある所と云はざる可からず彼のパウロが「十字架の敎は沈淪者には愚なるもの我儕救るゝ者ゝは神の能たるなり」と云ひしは其れ之を謂ふ乎今日となりては天下一人として其敎旨を不可とするものなかるべし之が一身を益し社會を益するに至りては人皆ゝ其功績を賞讃せざるはあし加之之を天下最上の敎と爲し己れ之を信せざるも人には之を信せしめんと務むる者少からず然れども自ら之を信すると云ふ一段になれば多くは種々信し難き事實あるを見て之が爲め躊躇せざるはなし諸君中にも必ず斯の如きは婦女子

の信するものにもて士人學者の信ずべきものに非ずと云ひ給ふ方あらん余も亦嘗て此の如き思を爲したる一人あり（之に續ひて一身の敎を信じたる來歴を述べたれとも事私事に係はるを以て爰に略しぬ）始めて基督敎を聞くものは大概斯の如き感覺を抱かざるはなし昔者バプテスマのヨハネイエスの行爲を聞くと之が己の理想と爲す救主の行爲に似ざるを疑ひ其弟子を遣して問はしめけるに曰く來るべき者爾なるか又われら他に待つへき乎然るにイエス之に答へて曰ふ爾曹が聞くところ見るところの事をヨハネに往て告よ瞽者はみ跛者はあゆみ癩病人は潔まり聾者はきゝ死たる者は復活され貧者は福音を聞せらる凡そ我が爲に躓かざる者は福なりとキリストに近接せるヨハネにして尙ほ斯の如き注意を要したりされば千八百餘年の後に居る吾人には之に躓くとあるも亦當然の事と云はざる可らず是に於てか世人或は基督敎にも亦他の宗敎にて見る所の「エキーテリク」（外部門）と「エソテリク」（內部門）即ち佛敎にて樞實と云が如き區別ありて學者の信ずる所と普通人民の信する所全く其趣きを異にするあらんと疑ふならんも基督敎は此點に於ては全く他の宗敎と其趣きを異にして決して斯る區別あらざるあ

り學者も愚夫愚婦も其信する所は一にして其感情に別あるに非ず唯其知識の深淺厚薄により其敎理の解釋に精粗深淺の別あるのみ

偖て基督敎は世界の一大現象なり之が世界の文明に非常なる影響を及ほし又一己人の上に大なる感化力あるは掩ふ可からざるの事實あり如何にして斯の如き事ある此が解說なかるべからず夫れ之を說くの道唯三あるのみ第一、基督或は其弟子又は或る奇智に富める人が人民を籠絡せん爲め斯の如き宗敎を構造創設せしとの說即ち方便說、第二其敎い始終人の迷信より起りしとの說即迷信說、第三い即ち有りのまゝ之を眞實とするの說なり

右の三說中第一い歐洲第十八世記の不信者中に見る所の說なりしも今や學問大に開け思想も甚だ緻密となりし故幾と斯の如き說を唱ふるものあるを見さるに至れり彼の不可思議論の主唱者スペンセルさへ左の如き說を爲せり曰く其證據を正直に穿索せば或る人の主唱せる如き宗敎は僧侶輩の發明なりと云ふ說を全く否定すべしと唯我國に於ては然らず尙ほ斯の如き思想を抱く者少からずされど正直に事理を知る者は必ず詐僞

方便が永く人心を籠絡すると能はざるを知るは容易の事ならん果して然らば基督教を説くの法い之を迷信に歸するか將た之れを眞實ありとするか此二者の外に出でざるを知るべし

基督教果して迷信に出つる乎將た眞實に基く乎如何にして之を判別するを得る之を判別するの法亦他の問題を攻究すると同しく第一は之を理論に質さゞる可からず第二には其歴史上の事實果して如何んか之を確實にせざる可らず第三には之を實驗に徴せざる可らず余や元と一見基督教の甚た淺近あるが如き趣あるを見て頗る之を輕侮したるものなるも進て之を理論に正し之を事實に證し之を實驗に徴して此が眞理の敎たるを信したる者あり何れも正直に之を究むる者は必ず斯の如くならんを信ず然れども今進て之を論せんとするに當り一二の諸君に注意すべき事あり第一は人智の尙ほ幼稚なるや兎角深甚復雜ある理論を好むの弊ある事あり人動もすれば其敎理の眞僞如何を問はすして唯彼の敎は深遠微妙なり此敎は淺薄ありと云ひ徒に理論の難澁屈曲せるを喜ふとを爲す之猶ほ野蠻人が美術の如何を知らず徒に着色の濃厚なるを喜ふが如く又歐洲

中古に於て普通人民の解することを得さるラテン文の經典を朗讀して敎法の威嚴を示したるが如く（現今佛敎者が其經文の浩瀚なる且つ之が解し難きを以て佛敎の深甚微妙あるを誇るも此類あり）寧ろ其智力の薄弱なるを示す者と爲さゝる可らず夫れ眞理の徴證は其の單純簡易あるより重きはなし當今歐米に在りて學者學説の眞僞を定むる概ね單純簡易なるを以て之か標準と爲す誠に故あるなり宗敎の眞僞を究むる吾人亦爰に注意せずんばあらず第二は人智の限りあるを知らざる可らざる事あり吾人の弊たる已れ已てに天地間の眞理を知り盡せるか如くに思惟し僅かに知り得る所の一小部を以て未た知らざる全體を推究せんとす何ぞ知らん其推究は架空の妄想たらざるを故に吾人に於て最も注意すべきはペイコン流の論法に從ひ事實を先にして理論を後にする事なり且つ吾人は人智の限あるを忘れ其理盡く明かならざれば之を受納せざるとを爲す是れ最も大なる誤りと爲さゝる可らず學術と宗敎とを問はず如何なる眞理に於けるも之を盡く知るは人智の得て及ぶ所に非ずされば之に尙ほ解す可らざる所あり一見自家撞着せるか如き所多きは却て此か眞理なるの徴證と云ふへきあり故に宗敎に於ける眞

理を學ぶに當りても吾人は強ち其全躰を解釋するとを求む可らざるあり

基督教は迷信に出つる乎將た眞理なる乎必ず二者其一に居らざる可らず儒教或は古來希臘の哲學の如き其起原を解說するは平易の事なり又佛教の如きも釋迦が眞理を發明したりと云へは之も亦容易に解說するを得べし獨り基督教に至りては然らず學者道理を考究して眞理に達したりと云ふに非ず上帝人を救はん爲め眞理を現はしたりと云ふ哲學の如く單に思想に基くにあらず上帝人を救ふ事跡の歷史たり故に其教に唱ふる所眞なるに非れば詐僞、然らされば迷妄たるを免れず中間の解說を得んと欲するも豈に矣れ得へけんや是れ吾人基督教に對しては決して中立の位置を保つ可らざる所以なり」

余は前文に於て基督教の眞正なるを論證するには第一、理論上哲理に照らして其眞理を證明せさる可らさる事、第二、歷史上其事實の正確なるとを徵する事、第三、實驗上自他の經驗實際に徵して其眞實を證する事、即ち此三論法に據らさる可らざる事を述へたり此三論中最も力ある論證は實驗的の論法なり諺に曰く論より證據と其教にして唱ふる所と行ふ所に格別の徑庭あくんば之か眞實なるの論證之より强きはなし故にキリ

ストは其弟子をして教を傳へしむるに當り爾曹は此等の事の證人なりとて常に證據を立てしめたり此實驗の論證は啻に他人に向て最も力あるのみならず之を信するものに取りても亦最も力あるものなり曾て盲者にて基督に其目を癒されしものありキリストに敵する猶太人等種々の難論を設けて彼を詰りキリストの尋常一樣の罪人にして信ず可らざるとを告けれは彼答へて曰ふ罪人なるや否我之を知らず我は瞽者なりしが今目明になれる此一事を知ると(約九〇二十五)キリスト信徒とても悉く知識あり學問ある者に非ず然れども其の如何なる大學者に對しても常に其教を主唱し敢へて恐れさるは蓋し此實驗あるに據るなり

此論證は虛心平氣眞理を求むる者か若しくは其心單純赤子の如きものに取りては動す可らさるの確證あれど其心常に懷疑に傾き辨論を好むか如き者に對しては或は單純に過ぐるの嫌あき能はされば請ふ此證論は他日に讓らん唯目下我國に最も必要あるは恐くは理論上の論證にあらんか古今基督教に反する者は多くは哲學上に基ける理論的の辨論を用ゐたり而して世人が之を信ぜざるの口實と爲す所は基督教よは理論上解說す

可らざること多きか故ありとす今基督教の歴史を通觀するに古今國々によりて其反對論の趣き異なる所あるは亦奇と謂はざる可らず

古へ基督教に反對したる者はセルサス(百七十八年に生る)ルシヤン(第二世紀の終)パルフヒヲリー(二百七十年)背教者なる羅馬帝ヂユリアン(三百六十年)及「ノスチシズム」と稱する學派(其の重なる學者はバシライヅ、ワレンチノス、サトルニーノス等なり)を始めとし近古英國の「デヰスト」(唯一神あるのみを信じて其啓示を信せざる教派にして其重もなる學者はチエルベリー侯、トウランド、シヤフツベリ侯、チンダル、ボリンブルーク、ホツブス、ヒユーム等なり)佛國の「イルルウミニスト」(ヴオルテール、デイロット、ダレムベルト、ホルバック等其重なる學者なり)及び獨國の「ラショナリスト」(正理派とも云ふへきものにてフレドリッヒ第二世、セムレル、トルチルは其重なる學者なり又近來に至りてボール、ストラチスは其最も有名なる學者なり)等皆哲學上理論より基督教に反對せり此皆な知識を信する過度にして斯の如きの理ある可らず斯るとある筈なしと續繹法より辨難し其事實の如何を問はずして皆に其不條理不理屈を鳴

したる者なれば近時の「アグノスチシズム」不可識論に反し「ノスチシズム」尊智説とも稱すへき乎然るに近時哲學上基督教に反する者は全く古代と其趣きを異にし或は人智は唯形而下有形の者に限りて形而上の事は知る可らすと爲す「ポシチヴ井ズム」實理論乎若しくは人智い唯第二原因の事に限りて第一原因に達する能はず吾人唯現象を知るを得るのみにて其實躰を知る能いずと爲す「アグノスチシズム」不可識論なり古の論者は知識を過度に信するより之に反し今の論者い之を信する少きより之に反し古の論者い過度に知識を尊信し今の論者は又過度に之を下卑す其所爲全く反對に出るは豈奇と謂はざるを得んや偖諸君も知らるゝ通り此「アグノスチシズム」は元とカントより出でハミルトン之を擴充しマンセルは尚ほ之を布衍し之を以て彼のオックスフオールドに開きたる有名なる「バムプトン」演説に於て「ラショナリズム」正理派なる不信説を辨駁するに用ゐたるが今日の不可識論者は之を以て基督教に反するの議論と爲に至れるは所謂る敵の劒を以て敵を苦むると云ふへき者にて是亦奇と謂はざる可らず要するに古今理論上の反對説は何れも甚たしく主觀的に僻する偏陂の論にて皆な過度の續繹法と

せさるを得ず吾人正當の知識を以て基督教の教理を究むるときは必ず此か眞理の教たるを知る難きに非ず願くは世の基督教を學ふ者深く茲に注意せられんことを

今正當の理論によりて基督教の眞理を證明するは難きに非れども之を爲すには先つ知識論を始めとし宇宙論、心理論、默示論等、哲學神學上、極めて困難なる辨論に渡らざるを得ず此れ決して一場の演說にて爲し得べき事にあらざるなり本日は余は寧ろ平易なる歷史上の事實論を單簡に述へ諸君の高覽に基督教の確實なるの一斑を供し以て滿足せんとす

第一、基督教事實の頗る不可思議奇怪にして俄かに信じ難きか如き趣きあるは已に前文に述へし所なるか今假りに新約聖書に見るか如き事實をして今日吾人の目前に在りとせゞ如何ん吾人現に基督の我前に在りて種々驚く可き教論を爲し樣々の奇跡異能を現はすを見ば如何ん吾人は斯の如き事は哲學の道理に叶はぬとて目を塞て之を信せざる乎正直に道理を考ふる者にてあらば必ず自ら云はん我は天下の道理を悉知する者に非ず焉ぞ知らん余か理論は過りにして此事實の眞實なるとと其理論考察を後ちよして

先つ虛心平氣事實の如何を穿索すべし斯の如くよして眞よ正直の學者と謂へきあり今一歩を進めて斯の事實よして現よ數千里を距てたる歐米よ在りとせは如何ん身自ら行ひて之を視る能はされは必ずや然るへき他人の證據に依らざる可らず然るよ其知識は斯の如き事の眞否を分つに足り且つ信用すべき正直なる人よして自ら之を聞見穿索するの機會を十分有せし者か一人に非す數人皆な之を十分よ穿索したる者か悉く然りとせば如何ん吾未タ自ら之を見ず故に之を信する能はずと云ふへき乎否あ斯の如き論法にして確實ありとせば人間智識百分の九十九までは虛妄なりとせさる可らず是れ常人の爲さゝ所なり正直ある學者豈之を爲すを得んや今又一歩を進めて數百年千數百年の古に於て斯の如き事ありとせば如何ん是れ固より身自ら聞見する能さる所なり必ず亦他人の證據に依らさる可らず亦之を十分に判斷し得へきの知識を有し之を詳かに穿索し得へきの機會を有したる正直の人にて其證する所皆あ一轍に出て斯の如き人の書したる傳記にて今日に傳はる者少からず而して之を信する者は其時代よりして今日に至るまで甚だ多くあり他語之を云へは歷史上の證據十分なりとせば如何ん假令ひ稍解

し難き事多くありと雖も眞理を愛する者は必ず之を信ぜさるを得ず其證據十分ありと雖も千百餘年前の事は信し難しと云はゞ歴史上の事は悉く虚僞にせさるを得ず是れ正直なる人の爲す所あらんや

今基督教の事之に異あらず不可思議は不可思議あり奇異は奇異なるも尚ほ歴史上の事實たり第一現今之を知るの機會を有したる世界三分一許りの人は之を信す第二、千八百有餘年前に基督なる神人躰なる不可思議の人物ありしが其人ありて以來之か爲めには生命をも惜まさる幾萬の信者連綿絶へずして存するのみか之を信する者年を追ふて益多きを加ふ第三基督教の起りたるは文學書冊もあき大古の事に非ず當時已に學問も大に開けし比にて希臘にソクラチス プレトウ アリストウトル等の諸名家起りたるより三百有餘年の後なり第四基督時代の書冊記錄にして尚ほ今日に存するもの少からず而して基督の一代及ひ弟子等の事跡に關しては其事實を詳に知るべき機會を有し且つ其實否を判斷するに足るべき相應の智識を有し其の已れか信する所を證せんか爲には其の生命をも惜まざりし人々の書き遺せる書冊今日に存す即ち新約聖書是ありされゞ千

八百年後の今日に於けるも其事實の眞僞如何を判斷する左程難きに非す唯新約聖書は愈其弟子等の著はせしや否又其記錄は後世に至ても變更せし所あきや否を判定せゞ之にて其事實の大略を確實にするを得ん

第二、基督教は右に述る如く基督以來連綿として世に行れ之を信する者續々跡を繼きて起りしか故宗教改革の時代（第十六世紀の始め）に至るまて其歴史上の事實を疑ふものあかりしも怪むへきに非るなり但し宗教改革の時に當り改革者在來の天主教に反するに於ては全く此までと其信仰の基礎を異にせさる可らざるに至り從て歴史上の事實も是まで通り傳說のまゝ信するを得ず必ず相當の道理によりて之を正確にせさる可らざる場合に際し之を疑ふもの起るに至れり是れ自然の勢なり

偖て此異說を唱へて最も有名なりしは獨國チユウビンゲン大學の神學博士ボール氏ありとす氏の說を唱道する學者を稱して「チユウビンゲン」派と云ふ之に次て有名なりしは同國のストラオス佛國のレナン兩氏とす英國にては別に學者の注意を喚起すべき程の異論者あらず唯一論戰となりて稍學者の注意を喚起したるは「シユウパルナチユ

ヲルリーヂヨン」と稱する一書の刊行あり此書は元と無名（實ハグレン氏の著あり）にて出版したるが之か始めて出版ありしや人々或る有名なる監督の著はせし所ありとの風評を爲し一時其書の評判世に嘖々たりし其の書は重もに獨國チユウビンゲン派の議論を祖述したる者にて別に新説とは稱す可らざるも英人又は耳新しき所多れば大に不信者の喝采を來たしたり然れども忽ち有名なる學士ライトフート、サンデヤー、ウエスコット、ロウ等の答る所とあり今や學者社會に左程之を重する者なきに至れり

偖てボールはヘゲルの哲學を祖述し之を以て基督教の起原を解説するに應用したり其説たるや基督教の始めにはパウロ派とペテロ派の爭ひよりして種々の聖書起り後之を調和せんか爲め使徒行傳約翰傳等の中庸新説起れりと爲す而して新約聖書中正確なるは唯パウロの羅馬カリンタ第一第二及ひガラタの四書と默示錄の一書にして其餘は悉く使徒後の學者か使徒の名を矯けて著はせしものと爲せり然しボールが最も解説又苦みしはパウルの改心とキリストの復活なり其後氏の説を祖述するカイムの如きは其説の維持し難きを知り幾と保羅の書を皆な正確なるものと爲すに至る

ストラオスの説は「ミシカルシオリー」鬼神説と云ひ基督教の聖書ハ恰も諸國に古へより流布せる神傳説と異ならず眞を考ふべきものゝ非すと爲せり又レナンの説は（レゼンダリーシオリー）流傳説と稱へ其歷史の全躰は眞實なるも當時の人及ひ後世の人が想像にて造り出せる種々の物語を附け加へ幾と其眞を失ふゝ至れりと爲す

此等の説は皆な一時は世人の喝采を博し其流行を逞ふせしも今や歐米諸學者の辨難する所とあり學者間に於ては已に幾と之を首唱する者を見さるゝ至れり而して此の如き異論は基督教の害を爲すして却て大なる益を爲せり何となれば此の如き異論ありたるか爲め是まで格別明かならさりし使徒時代の事跡ハ愈明かにあり基督教の證據益正確とありたればなり此議論の刺激の爲に出版になりたる書籍のみにても其數幾千と云ふを知らず此か基督教を益せしこと圖り知る可らざるなり

第三、今爰に聖書の眞實なる歷史上の證據を擧くるハ到底爲し能ハさる所なれども聊か聖書の正確なる書なるを示さん爲め第二世紀以往なて或ハ聖書を引證し或は聖書に戯す事を書き記したる重もなる學者の名前を掲く可しアイリアスは紀元後百十五年に

生れ百九十年に死せし人にて基督教初代の有名なる神學者にて使徒約翰の弟子彼のポリカルプの弟子ありし其著書にて今日に存する者小からざるが多く聖書を引用せり

ヂョスチンマルタルは初代の熱心なる哲學者あり其生れし時は詳かあらざるが氏か教の爲めに殉死したるは紀元後百六十五年なり氏は元とプレトウの哲學を學ひしが後ち基督教の之に勝れるを悟り之に歸し之を辨護せんか爲め種々の書を著はしたり其書皆ある直接間接に聖書の正確ある證據を爲すものあり

此外使徒約翰の弟子にてスミルナの監督ありしポリカルプ使徒時代に居しイグチーシヨス及ひパウロの書中に見るローマのクレメントの書尚ほ今日に存するが孰れも聖書の事實を證明せざるはなし

斯の如くにして使徒時代の古書を一々審査するときは聖書の正確なるを徵證することは難きに非す假りに二三の疑ふへき所ありとするも聖經歷史の全躰は必ず正確と爲さゝる可らず是れ始め其眞實を疑ふ學者も詳細に之を穿索して達すべきの結着なり

聖經歷史の大躰に於て誤なしとせば如何にして自然の理法を以て基督の一代を解説す

るを得るや先つ基督の奇跡異能を容易に信し難きとするも(一)基督の罪過あき事は如何にして之を解説するを得るや其道德の高尚なるに從つて己の罪過を知ること深くなるは人の常なるが如何にして基督に於てのみ例外の事がある(二)基督の透逸ある教は如何にして之を解説するを得る基督には別に學たる所あるを見す而して時と處の軌範を脫したるの説を爲す是豈奇と謂わさるを得んや(三)基督の事業は如何にして之を解説するを得る傳道を爲す僅かに二年半此世に在る三十二三年に過きず而して人に棄られ耻つべき十字架に懸りて死せり然るに其事業は萬世に傳へて衰へざるのみあらず年を追ふて益盛大に赴けり是をも奇跡と云はずんは他に奇跡とすへきものあからん(四)基督身自ら神の子と稱へアブラハムのあらざる先より存すると爲せり彼れ狂する乎其言行を見るに決して狂者の言行に非るあり彼方便を以て斯の如きの稱を爲すか其身は至誠を以て溢るゝを見るなり此事如何ん然るへき解説あかるべからず

斯の如く公平に基督の事跡を觀察し去るときは彼は神子として其教は神の教と爲さゝるを得さるなり若しや基督教の事跡にして悉く奇異ならば之を信する極めて困難ある

も見るべきの目を以て見れば少しも奇異とすべき所なく悉く道理に叶ふの事たるを知るなり世の基督教を學ふ者俄かに皮相の判斷を爲すことなく十分の忍耐を以て其理を求めば必ず滿足の結果を得るならん是れ余が諸君に向て望む所の要心に外ならざるなり

廣告

植村正久君著　奥野昌綱君　本多康一君序

○再版 **眞理一斑**　全　上等製本　三十五錢　下等製本　三十錢

本書ハ植村正久君か多年勉學の上著述せられしものにして其議論の正確なる文章の秀逸なる我國の宗教書中稀に見る所あり今其目次を左に掲くれは江湖の諸彦其書の一斑を知り玉へ

第一章宗教を總説す其一○第二章宗教を總説す其二○第三章宗教を講究するに必要なる精神を論す○第四章神の存在を論す其一○第五章神の存在を論す其二○第六章神と人との關係を論し併せて祈禱の理を説く○第七章人の靈性無究なるを論す○第八章耶蘇基督を論す○第九章宗教學術の關係を論す

○基督教新聞

○毎週一回發兌○定價壹部（四枚八頁）金三錢○三ヶ月（十三部）前金三十七錢○半ヶ年（二十六部）同七十二錢○一ヶ年（五十二部）同壹圓卅八錢○府外遞送の分は右の外に郵税を申受くべし

基督教新聞は基督教の主義精神を以て日本社會一切の現象を評論記載する唯一の新聞にして其唱道する所ハ眞正の宗教○高潔なる道德○正義なる社會○清潔なる文學○善良なる教育○にて義と愛の空氣を日本社會に充塞せんとするは吾新聞の最も自任する所な

り世上新聞の數頗る多しと雖も高潔富愛なる士君子の讀むべきもの獨り吾基督教新聞あるのみ

○六合雜誌

○毎月一回發兌○定價一冊(四十二頁以上)金八錢○六ヶ月前金四十三錢○一ヶ年同八十錢○右い府の内外を論せず送料を要せず

此雜誌い神學、哲學、修身、學術、教育、政事等凡そ世の風化を補ひ實益を禅はん論說記事を掲ぐるものあり我國雜誌の類少からずと雖とも其議論の高尚ある其主義の純白なる恐らくい此雜誌の右に出るものなからん今回尚ほ一層紙面に改良を加へ益々有名なる諸學士の明論高說を掲載す」明治十三年十月初號を發兌し爾來毎月之を發行し已に百號に及ぐんとす四方の諸君幸に購讀を賜へ

明治廿一年十一月

東京京橋區日吉町二十番地

警醒社

版權登録

明治十九年三月三十日出版御屆
同　年四月　日出版落成
同二十一年十一月廿一日印刷
同　年十一月廿六日增補訂正再版

著者兼發行者　東京麹町區上貳番町貳十二番地　小崎弘道

印刷者　東京京橋區日吉町二十番地　福永文之助

印刷所　東京京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍

發行所　東京京橋區日吉町二十番地　警醒社

版權所有

賣捌所

東京神田區小川町	集成社
同　京橋區南傳馬町	叢書閣
同　京橋區三十間堀	江藤書店
同　京橋區南金六町	神谷書店
同　京橋區銀座三丁目	十字屋
同　神田區錦町一丁目	十字屋
同　京橋區築地二丁目	栗本書店
大坂西區土佐堀三丁目	福音社
神戸元町四丁目二番踏切	福音社
西京寺町通り夷川	福音堂
西京三條通東洞院	クリスチヤンボード
備前岡山榮町	復生堂
伊豫今治米屋町	八木治作
土佐高知本町	樂園堂
仙臺東貳番丁	石黒忠一郎
信州小諸町	片山書店

17
103

17
103

020877-000-8

17-103

政教新論　附録，基督教ヲ信ズルノ理由

小崎　弘道／著

M21

ABI-0710